
NANOHA the origin

召霊使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N A N O H A t h e o r i g i n

【Nコード】

N 9 5 1 2 R

【作者名】

召霊使い

【あらすじ】

青年・齊藤一光は同じ夢ばかりを見るようになった。

それは、後に関わる古代遺失物・レリックを巡る事件の幕開け。

現実では有り得ない自立兵器に襲われ、意を問わずしてミッドチルダへ迷い込んだ一光は、機動六課に協力していく中で彼は才覚を露わにしていく。

テロの最中で見つけた居場所と大切な、守りたい人のために。

J・S・事件から1年。

管理局員になった一光はモバイルデバイスの開発や事件への対応で追われながらも充実した日々を過ごしていた。

その中で、なのは達のデバイスがロストログア指定されていた事で招集がかかる。

そのリストには存在しない筈のセイグリット・ヘルヴィまでロストログア指定されていた。

心当たりのあるアミタは原因を探るため、犯罪者扱いとなった一光となのは達と共に過去に赴く事に。

番外編にてなのはvivid編予定

自分が迷い込んだら設定。厨二病全開？何を言っんですか、悪い
ですか。

プロローグ

夢を見た。

何処か、焼け野原となった街で彼らは向き合っていた。

彼は、剣と銃を合わせた複合兵装を重たそうに引きずり、自分と擦れ違う。

その姿は何処か見たことのある服装だった。

否、服と言うより鎧だ。

よく見ると随所にプレートを見て取ることが出来る。

ズタズタの上着は既に袖を失い、露わになった肩からは出血している。

ズボンには膝当て、脛を守るための装甲。

ゲームやファンタジー作品で見られそうな服装の彼は、
武具を解^パ体^ラして剣だけを取り出す。

振り返るとそこには変なメカがいた。

幾人の少女はそれぞれ固有の武器を持ち、歪んだ笑みを浮かべる男性。

彼の後ろには白い魔法使いを筆頭に少女達がいた。

少女達の中には男性も、青年も混ざっている。

静止画のように動かない、風景の一部とでも言うように。

自分が確認しようと踏み出すと彼は振り返る。

剣を受け取れと言うように、柄を向けて突き出す彼の顔は日の光が邪魔して見えなかった。

「夢……か？」

自分、齊藤一光は目を覚ます。

時刻は夕方六時前、何でこんな時間に起きるかというのは夜勤だからである。

大きなトラブルも病気にも掛からず、平凡と暮らして仕事して。

こんな生活に飽きている一光は、夢をまた思い出してその世界に浸る。

所謂現実逃避だ、現実など逃げ出したいと思うことばかり。

しかし、逃げてばかりでは解決しないと思いながら生きている今日日まで、いや、これからも体験しなければ有り得ない事象に出会すことになった。

「あの剣・・・あれは何なんだ？」

未だに夢の最後シーン^{ラスト}を思い出しながら呟く。

夢に見る、名も解らぬ彼が扱っていたのは、アニメやゲームで強い武器ばかりだった。

解っている武器達だけにすぐに懂れだとか逃避しているなと気が付くのだが、今回は違う。

それに、彼の台詞が今回は鮮明に思い出せて、剣を受け取ったら台詞通りになりそうだった。

「君が切り開け」

何をだ？誰か教えてくれ。

“その時”は何の前触れもなく、唐突に訪れた。

「何………?」

駅前の信号待ち、どうでもいい時間に変化が起きた。

先まで賑わっていたロータリー、通勤通学の人々がいきなり視界から消えた。

「何だ?」

一光は車から降りた。

人の気配はない、ただ見慣れた風景から人が消えた。

まるで別の空間のように。

さらに不安を煽るものがあつた。

ポストのような形状でカメラかセンサーレンズを中間に備え、ミサイルポットを装備した何か。

「うつ!!!?」

背後で、愛車が爆発した。

爆風をもろに受け、押し倒された一光が声を漏らす。

同じ自立兵器、間違いなく兵器だろう。

ソイツがいる、背後の奴はミサイルポットの代わりにケーブルを触手のように伸ばしている。

逃げろと言う本能の警告に従い、一光は逃げ出した。

後に知るガジェット・ドローンは容赦なく追ってきた。

亡き王からの贈り物（前書き）

さてさて、逃走中。

一光「殺す気が作者アアアアアア！！」

作者「安心しろ、瀕死だから」

一光「できるかつ！！」

シグナム「苦労しているな・・・」

亡き王からの贈り物

人間はパニックになると周りが見えなくなる。

今の一光はまさにソレであつた、車の爆発でフロントガラスやボディの金属片が吹っ飛び、左肩に突き刺さっている金属片など気が付かない。

ガジェットは一光を追尾した、一光が角を曲がり、入り組んだ裏路地に逃げ込めば、コンクリート製の壁を突き破ってくる。

冗談ではない、未だ死ぬには若すぎるではないか。

確かに良く「明日は我が身」とか言つてはいたが、こんなの常識すぎる。

そんな非常識に殺されてたまるか、俺は……生きたいんだ！

気が付くと取り壊し寸前の雑居ビルに逃げ込み、隠れていた。

左腕を伝う赤い滴に気が付く、布が濡れて貼り付く感触と壁と背の間に異物があつた。

「っ！？」

無骨な金属片、車のボディの欠片だ。

声にならない悲鳴を上げ、金属片に手を掛ける。

前進に走る激痛に歯を食いしばりながら一気に欠片を引き抜いた。

ブシッ！と血が飛び散る、かなり深く刺さっていたらしい。

左腕は意のままに動かないし、何より長くは放置できない。

早く止血しないといけない、貧血で動けなくなつては事だ。

「ふ……つざけんな！」

低く絞り出した嗚咽を聞く者はいない、一光は外の様子を窺いながら刺さっていた金属片を出来るだけ遠くに投げた。

そんな一光がまた逃げ出すと同時刻、ピンクの長い髪のポニーテールが特徴的な女性が、長刀を振るう。

数機のカジエツトが、レーザーやミサイルを撃ちかけるが女性は軽々と避ける。

同時に長刀を構え、一気に間合いを縮めるソレは剣士の歩法だろ
う。

撃鉄音と共に唾辺りから煙を排出、同時に刀身が燃え上がる。

「紫電一閃！」

気合い一閃、二機のガジェットが同時に斜めにずれて一拍の間を
おいて起爆する。

「何かを狙って動いているな・・・」

女性はそれを悟る、ガジェットは明らかに何かを探していた。

それが何かを知る前に、といっても相手に聞いても返答はない。
何せ敵は無人の自立兵器、目的を聞いて答えてくれれば苦労はしな
い。

「シグナム、そっちは済んだか？」

上空からの掛け声に女性・シグナムは空を見上げた。

赤を基調にしたゴスロリワンピースの少女がハンマー片手に飛ん
できている。

「ああ、ヴィータ。ガジェットが放たれた目的は大凡見当がついた
よ。」

「そっちなもか、実はこっちの方で奇妙なもんを見つけた。」

「奇妙なものとはなんだ？」

少女・ヴィータにシグナムは問う、人が居ない結界内で見つけたのは血だったとヴィータは話す。

常人が活動できない結界の中で、血があるなんて不自然だ。シグナムやヴィータのような魔導師なら分かるが管理局から派遣されたのは二人だけ、後は艦で待機している。

「まさか、な・・・ヴィータ、主に連絡して生存者の搜索に移ろう。素質ある者が巻き込まれている可能性がある。」

「お、おい！素質ある者ってなんだよ！？」

二人のやり取りから数百メートル離れた位置で、素質ある者と言われた一光はふら付いてシャッターにもたれかかっていた。

不味い、血を失い過ぎた。足の力を入れた途端に抜けていく。

「死ぬなんて・・・御免だ。」

何やら光る人影が見える・・・末期か？末期だろう。

そう、死にたくはない。身体は動く、まだ単なる貧血だろうな。なんとかなる筈だ・・・何せ、オレは常になんとかしてきた。

一光はそう思うがどうもそうは転ばないようだ、左肩からはシャレにならん位の出血。加えて足がふらつき、酔っ払いのごとく真っすぐ歩けない。

死にたくないかと思って、所詮は儚い物か。

そう、一光は思うとニヒルな笑いを浮かべた。

現実的ではない、非現実的出来事で死ぬか。説明などつかないだろうし、あんな自立兵器、どこの国でも実用化できてないだろう。

あー、死ぬ前に女子と付き合ってみたかった。と諦めムード全開で一光は天を仰ぐ。

淡く光る、金紗の髪を後頭部でお団子状にした少女は、投げ出した掌に剣の柄を握らせてくれた。

ダルさやふら付き、身体が訴えていた異常は消えて、少女は優しく微笑むと言う。

『運命の放浪者。かつて渡し損ねた剣を今お渡しします。今度は自らを犠牲にする事なぞ無き様、火の粉を振り払う力を与えましょう。フォーミュラ・エルトリア・・・セイグリット・ヴァイパー、かの者に力を』

少女が言って微笑む、一光は剣と少女を相互に何度か見た。

疑問が浮かぶ、かつて渡し損ねた？

一光はこの少女を知らない。

「キミは・・・一体誰なんだ？」

その疑問に少女は答えないまま笑顔で消えた。

一光は同時に迫るガジェットを大剣で両断する、遠心力を利用した回転斬りは見事にガジェットを捕らえ、鉄屑に変えた。

不思議だ、出来る・・・動く、何故かは分からないがアニメのような動きも出来そうな程力がわきあがる！

大剣は次いで二丁拳銃に変化、同時に一光は引き金を引く。

「セイグリット・ヴァイパー！」

聞いた銘を叫ぶ、それは大剣であり、二丁拳銃であり、片手剣でもある少女から渡された剣、ちから後に知るデバイスだった。

『はい、マスター・・・形状変化・片手剣』フェンサー

触手タイプのガジェットにあわせ形態を変える、今度は双剣。

一光が動き、改良ガジェットが動くと改良ガジェットの背後で銃撃によってハチの巣にされたミサイルコンテナ装備ガジェットが爆散する。

触手のようなケーブルで攻撃するガジェットに、一光は左の剣を振ってケーブルを切断し、次いで右の剣をレンズに突き立てた。

バチバチとショートするが、気になど止めずに一気に振り下し、両断。

間合いを取って、残りのガジェットから離れる。

「ハッ、ハッ……勘弁願いたいね。まったく！」

地面に奇妙な文様が描かれ、その陣の中から同型のガジェットが転送されてくる。

一光は迷わずに銃にチェンジ^{ザッパ}、弾雨を浴びせた。しかし、何事も無限に撃てるなんて都合のいい物はない。

強力な攻撃にはそれなりにコストを払わなければならない、魔法と出会って初戦、誰かに教わったわけでもない一光にとって自身の魔力量とその配分など気にも留めなかった。

「ヤベっ……!？」

急に足の力が抜け、いや、足だけではなく全身の力が抜けて倒れてしまう。

魔力エンプティ、様は魔力を使いきったのだ。

（意識が薄れ……駄目だ、たも……て……ね……）

薄れゆく意識の中で一光は死を覚悟した。

シグナムが一光を発見したのは、二回の爆音と転送され続けるガジェットの撃破を試みる場面であった。

この時、救いはシグナムとヴィータが発見し駆けつけた事だけではなく、黒幕陣営にも対人能力の強化个体、主に急所など致命的部分を狙う設定のガジェットが尽きた事である。

「ヴィータ、あれを見る！」

「何だ？アイツ……デバイスもっているじゃねえか！」

降り立ったシグナムとヴィータは、その状況に驚きを隠しきれなかった。

そこには青年が倒れている。ダウンコートは無残に破れ、中の綿が出ている。左肩の出血から見てヴィータの見つけた血痕の主に違いないだろう。

シグナムもこの世界、地球で生活した事があるから分かるのだがこの世界に魔法文化はない、加えて言うなら稀にリンカーコアを持った魔法の資質を秘めた者が現れるのだが今回はその希少種を狙ったものではないか？とシグナムは憶測を立てている。

そうなるとこの青年は、ガジェットに襲われていて何らかの要因でデバイスを入手して反撃と言った所か。

何にせよ、止血して回復を待たないと話は聞けそうにない。

「こちらシグナム、アースラ応答願います」

シグナムは取り合えずと部隊長と連絡を取るべく通信回線を開く。

ヴィータは倒れている青年をハンマーで突いたり、殴れば起きるかな？とか言っている。

あえて言おう、逆だ。永眠するわアホ。

『はい、こちらアースラ。』

「負傷者を発見しました、出血と衰弱が酷く一般の救助が間に合いそうにありません。その負傷者ですが・・・」

シグナムも気になっていた青年の手に目を向けた。

拳銃であるがそれは実弾を打ち出す物でもなければモデルガンと言っ分けでもない。

シグナムの持つ剣、ヴィータのハンマーと同じデバイスである。

『どないしたん？その負傷がどうしたって』

関西弁の呑気な声が聞こえ、シグナムは深呼吸を一つ挟んで告げる。

「デバイスを持っているんです。」

『・・・分かった。その人はうちらで保護しよ、シャーリー。転送ゲート開いてシグナムとヴィータを回収してな。どうやら出張

任務は終了や』

モニターの中で茶髪で短髪の穏やかそうな少女はすぐに表情を険しくして、通信士に指示を出し、踵を返す。

亡き王からの贈り物（後書き）

一光のデバイス形状はなのはPSPの新キャラと同じです。
因み主役能力値は「時空管理局に入った」で決めました。

そこは機動六課

荒野で、一光はセイグリットヴァイパー^{ザンパー}を銃形態で手に収め、夢に現れた青年と向き合ってた。

「アンタは誰だ？」

その問いに意味はない。

青年の持つ剣は^{グレイエッジ}大剣のセイグリットヴァイパー、そして防護服も損傷している物ではなく無傷の物に換えられている。

一光の問いに青年も言い返す。

「運命の放浪者……」

「運命の放浪者？」

意味が分からない、何を言いたんだこいつは？

「何を言つて……」

「訳の分からないって顔をしているな。それもそうか、そちらの世界は争いが絶えずに起き散るわけではないからな」

自嘲気味の台詞に啞然とする。この青年は戦いに明け暮れているらしい。

「俺は約束を果たせなかった、世界を平和にするって約束を。」

「はあ？」

スケールでかいな、ロープレじゃないんだから一人に出来ることではないだろうに。

あ、ロープレでも何人かの仲間は連れているか。

「予言された世界を滅ぼす災厄、それを回避したくてな」

「なんの話だ？」

青年は聞く耳を持たない様に語り続ける、よく見ると暗がりで最初は見えなかったが自分に似ているような。

「でも、俺には無理だった。だが、お前になら……………」

夢からの覚醒は、いつものように突然やってきた。

「夢……………ってどこどこだ!？」

そこは見慣れた自室ではなく、どこかの医務室だった。薬品の並ぶ

棚、白いシーツのベッドに窓から外を眺めみるとそこには芝生がある。

どうやら中庭らしい、って何を観察しているんだ。

「あら、ようやくお目覚めね?」

掛けられた声は柔らかく、振り返ると女性がいた。

視た感じは二十代後半かそのくらいだろうか。

「気分はどう?何か質問はあるかしら」

柔らかい印象を受ける女性は聞いてくる。一光は最初の本題をぶつけた。

「ここ、どこでしょうか?」

「ミッドチルダにある機動六課の医務室って言っても分からないかしら」

いつもの調子ならここで親指を立てていただろうさ、しかし、一光もノリで生きる人間ではない。聞き覚えのない地名に首をかしげる。

外国か?はて、拉致にでもあったのか。

「あ、忘れてたけど私はシャルマっていうの。よろしくね、齊藤一光くん」

「ああ、ご親切にどうも……何で名前知っているの?」

シャルは首をかしげるが一光は一人悩んでいく、何が起きて名前が伝わっているのか？

当たり前だがシャルと一光は初対面である、名乗った覚えもない。

驚く事はこれで終わりではなかった。

医務室備え付けの鏡に映った姿は上半身が裸、左肩から胴体は包帯でグルグル巻き。

怪我のぐわいを見ればこの程度で済まないのは明白だ、手術していても可笑しくはないのだが。

さらに僅かに覚えているのはセイグリットヴァイパー、あの不思議ウエポンと気絶しているんだろう自分を小突いていたゴスロリ少女だ。

もう一人居た気がするが覚えていない。

「はやてちゃ・・・部隊長に連絡するからちょっと待っててね。詳しい話を聞けるから」

シャルはそう告げて医務室を出て行った。詳しい話を聞けるのはありがたいが、はて。

あの後、本当に何があったのか？何で医務室で手当てされ、輸血を受けているんだろう？しかも、輸血パックの中身を見る限り、かなり長い時間輸血されていたみたいだし。

ほとんど時間がたたない内に主要と思われるメンツが揃った。

そして、その中には唯一見覚えのある何かで小突いてくれた少女も居たわけで。

「……ここは学校ですか？」

一光が最初に抱いた感想が不意に口に出た。

確かシャルは「部隊長に連絡してくる」と言ったのだが、何で集まった連中の大半が一光と同世代くらいなのか。

「んー、何も知らないと当然の反応やな」

と関西弁の少女が言う。

何故か、仕方ないと言われた。

仮に、彼女たちが組織の幹部ならとんでもない出世である。

さぞかし優秀なんだろう。

「ここは学校ではない。それに齊藤、お前には聞きたいことがあるから保護した。」

うむ、ピンク髪ポニーテールの姉さんがあの時にいたもう一人のようだ。

「それじゃ、先ずは自己紹介からやね。私はこの部隊、機動六課の部隊長の八神はやてや。よろしゅうな」

関西弁少女ことはやてがすんごく軽い感じで自己紹介。

「私はフェイト・T・ハラオウン、一様分隊長やってます」

金髪ストレートヘアの少女がフェイト、何でか一様と言った。
事実なら胸を張ればいいような気がする。

「名乗り遅れたが、シグナムだ。」

こちらは自信に満ちている、こう言っつのを姉御肌と言っつのだろう
か。

「ヴィータだ。」

うん、赤チビではないらしい。

当然と言えば当然だ。

「私はなのは、高町なのはって言います。カズ君とは良く顔を合わせ
るかな」

となのはが自己紹介、サイドポニーが印象的である。

さて、大抵聞き終えた所で質問する。

「質問なんだけど、保護された時なんか持ってなかった？」

取りあえずどうして此処にいるか解ったので、一光は扱った武器・
セイグリットヴァイパーについて尋ねる。

「ああ、ウチらの質問全部答えたら返してもええよ」

「ホントか？」

「ちよっ！はやて、いくら何でも」

はやてにフェイトが抗議する、この前にどんなやり取りがあったかは知らないがセイグリットヴァイパーがあるとないでは何か気持ち的に違う。

備えあれば憂いなしって奴だろうか。

「解った、素直に答えるよ。」

するとなのはとシグナムは「あちゃ〜」と言う感じで表情が変化している。

シグナムに至っては分かりやすくおでこを手で押さえている。

「てな分けてセイグリットヴァイパーを使ってその、ガジェット？を落としたんだけど」

さらりと答えること約二時間、はやては所々思い当たる節があるように相槌を打っていた。

「ほんとにここは地球じゃないの？」

最初の質問に戻ると全員が頷いた。

これには何とも言えず笑うしかなく、帰る手段を用意してくれる
とのことで、それまでは惜しみなく協力しようと約束した。

「よっしゃ！」

「よっしゃ？」

はやてがガッツポーズを取ると一光は首を傾げ、短く身震いをし、
質問した。

「悪いんだけど、トイレの場所教えてくれ。」

「うん、それじゃ案内するから行こうか？」

なのはが引き受けてくれて、一光は立ち上がる。
流石に未だふらつくようだ。

「うおっ！」

いきなり足を滑らせ、一光は倒れる。

「あっ！危な、きゃっ！？」

支えようとしたなのは、しかし、支えきれずに一光にのし掛かる
形となった。

ヴィータは啞然と、シグナムは、フツと鼻を鳴らし、シャマルと

フェイトは手で口を押さえて顔を赤くして、はやては二人と行動こそ同じだが何やら悪戯な笑みを浮かべている。

至近距離になのはの顔がある。

しかし、可愛いとか不謹慎にも思ってしまうのだが、そんな事を思っている場合ではない。

「ご、ごめん！今退くからっ」

なのはが退き、左肩の包帯に赤い液体が滲んでいくのが見て取れた。

どうやら、傷が開いたらしい。

「へっ、ざまーみる！」

「ガキかお前は！？」

ヴィータにツッコむとはやての右肩にシャマルと同じリアクションを取る人形サイズの何かを見つけた。

いかん、目までイカレたか。

「はやてさん、そちらのミニマムガールは？」

そう問いかけつつ立ち上がる、はやては今気づいたと言うようにハッとして、ミニマムガールことリインが抗議する。

「リインはミニマムガールではないのですよー！リインフォース？

「はやてちゃんのユニゾンです。せつかくデバイスを運んできたのに、何やら色気様に……」

「ちょっとリイン、何言ってるのかな!？」

咎めてるなのはも若干頬を赤く染めている、はあ。

こんなギャルゲーみたいにフラグイベントを立てている場合にはないはずなのに。

『そうですね、マスター。』

うん、流石はセイグリットヴァイパーだ。

何故か人の心を読みやがった。

「そや、こんな事もあって丁度ええ。なのは隊長、カズ君にいろいろ教えたってな」

「は、はやてちゃん!？」

一光としては誰から仕事内容を教わろうと同じなんだが、はやての言い回しも悪いのだろう。

必死になのはが抗議って言つか驚いている。

「なのはに手えだしたら承知しねえからな？」

「承知」

何をぞつとしているのかヴィータに返答。

「あれは事故だね？カズ君の事信じてるから」

何をだ？と聞き返すのは止めておこう、フェイトの目は笑っていない。

アレは黒い笑いだ。

「精々、新人達には負けぬように精進するんだな」

まともだが、何か堅いシグナム。

もしかと思うが唯一の常識人かも知れない。

それぞれ職務に戻る中、なのはだけは一光がダウンしている間に調べた事を説明してくれた。

魔力総量をランクで表す、魔力変換は解りやすく言えば属性。

魔法術式の特徴、一光は今となっては非常にレアなフォーミュラ・エルトリアだそうだ。

そこは機動六課（後書き）

次項はオリ主データ

オリ主ステータス（前書き）

取り合えずJ・S・事件編決定

オリ主ステータス

・ さいとうかずひろ
齊藤一光

・ 年齢：21歳

・ 身長：179cm

・ 体重：75？

・ 趣味：読書・昼寝・森林浴・散歩等

・ デバイス：セイグリットヴァイパー・GAT-X105A：ストライク・セイグリット・ヘルヴィ

・ 魔法体系：魔力運用技術、フォーミュラ・エルトリア

・ 魔力変換資質：炎・氷・電気

・ 備考

二十一年間普通に生きてきたサラリーマンの青年、大抵はすべてそつなくこなす工場勤務だった。

平凡だったが魔力資質、リンカーコアを持っていたために改良ガジ

エットドローン性能実験に巻き込まれる事をきっかけに魔法と出会う。

アルハザード、旧暦の時代に死した「運命の放浪者」の力をそっくり受け継いでいる。

実力面ではフォワードを短期間で凌ぐほど、何でもかと言えばなのは始めに隊長メンバーから死に迫るほどの模擬戦を繰り返しているからである。

失血で二日間意識不明の間に魔力変換資質を三つ持っている、魔力総量SSランクと前代未聞の結果を打ち立てた。

或る意味でイレギュラーな人物。

いきなり手にしたセイグリットヴァイパーを扱いきる等の特異性を見せて六課にも即順応。

ヴァイスら整備班とは割と仲が良い。

本人いわく「普通の生活」らしい。

因みに平気で休む時間を削り訓練している。

事件中に合流を果たした親友・藤原緋色が愛機を元にバリアジャケツトを超える強度・機動性を確保した新型をシャーリーと共同開発中試作型モビルバイスのテスターを引き受けた。

機動六課出張任務中に自身の失踪した事を知り、一度帰宅した際に両親が引き取った(らしい)少女・アミティエ・フローリアンに発

見されるミスを犯している為、仕方なく帰宅。

合流時は激しく動揺して即効何があったか藤原に見抜かれていた。

地上本部襲撃後、ストライクの大破でJ・S・事件中にモビルデバイスを使用する事はなくなった。

通常の魔導師としても成長し、高い戦力として決戦に参加。

セイグリットの改修にも立ち会い、改修基本プランは自ら作成。完成したセイグリットで出撃している。

ここぞと言う所でミスしたり、止めを刺しきる事が出来ない等の甘い面が悪く出る事がある。

本人の自覚がないが機動六課で意外と人気な協力者、なのはやフェイト、本編であんまり出番のないギンガからも好意を抱かれています。りするザ・朴念仁。

お酒を飲んでも他人を巻き込まない様に（前書き）

一光「おい作者」

作者「何だ、おいしい奴め。羨ましいわ!!」

一光「なら書くな!てか、これじゃフェイトもなのはも別キャラだろ!」

はやて「うちは?」

作者「安心しろ、白い悪魔とタヌキはそのままだ。」

なの・はや「ちょっと頭冷やそうか?」

作者「うむ、俺は死なんぞ!」

スバル「取り合えず、始まります!」

お酒を飲んでも他人を巻き込まない様に

その日、時は夕食時。

機動六課に惜しみない協力を約束してしまった一光はなのはに一通りの施設を案内され、今は食堂にいる。

はやてから新人まで、そして親切に日本語で「齊藤一光、機動六課入隊パーティー」とある。

「……………なんじゃこりゃ？」

「なんや、反応薄いなあ。もっと大仰に驚かんの？」

はやての期待は見事に裏切られた、もとい裏切った。

「うー。あな、俺はまだビバ貧血なんですよ？」

「その点については心配無用や、料理は鉄分豊富なものを厳選してあるし」

「あるだろ！幾ら傷が魔法で消えたとは言え、無くした血は戻らんし！ー！」

テンションの高騰は不味い、未だふらつくし立つのも辛くなる。

「なら、取りあえず食べようか？スバルみたいに」

なのはが飽きれ笑いを浮かべて言う。

テーブルには無論、個人用の取り皿が有るのだが一人で不参加者の取り皿を乱用する青髪のボーイッシュな少女がこれでもかと盛り付けている。

因みに包帯は取り替え、何故か用意してあつた管理局員の制服を一光は身に着けている。

名前はやはり財布にしまっていた免許から知れたらしい。

「なのはさん、貴方は俺を殺す気ですか？主に食事量的な意味で」

既に棒読みである、始めてみる光景だがまあ何れ慣れるだろう。

「ささっ主役が着いた所で始めよか！みんな適度に息抜きして、明日からガンバロウ！！」

「聞いてないよ、この娘は！！」

こうなれば自棄である、取りあえず、元くらは取らねば気が済まない。

まあ、ただ喰いではあるが。

「貴方が齊藤さんですよね？」

料理をとっていると先ほどの大食らいガールを始めにオレンジ髪
のツインテール少女が話しかけてきた。

「いかにも」

視線は次の料理にしか向いていない一光、しかし、すぐに年齢的
に働けるのか不明な二人を見つけた。

「君らは……」

「初めまして、エリオ・モンディアルです！」

「キャロ・ル・ルシエです。」

自己紹介する二人は明らかに十歳前後である。

驚いているとフェイトが才能さえあれば幼くして管理局にいるの
はおかしくはないと教えてくれた。

かというフェイトやなのはも十歳前後から管理局にいるらしい、
一光からすれば想像もつかない。

「私はティアナ・ランスターと言います。こっちのバカはスバル・
ナカジマ。」

「ティア、バカは酷いよ！」

スバルは余り嫌がる素振りがない所を見るとティアナとは付き合いが長いのだろう。

「あの、実戦を経験されたそうですけど……」

ティアナの問いにハツとする、未だに半信半疑だけれどセイグリツトは手元にある。

今居るのは異世界で、その自衛隊的組織の歓迎パーティー会場。

「今でも、夢見てんじゃないかって思うけど……現実なんだよなあ」

感慨深く呟いた、するとさらに人が集まってくる。

「よう、俺はヴァイスってんだ。なあ一光、お前はどの部署に協力するんだ？」

陽気な兄貴的ヴァイスに問われ、少しばかり考える。

機動六課も幾つか部署を持っているから当然だが、なのはの話ではロストロギア・レリック専任の部隊だそうだ。

そうなると一様適正有りのイレギュラーは、訓練も兼ねて前線か実働部隊だろう。

「カズ君はフォワードのバックアップ、主に隊長と行動や」

どっからかフラフラとはやてが現れる、顔は赤く染まっており、にへらあゝと笑っている。

不気味だ、もの凄く。

「どうして、うわっ！」

右にはやて、次いで左に衝撃。

医療に魔法を取り込んでいるのは凄い、もう傷は塞がって跡形もない。

冒頭で述べているとおり傷はない、でも貧血である。

「うゝ、フラフラするう」

「な、なのはさん？」

スバルだけでなく全員がその光景に啞然とした。

まあ、当然ではある。

なのはとはやては酔っている。

それも泥酔、酒は飲んでも飲まれるなどは良く言ったもんだ。

「おい、二人とも酒臭いんだけど？」

「お酒え？そんなの飲んでない」

「そつや、何か癖ある水飲んだだけや」

「それだろっ！十中八九間違いはない！！」

他男性局員から見たら羨ましい光景、両手に花！でハイレベル美少女のサンドイッチ。

因みに理性は容赦なく削られる、それはもうがりがり、ぱりぱりと。

そんな惨状にエリオは啞然とし、顔が赤く染まったフェイトがユラユラと前進開始。

「カズ……………」

振り向くや一光は逃げに転じた。

さっきまで貧血で倒れそうとか言っていた割にはしっかりと走り、会場から脱走したのだ。

（危ない……理性が危険信号アラートを発している！間違いを犯した日には……………）

そこまで考えてやめた、そこから先は恐ろしすぎて想像もしたくない。他人の色恋沙汰や不倫とかドロドロした話は割と好きだが自分がそんな惨事に見舞われるのはごめんだ。

「まったく、誰だよあの三人に酒なんて盛ったのは！」

隊舎正面玄関まで逃走を図ってみて大成功、一気に愚痴を吐き捨てると背後に人の気配がした、非参加者も居たようだが、その人たちであってほしいと願うが今度はセイグリットを起動。

幾つもの防御魔法で編みあげられたバリアジャケットを纏う、全体的にライダースーツに見えなくもない。紺色の半袖ジャケットに紺のアンダーシャツ、黒いズボンには脛部分を覆う装甲板が内包され、両手にフィンガーレスグローブを装着。

まさに、逃げの準備・戦闘態勢が整ったところで、振り返るとヴィータがいた。

「な、何をしているんですか？」

「それはこっちの台詞だ。せつかくお前の為のパーティだぞ、逃げ出す奴があるか」

「なら、あの三人をどうにかしてくれ。俺が持たん！いろんな意味で」

「ヴァイスが理解出来ねえつつてた。それはそうとあんなったなのはとフェイトから逃げんのは自殺行為だぞ。」

「何故？」

「ああ、そろそろ来るころか。結界は張ってあるからエース二人相手に頑張るこつたな」

「はあ！？」

刹那、ヴィータを咎める間もなく白いマントが印象的なバリアジャケットを纏った美少女が突っ込んできた。

因みに聞こう、高速タックルを誰が避けられる？ああ、ドラなんならこの人なら余裕でしょうな。

「グボホッ!？」

「んー捕まえたあゝ」

酔いのまわったフェイトである、質の悪い事に泥酔でも魔法のキレは衰えない。

しっかりと抱きついていてるフェイトから逃れようともがけばもがくほど、胸が当たる訳で硬直するしかない一光は次に悪魔の閃光を見た。

「ねえ、何しているのかな？」

素晴らしい圧迫感、これなら連邦の白い悪魔も真っ青であろう・・・ああ、死んだかも。

「いや落ち着こう！ヴィータさん！そんなところで手を合わせてないでなのはさんを止めて!!！」

夜に太陽、いいえ違います・・・星砕き砲の輝きです。

頼みの綱にすぎるが蜘蛛の糸だったようで、てか始めっから助ける気ゼロのエキストラの様に。

「ヤダ、あたしゃまだ死にたくないしな。はやてが居ないだけましと思え」

「んー、カズとなら〜」

駄目だ、フェイトは既に錯乱した様子。でもこんな美人に抱きしめられて死ねるなら良いかも。

『良いんですか？マスター、せっかく間違わないようにした逃亡が泡ですよ？水泡ですよ！』

「そうだ！なのは達は酔ってんの！！約数時間前に初対面だった男と心中する気が執務官！！」

取り合えず、一光は思いつく限り叫んでみたが。

「少し、頭冷やそうか？」

酔って暴徒になったなには意味もなく、閃光の中に消えた。

慣れない仕事はハードワーク

結界のおかげか爆心地は被害ゼロ、アレだけの物が放たれて何も壊れなかったのは奇跡、それにはやて、なのは、フェイトはあの後すぐに倒れるように眠ったらしい。

「だから、確かに何も惜しまずと言っただけ」

場所は機動六課オフィス、そこで一光は一人呟いていた。

先ず仕事量である、基礎を教わって直ぐに投げ出された。

その後、容赦なく新人達から削り取った仕事をバンバン上乘せするのだ。

「これで残業するとか無理じゃね？無理無理無理！」

愚痴りながらもしつかりこなすところがある意味真面目だ。

「あんまり根を詰めると倒れるよ？」

声を掛けられた、振り向くとフェイトが居る。

何気ない気遣いが嬉しい、なのはは教導で忙しく、はやてはアレで部長だから当然業務は疎かに出来ない。

フェイトは今追っているレリックの悪用、次元犯罪者の捜査だそうでこちらにも余り進展がないらしい。

ほんで、慣れないディスクワークに悪戦苦闘して深夜になると一光とフェイト、なのはしかないのだ。

「あ、ああ。気をつけるけど・・・終わらないことには」

『また寝ず訓練ですかね？』

セイグリットが危惧すること続けた。

そう、一光の場合は特に訓練に時間が掛かる。

三つも魔力変換資質を持つ分、魔法のバリエーションは様々だろうがおいそれと出来るものではない。

例え、デバイスの補助があっても同じで、一光はこのところ殆ど寝ないで訓練していた。

寮の部屋は訓練関係の本で一杯、まあ何とか幾つか魔法を修得までに至ったが、それでも指で数えるくらいだ。

「それじゃあ、殆ど寝てないの!？」

「ん？おう。」

啞然とするフェイト、それはそうだろう。徹夜ですとか言っというキーをたたく指は正確に、しかも目もぱっちり開いている。次から

次へと書類を処理していく姿は本当に徹夜したのか疑わしい程の速度だ。

（少しはやてにカズの仕事減らすように言わなきゃ・・・）

十年のキャリアがあるフェイト達でさえ、二十四時間勤務は辛いし、幾ら訓練校を出ようと弱音を上げる新人は少ない。

エリオやキャロは、本当によくやってくれている。仕事に慣れていないとは言え、弱音も吐かずにしっかりと勤務。しかし、スバルはディスクワークが苦手で遅く、ティアナだけではカバーできないとの処置でもコレはない。

「さて、今から午前中の訓練か・・・」

『頑張りましょう、そう言えば先日の酒盛り、犯人はシャマル先生だそうですね。』

「なん、何ですと？」

気持ち動きが硬いとフェイトは見ていて思った。一光は酒に嫌な思い出でもあるのだろうか？

因みに言えばなのはとフェイト、はやてはあの夜の出来事を覚えていない。

一光は医務室のベッドで一夜を過ごす羽目になり、結界を張っていたヴィータは呆れ笑いと言つかさっそくやったかみたいな事を呟いて酔い潰れたなのはを隊舎に運んでいた。セイグリットがこんな事を知っているのはメンテ及び構造調査でシャリオ、通称シャーリー

に聞いたそうだ。さらに言えば、デバイスには愛称設定がある。ニックネーム

正規の名称では長い等の理由、たぶん違うけど一光はそう思っているから、ヴァイパーを省いてセイグリットと呼ぶようになった。

そ、フェイトも何故医務室に運ばれたか覚えていないのだ。まわりに聞いてもはぐらかして正確な返答は帰ってこない。

唯一、まともなのがシグナムの、

「まあ、頑張るのだな」

だった、何を頑張れと？と言うのがフェイトの心境である。幾ら聞いても一光からは答えが聞けてないのだ。

「倒れないように気をつけてね。訓練中に辛くなったらなのは言
つて・・・」

「生きてたらね、フェイトさんの気遣いは嬉しいけど・・・」

オフィスを出る時の諦め顔にフェイトは首をかしげた。

「おせえ！」

因みに訓練場ではスパルタンなヴィータが待っていた。スバル達は正規の訓練を受けている、これははやての指示で即戦力になってほしいからという案に「人は追い込まれると活路を見出すって言う」と一光の呟きから隊長陣と繰り返し模擬戦となった。

「煩い！即日敷地内地図覚えられるかつ！」

「じゃあなんで間に合ってた！？遅刻してその理由なら分かるけどよおー！」

「分かるんかつ！それはこれだ。今朝四時にやとこさ形になった・・・」

『エクシースモードです』

「そう、それ！」

「はあ？」

「まあ見ればわかる・・・ヌン！」

バリアジャケットの上に薄い層が出来て青白い電撃が全身を覆う、一光は傍から見れば、見なくても帯電している。電気の魔力変換資質を利用した活性化^{エクシース}、反射速度を大いに高めてくれる。

これは、言つなれば常にブリツツアクションで、高速移動が可能なのだが・・・。

「なあ、何回ぶつかったんだよ？」

「数えてない、ぶっちゃけこれやらんと間に合わないし、仕事も終わらんし、寝落ちする」

既に何度も衝突を繰り返して擦り傷だらけだった一光にヴィータは呆れた。これでは持たんだろう、身体が。

「最後の寝落ちってなんだよ、おい！」

『徹夜ですよ、ヴィータ副隊長』

代わりにセイグリットが返答、デバイス・グラーファイゼンを握る手に力がこもる。

前はシグナムで死に物狂いつて聞いていたが、そうか。あたしはそんなに舐められていたのか、ほう・・・殺すっ！

ヴィータの中で決意が固まった。

「それ、実戦でも宛に出来んだろうな！？」

「それを確認するために模擬戦するんでしょうが」

銃形態と片手剣形態、因みに右が銃、左が剣である。

互いに身を低く、臨戦態勢を取ると毎度の審判役、リインがアラームを鳴らした。

「それじゃ、行くですよー！」

同時に動く、一光が跳躍し、それを追う形でヴィータがハンマーフ
オームのグラーファイゼンを振り上げる。

牽制に放たれたショットガンアイス、因みこれは銃ザッパでのデフォルト
物理射撃で、これも早朝に確立させた魔法だ。一光は攻撃に炎の変
換資質、移動補助に電気の変換資質、射撃に凍結の変換資質を使用
し使い分けることで即興ながらスタイルを確立させている。

十年のキャリア持ちなら、こんな子供だましは手の内が知ればす
ぐに対処できるのだが。

「そんなもんか!？」

アイゼンで叩き砕く、牽制はむなくも迎撃されて水蒸気に戻る。
ヴィータが次いで捕らえたのは、落下速度を利用した攻撃を放つ一
光である。

「お次は・・・ホムラレンガジン 火焰煉瓦刃！」

これはシグナムの紫電一閃のサル真似だ、しかし、形にするだけで
も初心者には出来ない筈、ここ数日寝てないで訓練と言うのは伊達
ではないとヴィータは思うが。

「あめえんだよ!!」

「・・・やっぱ駄目か」

「なう!？」

直撃破した筈なのに、一光は背後から収束砲のチャージを終えてい

た。

「そんじゃ行くぞ、ブレイズキャノン！」

「くそっ！」

一光の魔力光は蒼い、その癖熱量を持った砲撃を放つ。ヴィータは直撃すれすれで身体を捻り、やり過ぎすとカートリッジを一発消費する。

『当たり前せんね、マスター』

距離を保ちつつ、逃げに転じた一光はセイグリットの呟きを首肯いた。

「そりゃあ、な。向こうは熟練者だ、おいそれと当てられるわけないだろ……それに俺もう起きてられないっばいし」

『は？マスター、まさか寝落ちですか？リアルに旅立てますよ！？』

セイグリットの言う通り、今はビルの側面に掴まっている状態で、高さにしてやく三十はある。そんな所から落ちたら、言わずと知れている。

「おめーを舐めてた、でも……これでお終いだコンニャロー！」

ヴィータがコマのように、いや、ロケットの推進力を遠心力で利用している、丁度ハンマー投げの要領だ。

「ラケーテン！」

「防げっかな？」

『無理でしょうね』

一光とセイグリットは以外と似たもの同士かもしれない、ラケーテンハンマーを眺めつつ、同意見。そんなのお構いなしにヴィータはアイゼンを振るう。

「ハンマー！！」

訓練を終えたフォワードは、そんな模擬戦を観戦していた。

「みんなは絶対真似しないでね？徹夜で自主トレとか」

なのはがモニターで一光のラケーテンハンマー直撃ライブ映像を流しながら解説している。

「こうなるから。みんなにはヴィータ副隊長にやられる事はないけど、あーあ、カズ君生きてるかな」

土煙が上がっている、まるでビルの倒壊現場のように。生きていた
らきつともはや人じゃないだろうなと思うティアナがいるんだが。

「あの、一樣生きているとは思います」

「はい」

スターズコンビがフォローした。

『生きてますね、ほんとマスターが頑丈で助かります。』

起きた一光にセイグリットが呟いた。

訓練終了間際に蘇生、気がついた一光は取り合えず、収束砲とエク
スーズモード、それからベルカ式近接魔法の訓練をフォワード達と
受けた。主にヴィータが担当し、疲労困憊を通り越して過労死する
のではないかと心配になっただけらしい。

誰がと言えば一光本人である。

「俺、人間かな？腕切ったら水銀とか出てこないかな……」

「何言ってるんですか、齊藤さんは人間ですよ。多分」

「多分！？多分ってなん・・・確かに疑わしいよなあ」

昼休み、ノリと勢いで午前に仕事を消化に成功し二日ぶりの昼休み食堂。

一光はスターズコンビと丁度喋って席を探していた。

「大丈夫！四日目でフラフラならまだまだまだ甘いですって」

「スバル、何を根拠に・・・」

「私は五日は大丈夫ですから、えっへん！」

「えっへんじゃないだろ、寝ろ。すぐに寝ろ！俺は寝る、今日は仕事がない筈だしな」

スバルは胸を張り、一光はツツコミを入れて断言する。

「それが良いと思います、それに齊藤さんは午後オフシフトじゃないですか。」

ティアナは素気なく賛成してくれた。テーブルを見つけるなり、有り得ない量のスパゲッティを運ぶスバル、その取り皿とサラダ、こちらにも巨大なボールに入って丸々四人前はある。

これを運ぶティアナは別途に定食Aランチを頼んだのだ、トレイはいっぱいなので一光が二人分の食事を運んでいる。因みに一光は和風定食。

「そうだなあ、ようやく休みだしな」

「そうですよ、ヴァイス陸曹に聞きましたけど帰ってないそうじゃないですか」

「そうだぞスバル、主にお前が書類仕事遅いせいではやてが俺に上乘せしてだな。」

「そんなあゝ!?!」

「そうや、適当な事言わんといてな。まだ増やすで?カズ君」

スバルをからかっていたらはやてと守護騎士、シグナムとヴィータとシヤマルと喋る大型犬ことザフィーラが居た。

「じょ!冗談だろ!?!」

「そや、冗談や。確かにフォワードの不慣れな部分は差し引いて、しつかりやってくれとるし、みんな優秀や。カズ君も稀なタフネスやし」

「主はやて、それは褒めているのですか?」

シグナムがツツコミを入れた、主に後半の事だろう。一光だって好きで頑丈なわけではない。

「そうだよ?カズ君もあんな無茶はもうやめてね、今度はお話しくちやならないから」

なのはも合流、てかお話とはなんですか?

「それは置いといてだ、飲みこむの早いだろ。幾ら四日徹夜でもよ
グイータが愚痴るように聞いてきた。するとスバルとティアナは当
然、シグナムやはやては驚いた。」

「四日徹夜だと？ならば昨日の私との訓練の時に目を擦っていたの
は」

「ああ、眠いからだ。現在進行形で」

一光はそんな質問も欠伸一つ挟んで答えるとシグナムはため息をつ
いた。

「通りで読めん動きなわけだ。」

シグナムは当然、魔導師としても、剣士としてもすぐれた腕を持つ
ている。そんな彼女が苦闘したのはいきなり倒れこんだりした酔拳
のような動きのせいだ。

「じゃ、カズ君は午後一で話ししよっか？」

「あの、なのはさん？俺を殺す気・・・了解しました」

なのはの目は笑っていない、それどころかドンヨリ曇っている。

ああ、マジ恐い。

「皆いるの、丁度良かった。はやて、カズの仕事量についてだけど
・・・どうしたの？」

そんな惨状に天使のごとく介入してきたフェイトは黒い笑みを浮かべるのはに聞いた。

はやて達一同は、長い付き合いだけにこうなったなのはが何をするか知っているからだ。特にヴィータに至っては酔って暴走したのはから一光を見捨てるほどだし。

「何でもないよ、フェイトちゃん。」

「そう？そんなわけないと思うんだけどなあ」

どこか納得の行かないフェイトだった。

デバイス間での電文、所謂携帯で言うEメール的機能は存在する。それによって睡眠を取ろうとした一光はなのはに呼び出され、今、機動六課正門にいる。因みに内容はこうだ。

『カズ君へ、なのはです。私もオフシフトなのでミッドの街を案内しようかなって思うんだけど大丈夫？返事待ってます』

こんなシンプルかつお誘い文、このモニターを事もあろうか廊下で

開いていた自分が恨めしい。

「齊藤、お前まさか断るわけねえよな？」

意識が薄れていたが殺気を感じて振り返るとヴァイスを筆頭に男子職員、これがつきと四面楚歌だろう。

「……オーケー、行くよ。まあ日用雑貨も買わないと行けないし、お前ら……安眠を妨げるなよ？」

因みに、一光は安眠妨害が一番嫌いだ。何でか？無性に腹だ出しいから。

「むう、地味に訓練にはなるな」

『まだエクシードモード解かないんですか？他人を感電死させますよ？マスターはまだコントロールに不備があるんですから』

「うつさいわ、じゃなきや寝る……」

こくりこくりとうつむき始めた時、なのはの声が聞こえた。

「ごめん！待った？」

「いや、待ってないよ。」

「それじゃいつこか？」

「ああ、安売りしてたら買いだしな」

「そう言えば、カズ君生活用品って支給品だよね？なら丁度いいところ知ってるから」

「ほんとか？助かるよ」

と話が弾んで出かけるのはと一光。

余談ではあるが、何故か翌日の仕事量は増し、ヴァイスらは必至に安眠を妨げたらしい。

一光はユーノと知り合い、意気投合。年の近いミッド初の男友達をゲットした。

慣れない仕事はハードワーク（後書き）

一光の魔法について解説

・ホムラレンガジン 火焰煉瓦刃

これは紫電一閃の劣化版、シグナムのように刀身が燃え上がるのではなく、刀身その物に膨大な熱量を持たせ、ヒートブレード化させる魔法で独自に編み出した。威力B・

・ブレイズキャノン

第一期でクロノが使用した収束砲と同じ、しかし練度の違いでクロノの物より圧倒的に性能面は低い。とくに射程が残念。射程はスバルのデイベインバスターと同等。威力C・

・ショットガンアイス

最も威力の低い牽制用の魔法、ザッパー銃形態で対人で使用することを前提に踏まえ、外れても弾丸は三つに拡散し、僅かながら追尾性能を持っている。追尾性能D・威力E・

・エクシースモード

現時点で魔法使用による身体強化、反射神経を特に強化して移動速度も向上させる。魔力を雷・電気に変換し纏う事で効果を発揮する。イメージはナルトの雷影さん活性化モードを連想すると分かりやすい。

・破断撃

今話未登場、大剣で放つ飛ぶ斬撃。^{ヘウイエッジ} 射程は五メートル前後で放つ際は蒼い魔力光を刀身に纏わせる為、対人戦ではまず当たらないと思われる現在一光の最高威力を誇る魔法。威力A A .

ファーストライト

「それじゃ、なのはも最初はなんも知らないと？」

無限書庫に訪れていた一光は、ユーノに頼んでいたフォーミュラ・エルトリアについての詳細を受け取ると世間話になった。

理由は、ユーノの「経緯は違えど、なのはも始めはただの女の子だった」と言う台詞から世間話ならぬ高町なのはは一等空尉の過去話になっている。

「そうなんだ。僕が巻きこんなような物かな？」

「いや、聞く限りそうじゃん。幾ら自分が瀕死でも違う世界の少女に助けを求めるのはどうかと」

「仕方なかったんだよ、僕は一光みたいに強くないし、まさかジユエルシードに反撃を喰らうとは思わなくて、念話で助けを呼んでいたらなのはが来て・・・だからだと思う。最近もらったメールにはキミの事ばかり書いてあった。放っておけないんだよ、今自分が追っている事件に巻き込まれたのもあればかもしれないけどね」

「いやいや、俺は弱いよ。魔法を知った今だからガジェットに向かっ
つていける。あん時はどうかしてたって思うし・・・もう、元の
世界に帰っても普通（人並み）の幸福を貰えないんじゃないかって
思う時がある。」

オフシフトでディスクワークから解放された日は主に無限書庫に六
課から貸し出される一光は、この時に訓練プランを考え、この一カ

月で激変した自分に悩みつつ、悩みをユーノに聞いてもらう事が多い。

なのはの様に魔法を受け入れられていない、なのはでさえ、始めは家族にすら内緒で行動していたのだから。

「そんな事ないぞ、ミッドにだって魔法を使えない奴はごまんと居る。ま、世界が違ってても受け入れてくれる人はいるさ」

ひょこつと現れた少女に励まされる。

ユーノの手伝いをしているフェイトの使い魔、アルフだ。始めこそ驚いたが今は慣れた物だ。

「そつか？俺の育った世界・・・魔法は存在しないぜ？」

「それでも居ると思うよ、キミの大切な人ならきつと」

「うーん、そういうもんかねえ」

悩み相談で大抵は休むことなく六課に舞い戻るのがパターンではある。

「それじゃ、シュートリベーションやるよ。カズ君はエクシーズモード無しで、スバルたちと私を相手にしてね」

なのはがズタボロのフォードを見ながら、エクシーズ活性化モードの使用時間を伸ばそうとスイッチを入れているとそう言っで一光も相手にするらしい。

因みに、今の一光の実力はフォードより上、副隊長より下だそう
だ。部隊で一番平均的な位置にいるとのこと。

「それはないでしょうよ！俺は解除してあんさん相手にするとトラウマが！」

そう、歓迎会の暴走なのはを思い出してしまうのだ。あれはない、
見捨てたヴィータもだが。

トラウマになって当然だ、酔っていたとはいえ、黒い笑顔で有無言
わさずチュドン！はない。しかも最大級の大技、聞けばなのはは切
り札をぶっ放し、結界を維持するのに非番局員も駆り出されたらし
い。

通称・機動六課砲撃事件、その被害者は一人。

「一光さん、そんなに凄かったんですか？」

「それはもう、シャーリーに聞いたがまさになのはの二つ名通りの
ぎゃー！？」

キャラの質問に答えているとガツチリ拘束魔法が発動、さらにとあるゲームならコンボ数が表示されている事だろう。

間髪いれずにディバインシューターが五発ヒット、被弾した戦闘機の如く、一光は瓦礫に突っ込んだ。

「はわわっ」

「キャラ、余計な事聞かないの！」

「す、すいません！」

「今度は、僕らの番でしょうか!？」

慌てふためくフォワード、因みにスバル、ティアナ、キャラ、エリオの順だ。

「それじゃ、私がスタートって言ったら始めるよー」

すこぶる機嫌の悪いなのはがレイジングハートを翳していた。

訓練は何かフォワードがなのはに一撃に入れた事で終了、一光はと言えばなのはにあの夜何があったか問い詰められていた。

「本当に何があったの？」

「いや、思い出すだけでも寒気が・・・」

「しっかり答えて、じゃないと」

「ララア、時が見えるよ・・・」

そんな光景を苦笑するしかないフォワード一同、しかし、そんな四人にも変化があった。

「答えてってば！カズ君！」

「だから、詳細をしる者は爆死したんだ。俺だって何が起きてたのか半信半疑だつつうの！」

「何か、なのはさんが普通の女の子だ。」

「そりゃ、仕事抜きにすればそんなに年も離れてないし」

「僕としてはフェイトさんもなのはさんも普通の女性ですので」

「それよりスバルさん、なんか焦げ臭いような・・・」

苦笑する三人、キャラがスバルに聞くとスバルの足元から煙が上がっていた。訓練中に無茶したせいでお手製デバイスのローラーブーツが煙を上げていた。

「ああ！あちゃーやつちゃった。」

スバルはローラーブーツを外して抱える、一光はどの辺がショートしたのかしばし首をかしげるがデバイスの事は分らない。シャーリーの部屋にあったデバイス製作入門編なる本を暇つぶしに読んではあるが実際、スバルのお手製なので具体的な部分はサッパリだ。

「後で整備部の人に見てもらおう、ティアナのアンカーガンは？」

なのはが聞いた、ティアナもお手製デバイスだ。正直、訓練校にデバイスを持ちこむなんてその道に行くと決めていた奴しかやらないだろう。決めていたから二人は居るのだろうが。

「あ、はい。騙し騙しです。」

ティアナが手元のアンカーガンに視線を落とし、そう答えた。

「んー、そろそろ頃合いかな？カズ君はどう思う？」

「何故俺に振る？」

えへへ、と笑うなのはに真顔でツツコム一光であった。

「何がですか？」

流石エリオ、気になったらしく質問する。するとなのははにっこりと笑って答えた。

「皆の実戦用デバイス！」

機動六課の研究施設^{ラボ}に移動した一同、今フオワードはそれぞれ愛機の前に居る。

試験管の中で浮いている青いクリスタル、カードタイプ、時計とアクセサリー。

「はいはい！設計私！協力はなのはさんとリイン曹長とレイジングハートさん！」

完成披露を待っていたと言うようにシャーリーが腕を上げながら満面の笑み。うーん、昔そうだったけど、苦労した物が完成すると嬉しくて顔が綻ぶんだよね。

「あ、齊藤さんにはコレです！」

そう言ってシャーリーは弾丸とその弾倉^{マガジン}を渡してきた。おいおい、なんじゃこりゃ。

「カートリッジシステムなんて、セイグリットには積んでないだろ？」

「それは後々必要になったで良いのですよ、カートリッジにも多少種類がありまして代表的な物をお渡ししたのです。」

「いや、代表的って言うにも形式はレイジングハートと同様の物、使うとなれば銃による射撃時或いは大剣の強化斬撃、ないしは火焰煉瓦刃の連発にくらいか・・・改良は必須だし。今は俺も漸く馴染んだ所だから、また癖がつくのは避けたいな」

「流石はまた徹夜記録を更新しただけはあるですね！」

こんなやり取りの最中、各自シャーリーから説明を受けていた。リンの情報源は大方はやてだろう、今度は部屋の防犯カメラ切っておこう。

「ごめん！遅くなって」

ワイワイガヤガヤとしていたのはが駆け込んできた。手には書類があり、それを整理していたせいでもあるのだろう。

「あ、なのはさん。丁度良かった今から機能説明を・・・」

シャーリーがそこまで言うのと緊急事態を知らせる赤ランプとモニターが一斉にアラートと表示、聖王教会へ会談に行っているはやてとダイレクトに通信がつながる。

「なのはちゃんフォワード、行けるか？」

シグナムもヴィータも別件で動けず、近隣部隊では対処しにくい場所らしく、詳細データを見ながら唸っているとフォワードに白羽の矢が立った。

てっきりまだ出勤を控えるのかと思い、一光が出る気になっているのはがキツパリとつけた。

「うん、それじゃ機動六課フォワード部隊！出勤！！」

二回目の実戦、フォワードにとっては初出勤となる今回、予想外の出来事が待っていた。

再会、友は戦友に（前書き）

作者「何話かぶりに帰ってきたぞ！」

一光「こんでいい、しかしあの二人から良く生き延びたな」

なのは「変な魔法使われたの・・・」

はやて「アレは反則や、バリヤじゃないんやもん」

一光「何して生き延びた作者!？」

作者「教えてしんぜよう!その名も聖なるバリヤ!ミラー・・・」

緋色「破壊対象確認、破壊する!」

なの・はや「誰!？」

一光「一樣始まります・・・・・・・・・・いつまで続くんだよこれ?」

再会、友は戦友に

そこは自然だ生んだ洞窟、と言ってもちよつとした窪みが崖に出来ていて雨風を凌ぐには丁度良い。

その洞窟には野営をしている青年が居る、名は藤原^{フジワラヒイロ}緋色。

一光同様にあの性能実験に巻き込まれ、シグナムとヴィータに見られることなく自力で切り抜けた人物だ。

『熱源捕捉……』

緋色はデバイスを持っている。

それは真つ白の片翼キーホルダーが待機状態で彼を戦闘モードに替えるスイッチでもある。

「例の何トラ局は？」

『反応、確認できず。』

問いに答えたデバイス、緋色は怠そうに起きると灯していた薪を消した。

「ゼロ、出撃するぞ」

輸送ヘリで少しばかり顔が青くなっている人物がいた。

「ヴァイス、頼むから揺らさんでくれ……」

「何言つてんだ、超安全運転だろ。」

ヘリとは当然風に煽られれば揺れるし、今回は待ち伏せがないから追いかけることもない。

しかし、見事に酔った一光は詳細データを流し見して俯いている。

「いきなりぶつつけ本番になっちゃたけど、おっかなびっくりじゃなくてしつかりね！」

となのはが励ますとフォワードは揃って返事を返す。

『キャロ、ガチガチですよ。大丈夫でしょうかね？』

セイグリットが呟く、確かに怯えているように見えなくもない。

あれは緊張とは違うだろう、キャロの出生は詳しく知らない。

フェイトが保護責任者でその保護対象、エリオとは兄妹みたいなものと認識していた。

詳細データの最後に新型ガジェットの発見情報がある。

大型の三型と称される球体と写真をいぶかしんでなのは達に知らせる。

「みんなにや悪いが緊張させるようなネタだ。新型が確認されてる、人型と三型って大玉だ。」

モニターを操作して写真をズームアップ、なのはも一瞥すると指示を出す。

「フォワードはレリックの確保を最優先、この人型は性能差が有りそうだから発見した場合は極力戦闘を避けて。ライトニング、スターズどちらかがレリックを確保した場合、リニアの制御。」

「現場の管制は私が担当するです！」

リンが騎士甲冑に姿を変える。

一光にとっては腑に落ちない、何故人型が“良く知るMS”なのか。

フォワード四人が返事を返す中、一光だけは難しい顔していた。

「カズ君？」

「ん、ああ。航空型も確認できてる、さて蒼空は俺となのはさんかな？」

なのはがのぞき込んでいたのに気づいて一光は溜息と一緒に聞いた。

「あとフェイト隊長かな、それとさんづけ禁止！」

「あ、悪い」

そのやり取りにフォワードが笑いをこぼす中、一人ヴァイスが、

（緊張感の欠片もねえな・・・）

と思っただのは余談である。

「それでね、その人型に類似した姿で人型を倒す人もいて」

場は聖王教会に移り、はやてと騎士カリムが対談している。内容は先の通り、一光に送った現場の詳細資料と現在はやては機動六課に送るシスター・シャツハの運転する車内である。

『何やて？アンノウン戦力ちゅうこと？』

「になるのかしらね、それでもその人は不思議だね。前は聖王騎士団と衝突したんだけど誰も傷つけず、武器だけを破壊して言ったらしいわ。シャツハがその時、こう聞いたらしいの。」

『はい、「俺はキミらの敵じゃない」と』

割り込んだシャツハ、しかし、騎士団のデバイスであるポールスピ

アを一撃で破壊し、映像から見る限り、武器は巨大なライフルと光刃、魔力剣に胸部に隠された機銃。どれかは質量兵器であることに間違いはない。

騎士団には被弾し、銃痕を残す者もいる……ならば敵は何が目的で人型を倒すのか。

それにその人物、鮮やかなトリコロールカラーに天使のような純白の翼を携えている。

戦場に出れば、嫌が応でも目立つ形だ。魔導師ではない、まるでロボット。

『大丈夫や、仮に六課の任務先でぶつかろうとも切り札がある！』

はやては強気でその姿勢を崩さない、敵勢力はあくまで管理局員で構成された六課のデータしか入手できない。

まあ、それこそ実際に衝突して一光とぶつからない限り、一光は未知の強敵と言う事になる。実際、はやても一光の成長の速さには恐れ入る。

「案外、その彼がなんとかしてくれるかも知れないわね」

カリムも賛成する、しかしあまり完全に賛成できない、一光とて人なのだ。幾ら成長が速く、即戦力になり、敵の意表を突く隠し玉としても一度こつきり、安易に喜べなかった。

例の未確認戦力こと緋色は、腕ほどの長さがある二丁のバスターライフルを構えるも、無数のガジェットが緋色を目掛けてレーザーを撃ち掛けて、天使を思わせる羽を羽ばたかせて緋色は避ける。

『アンノウン
未確認、確認』

「ちい、新型か。飛行タイプ・・・多連装ミサイルも居やがる！」

緋色の武装は全て魔力に頼った物で、実弾兵器はない。エネルギー切れがあるとすれば緋色の魔力が尽きた事になる。

緋色のデバイス、名はウイングゼロ・カスタム。砲撃に特化したガンブラがデバイス化したもので緋色が巻き込まれ、すぐにこの姿、ウイングガンダムゼロ・カスタムになり、ガジェットを殲滅していた。

金紗の髪の少女が言った「運命の放浪者と並び立つ翼の預言者」、それが何なのか知る前に管理局員、果てはガジェット戦いながらゼロの予知に従い、今に至る

『目標地点到達予測時間、十五分延滞』

ウイングゼロに感情はない、AI制御だが、異常に機械的で装着者の意思が優先される、緋色が一気にバスターライフルのトリガーを引いてガジェットをその熱線の中に消し、緋色は飛翔する。

「この先に何があるのか、確かめさせてもらっぞ！」

一光は開いたハッチの前で飛ばされないよう踏ん張っていた。

「な、なのはさん？マジでダイブかますの！？」

そう、恐いのだ。今日日いきなり「じゃ、スカイダイビングしようか？」はない。いくら飛行魔法が使えるとはいえいきなり？は？冗談きついよって状態。

「それしかないよ？それにほら、フェイトちゃんも着いちゃうし、私達が出て制空権確保しないと。」

「恐いのか？一光。」

ヴァイスが笑いをこらえている、肩が小刻みに震えて今にも吹きだしそうだ。なのはは少し困った様子、潔く跳んでくれると思っていたようだがサラリーマンは普通こんな事に度胸を出さない。

「あー！飛んでみますよ飛びますよ！！！！」

自棄になり、一光はハッチから飛び出す。ヴァイスは大爆笑で、フオワードも笑いを漏らしていた。

緊張緩和剤になって何より、てか頭から真っ逆さまじゃないか!?

「レイジングハート、セットアップ!」

「は!?!? そうだ、セイグリット! セットアップ!」

なのはに釣られて叫ぶ一光、因みに高度差約二百前後だ。

フェイトと肩を並べたバリアジャケット姿のなのはの下、二人の下方に一光と言う構図。

「スカイダイビング、もうしねえ……」

そう呟いたが風がかき消した。

なのはとフェイトに高度を合わせて肩を並べる、何かと追い込まれては活路を見いだしてきた結果がコレだ。

気がつけば飛べるようになっていた。

普通は訓練するらしいのだが一光は改めて普通ではないのかも知れないと思い始めていた。口には出さないけど。

「うへえ、ワラワラとまあ!」

飛行型ガジェットが一斉にレーザーを撃ちかけるが、当たらなければ怖くはない。

「邪魔だ。」

レーザーの雨を交い潜り、片手剣^{フエンサー}で一刀両断、更に銃^{ザッパ}で擦れ違い、しとめ損ねた奴を撃つ。

因みに左が片手剣^{フエンサー}、右が銃^{ザッパ}でガジェットの被弾を確認するや次に向かう。

「あれ位バカス力撃てればいいんだけどな。」

『持ちませんよ？魔力コントロール苦手なマスターじゃ』

「違うない。」

なのは、フェイトが視界に入り、その戦う様に呟いてみるとセイグリットが痛いところを突いてきた。

同意しつつ、一光は片手剣^{フエンサー}を振り下ろす。

リニアトレインに取り付いたフォワードは当然バリアジャケット姿である。しかし、その姿は各分隊ごとに類似点が見られる。

スバルとティアナはなのはに。

エリオとキャロはフェイトに。

最初に気がついたのはスバルだった。

「ねえ、ティア。このジャケット……」

ゆっくりと降りてきたラインがネタばらし。

「皆さんのバリアジャケットは、各分隊の隊長さんのを参考にして
いるので癖はありますが高性能です！」

その言葉に目を輝かせるスバルと若干嬉しそうなティアナ。しか
し、ティアナは直ぐに気を引き締め、スバルに渴を飛ばす。

「スバル、感動は後！来るわよ！！」

天井が切り裂かれ、一体の人型が飛び出る。

「うえ、これって……！？」

「当たり前だね」

不幸なことに人型と遭遇したスターズコンビだった。

司令部は息を飲んでいた。未知数の新型と新人が対峙している、何とか隊長にサポートして貰いたいが雑魚の相手で、手一杯。

人海戦術は数で勝る方のセオリーみたいなものだ。

一機の性能はさほど高くなくとも、群ればそれなりの戦力にはなる。塵も積もれば何とやらと言うやつである。

なのはとフェイトは先ず群れようとガジェットに負ける事はないし、ロングアーチを驚かせている一光もまた、魔法を連発しない限りは魔力を活性化モードに当てて乗り切る事が出来る。

「お待ちせ！状況は？」

「部隊長！スターズ3及びスターズ4が新型に遭遇、例の人型です！」

はやてが指令室に入ってくるなり、副司令塔ことグリフィス・ロウランが報告。すぐに思考をフル回転し救援策を叩き出す。

「新型！動きます！！」

シャーリー、ルキノ、アルト、オペレーターの三人がきびきびと報告する、モニターに映る新型は巨大な剣を抜き放ったところだった。

抜き放った刀身はレーザー使用で、実剣の剣先とレーザー刃で構成された剣をスバルに向ける。ブォン！と不気味な音と共に刃が姿を現す。

（最速、最速で奴に迫れるんはフェイトちゃんか！？あかん！能力制御が邪魔や！ほんなら・・・）

はやての中で結論が出た。マイクを掴み、直に通信回線を開くと指示を飛ばす。

「カズ君！スターズの支援や！！」

「ええ！？」

スタッフ一同びっくりの指示に当人はと言えば愚痴っぽい返事を返した。

『出資者は無茶仰る・・・って殺す気かい！？』

「大丈夫や！うちの目に狂いなければカズ君なら出来る！！」

『狂ってたらどうすんだ！？化けて出るぞ！！』

「それは勘弁や！てな訳でゴーツ！！」

『どんな訳！？こんな訳だ畜生め！！代わりに仕事の減量を要求する！！』

「分かった！増量やな！！」

『ちっがうわ！！！！』

会話が成立しつつ、一光はスターズ目掛け移動を開始。それを支えるのはとフェイトも流石はエースと言う力量だが二人が撃破した

ガジェットが起爆し終える前に足蹴にして飛距離を稼ぐ一光もまた
凄い。

「八神部隊長、楽しそうですね・・・」

「そうかなあ？流しやすくって本当助かるわ」

グリフィスは密かに思った、苦勞人が居たと。

緋色が着いたのはそんなやり取りの最中で、サーチャーを避けるために低飛行で木々の間を滑空している最中の事だ、ウイングゼロのセンサーが捉えた反応は目の前から熱源一、空から一。

「破壊する。」

ただ一言言い放って緋色はツインバスターライフルを放った。図太い黄色の閃光が木々ごとガジェットを飲みこむ。

「この上か、ゼロ。」

見上げるとリニアレールの線路が見える、暴走しているリニアに飛び付くなら、今から急速上昇すれば間に合うだろう。

そんな緋色は見知らぬ魔力反応に高速で移動する物体がある事に気づいて、ズームアップすると知った顔があった。

「そんな・・・奴がいる筈は！」

人型ガジェットが剣を振り下す、何度も後退を余儀なくされたティアナとスバルには後がない。既に最後尾車両の為、幾重にも傷の付いた天井を伝うしかない。スバルの魔法、ウイングロードを使えばいいかもしれないがA M Fの中では構成が弱まる可能性が高い。
アンチマギングフィールド

何せ、訓練用ガジェットと出力がダンチなのだ。

「ティア、私が引き付けるからその隙に！」

「何言ってるの！魔力も通らない相手にどうするのよ！？」

「アレを使うよ」

「馬鹿！アンタは・・・」

口論しているうちに敵は大剣を降りぬこうとした横つ面を蹴り飛ばす人物がいた。

「うわあ、えらい魔力消費激しいぞ。」

『そりゃAMF環境下ですからねえ』

一光である、しかも緊張とは掛け離れたセイグリットとの会話。ピンチだった事も忘れ、スバルとティアナは啞然とする。

「ありがとうございます！」

「おう、先行けスバルとティアナ。あれは俺もよく知るタイプだ・・
・因縁かねえ、ストライクとは良い趣味している」

車内に急ぐ二人を後目に一光はため息をついた。すぐに他のザコを殲滅したなのはとフェイトも加わり、アンカーを崖にち込んで落下を阻止している人型・ストライクと対峙した刹那、黄色い魔力光がストライクを飲み込んだ。

回避するなのはとフェイト、一光だけは^{ヘヴィエッジチェンジ}大剣に変換し、落下速度を合わせて振り抜く。

「喰らえ、破断撃！」

「戦闘レベル、最大効果・・・・齊藤じゃん!？」

その声の主は聞き覚えがある、しかし目の前に居るのはウイングゼ口、ガジェット?じゃない。そんな事にも飛行して、なのはとフェイトは敵と似通った装甲の人物、未確認戦力の人だ。司令部のはやても、ロングアーチー同啞然としている。

出しかけた魔法を受けてもダメージにはならなかったようで頭部の装甲を解除すると、一光の反応にさらになのはとフェイトは驚いた。

「俺だよ！俺！ガンブラときたら俺だろ齊藤！！」

「・・・まさかと思うが、藤原か？藤原緋色か！？何でコスプレを実用化する！？」

「俺としては嬉しい限り何だが、どうもこの世界の住人はウイングゼロをガジェットなる機械と決めつけてな！許せん事に破壊しようとしやがった！助けてやったのに・・・その美女達も管理局員だらう？」

「てか、今は俺も協力する身だが・・・すいません、なのは、フェイトさん。こいつダチです、危険性はありません！六課に同行させていい？」

「と、友達なの！？」

「いや、ロボットの中からって！ガンブラって何！？」

因みに上からなのは、フェイトで、この後、主にスバルとティアナからだが藤原は理不尽な魔法攻撃を受けた。

一光からすれば当然の報いだ、紛らわしい格好しやがって。

再会、友は戦友に（後書き）

オリサブキャラ説明

- ・藤原緋色
フジワラヒイロ

- ・身長は178センチ体重は75キロ

- ・デバイスはウイングゼロカスタム

- ・経緯は本編に記載。

備考

高校からの親友でもう一人倉岡卓也という友がいる。

プラモであったウイングゼロカスタムをデバイスとして持ち、起動後はまんまウイングガンダムゼロ・カスタムとなる。

六課に保護および取り調べのため同行し、協力していく事になるオリキャラ砲撃担当ポジション。

魔法が一切使えない代わりにガンダム化が可能な唯一無二の人物で一光とは優れたコンビネーションを見せる。

- ・ウイングゼロ武装

- ・魔力サーベル
ビーム

- ・ ツインバスターライフル

- ・ 胸部^{ビーム}内蔵魔力ガトリング

- ・ 以下機動六課開発オプション

任務先は？

「へ？ガンブラが存在しない！？」

機動六課に帰還して直ぐに緋色の取り調べが始まった。

一光と同じ世界から次元漂流したと言うことで探すには面倒が増えないのだが、緋色は世界に関することで割と人気、ファンの年代層を選ばないアニメでデバイスの元でもあるガンダムシリーズはと言った。

シャーリーが検索を掛けた所、管理外世界・地球のメディアカルチャーには存在しなかった。

そうなるとう当然ガンブラも存在しない。

「となると破壊されるのは肯けるぜ、藤原」

同席した一光はそう言った。

まあ、緋色のデバイス使用中は兵器だし、致し方ない。

「となると二人の言う地球は？」

なのはの疑問も尤もだ、はやては考えている。当てがないわけではないしロストロギアが関われば可能かも知れない。

「まさか、平行世界とか？」

皆が「はい？」と言う疑問視、はやては笑って話題を変える。

「まあ、気長に探してけばええやろ。緋色君も六課に協力してくれるやろ？」

「それはまあ」

「それじゃ決まりや！」

三人は思う、新たな犠牲者がと。

「空気重かった……」

うなだれる緋色、この男も元の世界では21の立派な社会人なのだが取り調べの経験はない。

因みに一光にもない。

「まあ、取り調べだからな。しかしまあアレだ、緋色も苦勞の道を選んだな」

「何だよ、少し早く美少女達とお近付きになったからと」

変わらんなあ、と一光は思った。

学生時代のような愚行を犯そうものなら、シグナムが一太刀の元

に斬り捨てよう。或いはヴィータが打ち砕く事だろう。

二人目の民間協力者と言う肩書きを得た緋色を寮に案内するのは一光となのはである。

何故か？はやてがそう命じたからだ。

「ほな、カズ君となのはちゃんは緋色君を寮に案内してな？フェイトちゃんには話があるから」

と言う感じである。

しかも悪戯笑顔、この後が思いやられる一光である。

「ゴメンね、トラウマ作って」

唐突に切り出したのはなのは、いきなり謝ってきた。

「トラウマ？高町さん、此奴と何かあつたんですか！？」

食いついたのは緋色だった。相も変わらず噂好きは直っていないようだ。

「あ、ああ。気にしてない、気にしない。今度から酒は飲んでも飲まれないで下さい、ホント」

すでに遠い目の一光、今なら逃げおうせる自信有りだ。

無論、バインドの前振りがなければ。

「うん、でも・・・嫌がってなかったよね？」

「いや、アレはね・・・俺も悪いけど、さ。」

「おい、齊藤！何があつた！？」

「お前流に言えば『コロニーレーザー』をぶっ放された。」

「は？」

「お前もこれから知るよ、魔法は未恐ろしいと。」

「話題を逸らさないの！」

「セイグリット、俺は生きて帰れるだろうか？」

『多分、無理です』

「そうか、無理か・・・ハア！？」

そんな会話をしていると直ぐに寮の前、無論そこにはほかの男性
社員もいるのだが、殺気立っていた、グリフィス以外。

「どうしたの？グリフィス君。」

なのはが聞いた。

ま、グリフィスが居てもなんら不思議ではないが一光にとっては
ヴァイス以下男性局員の殺気は何を意味するか理解できる。

「齊藤さん、すみません。」

「うん、有り難うグリフィス君。止めらんなかったみたいだね？」

「はい、齊藤さんの部屋に藤原さんで、齊藤さんは……彼方で」

因みに彼方^{あなた}と書いて彼方^{あちら}と読む。

グリフィスが指した先にははやてと何故か顔の赤いフェイト。

「なあ、一光。仕事も周りも充実してんじゃねえか」

「嫌味か？ヴァイス」

「おう、解ってんじゃねえか。グリフィスから聞いたぞ？メカマンに今の位置譲って桃源郷か！？」

「うゝん、どうゆう事？」

首を傾げるのはだが、はやてがこそこそ話すと一気に身を引いた。

「えー！三人で！？」

コレを聞いた緋色は事を理解したらしい、一光の胸倉を掴んで揺する。

「何だ！お前は何故モテ男になった！？」

「藤原よ、安眠のためなら居場所を譲るぞ」

「部隊長権限で却下や。」

はやてが釘を刺す、それこ簡単には抜けない五寸釘だろう。

因みにこれは一光の無茶ぶり勤務時間を改善させる対処でもあるが、年頃男女が一つの部屋はどうかしている。

いろいろ問題だ、そう色々。

はやて曰く「良いやん、フェイトちゃんのアタック嫌がつてなかったんやし」とのこと。

ダメだ、狸に一般論は通じない。

「権限使うとこ間違えてるぞ！」

即答する一光にははやては笑いながら「ええやん別に」と言った。

良くない、大いに良くない。

何れ寝不足でぶっ倒れるだろう、絶対に言える。

「それにしても意外やね、お酒はいるとフェイトちゃん大胆になるんは」

はやては悪戯に言う、するとフェイトは真っ赤に赤面にして顔を伏せた。

「は、酒……」

連行中の一光には思い当たる節が一つしかない、あの時だ。

通称・機動六課砲撃事件。

「なのはちゃんも、なあ？」

はやては何か確信を持っているんだろう、あのニヤケ顔は変なことを思いついたときに見せる物に違いない。

「な、何のことかな？」

一瞬だが、なのはの動揺が交い見えた。

「じゃあないな、素直になれへん二人のためにこんな物があるんよ」

はやてが取り出したのは一本のビデオテープ。

それは防犯カメラの映像記録である、因みに配置は食堂を一望できる位置で集音性は抜群である。

「なあ、緋色は一光と旧知仲なんだろう？」

場は男子寮に移り、緋色はベッドでゴロゴロしていると上段を使

用するヴァイスが問いかけた。

「まあ、高校からだけだな」

緋色が返す。

「昔からあんな感じだったのか？」

「いや、昔よりも痩せたかな。アイツと俺と倉岡で良くバカをしたよ」

「いや、俺が聞いてんのは昔からモテたのかだけだよ？」

「あん時は男子校だったからな、解らなかった。正直、女子には目もくれない機械一筋だった男が・・・久しぶりに会えばモテ男に大変身だ。」

ウイングゼロを眺めながら呟く、緋色は少しばかり安心していった。

孤独だと思っていた世界に、アイツはいたのだから。

機動六課の女子の比率が多く一様、寮内には家族サイズ部屋ルームから一人部屋まで完備している女子寮と比べると男子寮は貧相である。

部屋を更に細かく振り分ければ、なのはとフェイトがベッドサイ

ドの寝室で一光は簡易ベッドと言うよりソファである。

この仕切はドア一枚、はやては例のビデオを切り札になのは達を黙らせた上で今に至る。

「えつと、変なことしないよね？」

何を思ったのかフェイトが聞く、なのはも驚くが当然確認しなければならぬ。

「勿論、神に誓っても良い。」

頑な意志を伝える一光は二人を直視できない。

したら多分、冷やした頭がまた沸騰するだろう。

二人はパシヤマ姿で奇妙な色気を出している。

理性が砕けるのは阻止しなくてはならない。

寝るとなれば誰でもやることは一つ、布団に入るだけだ。

なのはとフェイトはツインベッド、幅の広いベッドである。

仲の良い親友同士だから違和感がないのだろう、一光はと言えばシャーリーから借りたデバイス製作の分厚い本を読んでいた。

『マスター、寝ないと倒れますよ』

セイグリットの助言などお構いなしに読みふける。

基本的には藤原の知る機械一筋野郎から変わらない。

翌日の早朝訓練、一光と緋色是对フェイト戦である。

「なあ、ホントあの美女一人で大丈夫か？」

先手は緋色だ、フェイトの力を知らない為にこんな台詞を吐いている。

魔法が一切合切使えない緋色はハンデを補う鎧とも言えるデバイスのウイングゼロを纏っている。

「おう、精々白い羽を赤くせんよう頑張れ。」

仮にもモビルデバイスと称する事にしたウイングゼロ、一光としては魔法と同じ効力のある武器と緋色が何処までフェイトに食らいつくかが気になった。

管理局が誇る金色の閃光、或いは金色の死神相手にゼロシステム搭載機はどこまで行けるやら。

「あの、緋色さんの姿が」

キヤロが不安げに尋ねてきた。

リニアレールで確認された人型とそっくりだから警戒されてもおかしくはない。

「お、そうだ。みんなはアイツの特性を知らなかったか」

思い出した様に一光が呟く、フォワードを含めてなのはとヴィータ、シグナムとはやてまでこの一戦を観戦に訪れている。

「んだよ、知ったかぶって」

「カズ君は知っているみたいだし、説明して。」

ヴィータが鬱陶しそうに、なのはが説明を求める。

「おし、解った。先ずこの中のポジションで言えば、緋色はなのはの位置に当たる。」

「成る程、砲撃型と言うわけか」

「流石シグナム、んでウイングゼロにはゼロシステムって“勝利のイメージ”を伝えたり、一説じゃ未来を垣間見るシステムが搭載されてて、大抵は正確な射撃とその先読みで二の手三の手まで見透かされるんだが」

「それじゃあどうしようもないじゃないですか！」

「普通はそうだな、エリオ。ウイングゼロは射撃よりだが、格闘戦も苦手じゃない。」

「敵に回したら面倒やな、でもカズ君何でそこまで知つとるん？」

はやてが頷いて質問を投げ掛けた。

「俺も一時、あのシリーズにはハマってな。対戦アーケードゲームが元の世界にあるんだが緋色がああ機体で俺はストライク。結局、決着が付かないままだ。」

「そんな凄腕か？アイツ」

「なんか・・・」

「フェイト隊長に遊ばれてるような」

説明中も模擬戦は継続中、ツインバスターライフルは当たらず、フェイトがハーケンセイバーを放つとツインバスターライフルが銃身を切断されて起爆。

代わりにサーベルと胸部バルカンでプラズマランサーを迎撃しながら切りかかるフェイトをサーベルで迎え撃ち、苦戦の緋色である。

因みに先の感想はヴィータ、ティアナ、スバルだ。

「そろそろ終わるかな、ついでに人型もフェイズシフト実装してたから伝えとくが、人型には魔力攻撃で対処してくれ。」

「何故ですか？」

「物理攻撃は無力化されちゃうからだ。そうなるとエリオとスバル

「は辛いだろ？」

「はい……」

二機の特性を説明し終えた辺りで緋色が墜ちてきた。

これは文字通り撃墜、モビルスーツMSは魔法少女に敗れましたと。

「どうだ、緋色。フェイトさんとやりあつて？」

「確かに齊藤の言うとおりだ、魔法は恐ろしい……この女性は怖いほど強い」

因みに追記しよう、武器・アーマーの破損は緋色自体魔力保有者なので緋色の魔力で再構築される。

「駄目……指を動かす力も残ってない。」

緋色は情け無いことに仕事そっちのけで突っ伏していた。

ウイングゼロの各種再構築は緋色の潜在魔力を消費する。しかし、この男の潜在魔力はBランク。

武器と装甲を同時に再構築したとして二回が限界である。

「煩い、目の前の仕事を消化しろ。お前も社会人だろ」

そんな緋色を叱咤する一光も気持ちは分からなくもない。

最初の頃はブレイズキャノン一発で全力疾走したくらい疲れたし、
活性化モードこそ慣れたが今でも併用した収束砲は魔力消費が激しいので避けたい部類だ。

「うるせー、毎夜桃源郷でウハウハの貴様と一緒にするな・・・」

実に弱々しい妄言である、一光からすれば安眠は休憩時間くらいなのでこの勘違いを正さなくてはならないと思う。

『マイスター緋色、マスターはウハウハではありません。』

珍しいこともあるもので、セイグリットが助け船を出した。

「どついつ意味さ?」

『毎晩精神統一でまともに寝てないんですよ』

「毎晩お楽しみじゃなくてか?」

『そんな事しようもなら、多分・・・消し炭もいや、地面の染みの仲間入りですね』

こんな会話、あの二人に聞かれたらデスるだろう。それはさておき、セイグリットも何を根拠に、それとドチラを核に例えたのだろう?

まあ、考えるまでもないが。

突然、セイグリットを驚掴みにする手と笑みを絶やさないのが登場。

流石に職場の上官的立場のなのはが出てきたことで緋色もぎよつとする。

「へえ、セイグリット。カズ君がそんな事言ったのかな？」

しかもメリメリと音がする。

「言っていないから、なのは。セイグリットを壊すな」

『そうです、妄言を正していました。詳しくはマイスター緋色からお伺い下さい』

おー流石は我が愛機だ、即座に切り捨てやがった。

「まあサボリのお説教は後にして、出張任務が入ったよ」

因みに、なのはが直ぐに訪れたのはスターズ分隊とディスクが近いからである。

今の所、一光がスターズ補佐で緋色がライトニング補佐。

「おー、それは珍しいな。ガジェットか？」

「分からないけどロストログア関連ではあるみたい、何もなければ

二時間後に出発だから今の作業片づけてね。」

「へいさー」

緋色は蘇生した、相変わらず女性の前では見栄を張りたいらしい。

「あ、なのは。もう伝えた？」

少しばかり遅れてフェイトが姿を現す、一光と緋色のディスク配置は両分隊に分かれている。緋色はライトニング分隊寄りで一光はスターズ分隊よりなのだ。スバルの終わらない叫び、主に書類仕事・現場からの会議資料等の作成を平然とカバーするまでに仕事速度は向上の一途を辿る一光に対して、事件以前も事務関連だった緋色は慣れない魔力消費のせいで仕事が発束無い。伝えたい内容は同じように、確認を取るフェイトである。

「うん、二人にも確認の意味を兼ねて同行してもらおうしね」

はて、確認とは何か？と一光は少しばかり考えた。無論、出張任務先に自分に関連する世界かもしれないが、二人と言うと緋色もである。

「行先は、聞いておきたい？」

「フェイトさん、もったいぶらないで教えてください。」

即効答えを求める緋色、かつては悩み通して二日徹夜した記録を持つ。関係ないけど。

「私達の出身世界、現地惑星名称・地球、ロストロギアはそこに現

れたそうや」

ラストに来たはやてが普通に言う。しかし、一光と緋色にはとても重要な出先になる。

複雑な任務先

「行き先が地球ねえ」

緋色がしみじみと呟く、一光は少し悩んでいた。

仮に、行った先の地球に同じように家族・友人が存在したとしてそれを受け止められるか、知っている通りの人物か？

こんなことを考えるのは平行世界という単語を聞いたからで、とある作品においては全く同じ人物がその世界には平行して存在し、どちらかが死ねば、片方も死ぬという因果で繋がっているとして、その人物が記憶にあるその人とは限らないわけだ。

例えば、密かに持っていた趣味がドン引きする様な物で、まあ女装とかそういう類の理解しがたい物としよう。もしも親友二人がホモでかつ女装して迫ってきたら吐き気と嫌悪感を感じずにはいられない。そして知ってしまった上で元の世界に戻れたら一光は絶対そいつらに早急かつ迅速なカミングアウトを進めるだろう。

「齊藤の悩みは分からんでもないぜ？確かにあの小説通りの事が起きれば俺はサンシャインから飛ぶね」

「嘘だろ」

「おう、嘘だ。今の絶好チャンスを逃さん手はない！」

意気込む緋色に馬鹿らしくなる。暫くするとティアナとスバルが来た。

「早いですね。」

「あれ？緋色さん、あんなに書類たまっていたじゃないですか。まさか帰還してからやるんですか？」

スバルの質問に良心が垣間見える、同じく仕事の遅い同士心配なのだろう。

「まあ、出来ない事はないからな」

「嘔吐けバカたれが！半分以上俺が肩代わりしたろ」

「ああ！成程」

納得したようにスバルはポンツ！と軽く握り拳を手の平に乗せた。

「よかねえぞ、スバルだって他人の仕事肩代わりするんは嫌だろ？」

「それは、はい・・・」

一光が呆れたように尋ねるとスバルは頷いた。

「ティアナも時々スバルの仕事を手伝ってるみたいけどさ、甘やかすのは良くないぞ。いくら良き相棒でもな」

「え！？あれだけ仕事に追われていて良く周りを見てますね！」

ティアナはフォワードの中でディスクワークが優秀で当然早い、そんなティアナとは対照的にスバルは遅いのだ。時折手伝っている

様子だった。それはスバルの為にもならないし、いかんだろう。これは経験から言える。

「お前、普段どんだけ仕事請け負ってんだよ・・・」

ティアナが驚いて見直しましたと言った途端に緋色が呆れたように呟く。これは藤原が来てアレだけで済んでいるがすべて一人で片づけている時があった。

「まあ経験だ。六課に来る前も似たような事していたからな」

「それはつまり前の所ではカズさんも遅かった？」

「ん？まあ、製造業なんてどこもかしこも同じようなものさ。スバルも漸く堅さが取れてきたな」

「へえ、何を作ってたんですか？」

意外にも喰いついたのはティアナだった。フォワードには一光が以前は何をしていたのか話した事がないからいい機会かもしれない。

「パンだ」

「パン、ですか？」

スバルが何故聞き返したのか分からないが無視しよう。

「すみません、遅くなりました！」

そこに謝りながらライトニングチビツ子ズが走ってきた。実際、談

話中なので謝る事はない。

「大丈夫よ、まだ隊長達もきてないしね」

ティアナがフォローして話に加わるエリオとキャロ。二人もすっかり夢中で聞き入っている。次元漂流者のしていた事ってそんなに珍しいのだろうか？と気になってしまふ。

「一光さんがそんな事をしているなんて驚きましたよ」

「俺はそんなにおおざっぱに見えるか？」

エリオに聞き返す一光、見た目で人を判断してはいけないと思う。うん、今度教えねば。

「いえ、そうではなく機械系だと思っていましたので」

「あー、それも外れじゃないな」

「むしろ正解じゃね？」

緋色が小声で言ってきた。

「まあ、そうだな。根っからの機械系・・・だったな」

「だった？」

過去形に首を傾げるキャロ、緋色は呆れた様子で溜め息を吐いた。

「そっか、齊藤は順応オールマイティが売りだとか言ってたな。流石は鉄人ターミネーターだよ」

「ふーん、そうなんだ。」

「みんな早いね。」

「なのはさん、フェイト隊長！」

ザッ！と音を立てて緋色がなのはから離れる。そう言えばこの男、背後に立たれるのが嫌いだったな。

「い、何時の間に！？」

「今さっきかな。」

素で答えるなのはは緋色の反応にキョトンとしている。まあ、訓練中に自信満々のウイングゼロがあそこまで追い込まれた揚句、なのはにダメージらしいダメージを与えられなかった。これはフェイト戦の後にフォワードの発案から始まった模擬戦の結果である。結果として緋色なのはとフェイトに非力な女性と言っイメージがなくなり、ある種の化け物のような恐怖を覚えたらしい。

「ヴィータ副隊長！」

スバルが呼ぶとヴィータが「おう」とだけ返事を返す。

「シグナムにシャル先生？」

「ああ」「はい」

ティアナに返事する二人、こちらの返答タイミングは完璧シンクロ

している。しかしながら内容は違っんでシンクロとは言えない。

「リイン曹長に八神部隊長もですか!？」

キャラが驚いた。ここまで豪勢なメンツでの出勤は普通有り得ない。

「ロストロギア相手だし、一様主要メンバーは全員で出撃ってことで」

「後行き先もちよつとね」

なのはに続いてフェイトが言った。

「行き先、何処なんです?」

ティアナが尋ねる、フォワードには異世界への派遣任務としか知らされていないので当然だ。

「第97管理外世界、現地惑星名称・地球」

はやてが告げるとフォワードは啞然とした、わけではなく思い当たる節があるようだ。

「地球って、フェイトさんが昔住んでた?」

「そうだよ。」

キャラの疑問をフェイトが解決。

「その小さな島国の小さな街、日本、海鳴市。ロストロギアはそこ

に出現したそうや」

「私とはやて部隊長はその生まれ。」

「私達は六年ほど過ごしたな」

「向こうに帰るの、久し振り！」

シャルは嬉しそうだ、シグナムも何処か笑顔である。

「俺らもかな・・・一樣」

なのは達隊長陣は黙り沈黙を守った。理由を知っているし、二人は仮にも‘別の地球’から来たかもしれないという可能性の話をした時に一光が詳しく話した例えに沿っていたら嫌だなあと自分でも思うからだ。それに一光は今にも消えそうな呟きに心中隠している部分を垣間見た気がしたのだ。

「そうネガティブになるなよ。」

同じ境遇の緋色は前向き、と言うより能天気なのだろう。

「煩い、俺は思っただよ。社会に出た一年目より少しばかり長いからやな事は現実になる事を知っている」

「おいおい、それじゃあ俺が能天気みたいじゃないか？」

「そうだろう？」

友一人居るだけで一人ではマイナス面ばかり気にしていたが気が楽

になると一光が思う。

「何を気にしているんですか？」

キャロの尋ねに答える時間もない。その為にヘリ機内で話すと言って任務に旅立つ一同だった。

「それじゃあ一光さんが悩んでいたのは・・・えっと」

「簡潔に言えば、キャロで例えるならフェイトの顔でムキムキマツチヨマンだったりしたら嫌だろ？」

エリオまで全力首肯、まあ当然である。緋色に至ってはどんな想像をしたのか青ざめている。

「その内容だと平行世界の私達は何をしているのかしらね？」

シヤマルが首をかしげて訪ねてきた。想像もできないが恐らくはなのはもはやても魔法に出会ってはいないのではないか？と言っのが極論である。

「カズ君、少し明るくなっただね」

「そうか？」

先ほどティアナが地球のデータを見て「何で魔法文化がないのにオ
ーバースランク魔導師が？」という疑問は最もで、一光と緋色はこ
う答えた。

「まあ、二人は偶然出会ったかも知れんが俺と緋色は絶対に突然変
異だ。」

「そうだな、間違いねえ」

うんうんと頷く二人に苦笑するしかないフォワード、なのはは何故
か否定していた。

「そんな事ないと思うな。」

と言う感じ、一体何のために？と言うのがこちらの疑問だ。

「はい、リンちゃんのお洋服。」

「わあ！シャマルありがとうですう！」

嬉しそうに受け取る、と言うよりベッドに飛びこむ感じのリン。
それを見て緋色は首をかしげた。

「サイズ、でか過ぎね？」

「そうだな、いいとこ目玉の親父みたいに肩に乗るとかだろ。」

それに同意する、何せサイズは一般的に十歳そこらの少女が着るサ
イズだ。リンにはでか過ぎる。ぶかぶかとかきつい領域ではな

い。

「むう、二人は見た事がないからそんな事言えるです!」

「え?」

スバルが何をですか?と聞く前にリインが何かを始めた。

「システムスイッチ!アウトフレームフルサイズ!」

眩い光と共にベルカ式魔法陣がリインを中心に展開し、いつの間にか服に潜り込んだリインが、エリオとキャロと大差ない身長になっていた。緋色は眼をこするが現実には現実である。

「一樣、これくらいのサイズにも慣れるです!」

「ま、地球には小人サイズも飛んでる人間も居ないだろしな」

「流石、悟りのカズだな」

「誰が悟りを開いているか」

普通にヴィータにツツコミを入れてみる。

平行世界の家族

現地入りしてすぐに一光と緋色は許可を得ていた《この地球における》自宅の所在を確認に向かった。飛翔してすぐ二人は個人結界、主に光学明細と思ってもらう方が分かりやすい姿のみを消す魔法で飛行している姿を消し、飛んでいる。

『合流する時は緋色君がバルディッシュの反応を追って、カズ君はレイジングハートの反応を追ってね』

なのはが念話で合流時の指示をする。二人は了解とだけ告げ速度を上げた。

「緋色、一度俺らも合流してから海鳴市に戻ろう。」

「それが良いな、一つ聞いていいか？」

「何だよ？」

緋色は思っていた事を打ち明ける。

「俺がウイングゼロだろ？なら齊藤はストライクが良いと思うんだ。その方が俺としても行動の予測がつくし、お互いに手の内は知り尽くしている」

「何言ってたんだ、ウイングゼロのようなモビルデバイスをもう一機作るのか？今のままでも十分コンビ出来てんだろ」

一光の言う事は最もだ。しかし、緋色は一光の反応と挙動、セイグ

リットから送られるプリセット枠の魔法のどれを使うかを推測しないといけない。その為、スバルとティアナ、エリオとキャロに比べると確実にワントンポ遅れが生じてしまう、一様年長者として負けない緋色は熟知した彼の愛機なら考えた訳だが、モビルデバイスは現在、ウイングゼロ一機で開発はおろか研究すら行われていない。当然、緋色が次元漂流した際に手持ちのガンプラが変異したデバイスだから当たり前で、メンテを担当するシャーリーは一光と隊長陣、フォワードのデバイスしか扱えず、緋色は自前で調整まで行う。

その為、シャーリーと顔を合わせる時間が長くなり、何時の間にか親しくなっていたらしい。親しくなったと言っても話をするのに抵抗がなくなった程度の事で、デバイスの開発に斬新さを吹き込んでくれるとシャーリーは言う。

「そこで、今なら六課にサンプルがある！」

緋色の言うサンプルは心当たりがある。一光も強敵と感じたモビルガジェット・ストライクだ。

再現された性能は高く、オリジナルとも引けを取らないフェイズシフト装甲や武装の威力は現行の魔導師を大きく上回るし、ガジェット共通の機能とも言っているAMF発生もその手助けをしている。アレをデバイスに改良できれば確かに大きな戦力になるだろうが。

「止めとけ、大体お前が組み上げるのが得意だったのはプラモだろ。」

「確かに、デバイスは正直分からん事ばっかだ。ウイングゼロの様に魔力を源にするのも俺一人じゃ無理だが、組み上げとデザイン

はお手の物だ。それに六課も実験部隊から新型を開発できれば、正規の部隊に・・・」

「なるかアホ、その判断ははやてだよ。まあ運用期間中に実績を残せば良いかもな」

緋色はえらく現実主義な奴になったなと思ったが何も言わなかった。

「だから、俺はシャーリーと共同で作り上げたい。この案は持ち掛けるつもりだから、もしもロールアウトまでいけたら一光、その時はテストを頼む」

「そんな時はな、承ったよ・・・仮にモバイルデバイスが出来たらセイグリットとの同時運用も考えないとな」

一光と緋色は目印となる線路を見つけ、そこで別れた。もしも思うと心躍るが、そうなたらどんな部隊になるか少し想像が出来なかった。

「確認ですか？」

二人が離れたなのは達六課一同は任務を始めていた。海鳴市内にセンサーとセンサーの設置、その為になのはとリン、スバルとテ

イアナは徒歩で、フェイトとエリオとキャロ、シグナムは車、ヴィータは飛行となのは達は久しぶりに再会したアリサ・バニングスと月村すずかと分かれ、仕事に従事している。

因みに広域捜査でもあるのでアリサが別荘を捜査員待機所及び仮設本部として提供した。

「うん、一樣って。やっぱり気になるんだろうね」

てとてとリインはなのはを追う形でサーチを継続しつつ、離れている支援班の二人が離れた理由を聞いた。

「やっぱりご両親ですかね？」

「緋色君は違うみたい、今のウイングゼロがない世界を見ておきたいんだって」

「良く許可を出しましたね、なのはさん」

「うん、カズ君は思い悩んでたみたいだから気分転換になったらいいなって」

『なのはちゃん、何だかんだでカズ君の事気にかけてんなあ』

「は、はやてちゃん!？」

念話でもびつくりする不意打ちだった。

一光の空間が停止した、それは自宅を見つけた時の事だ。

「俺、失踪？」

自宅を見つけ、なんとなく自室に使っていた離れに入った時に見つけたパソコンの画面に表示されていたホームページだった。

そのパソコンは母親の物だ、しかも自分の目撃情報を求めているらしい。しかし集まる情報は信用性に欠ける物ばかりだ。

（おいおい、俺は北海道なんぞ行ってないぞ）

画面の情報に内心ツツコミを入れて一光は部屋を後にしようとした。

「誰？」

「………兄さん？」

見覚えのない少女が、しかも傍と目のあった一光に今日な事言った。

（あれ？俺、個人結界解いてないよね？あれ！？）

自問自答をしてみるが、しかしながら現実には現実だ。セイグリットは恐らくマリアナ海溝より深いため息をついた。

『ハァ………マスターのお家族は魔力持ちの方が多いのですかねえ』

「え？ちよつ！？」

驚いていると少女は母屋に駆けて行く。どちらかと言えば驚愕で動けなくなってた、個人結界の維持すら忘れて立ち尽くした。そして一光はもう一つの両親が取った行動を知る事になった。

緋色は一目自宅を一瞥して、世間話に盛り上がる母親を見つけて大空に上がる。

「元と変わらないねえ、マジで平行世界なのか？」

答えは返ってこない、見覚えのある道や店は普通に営業しているし何ら変かはなかった。

うんざりするほど平凡な光景に安堵した。

緋色にとっては好きだったアニメが無いこと以外は普通なのだ。

「この分だと齊藤の奴、待ちぼうけてかな？」

待ち合わせのポイントに急ぐ緋色、そんな思いとは裏腹に一光は

ある意味修羅場に臨んでいた。

「てっきり死んだと思ったが、帰ってきたな！カズ」

にこやかに迎えようとした父・隆正の顔面めがけ思いっ切り拳を突き出す。

紙一重で身を引いた隆正は笑顔を崩さない。

「やるようになった、失踪中に何があった？おお、そうだ。紹介が・・・」

バチィ！と某電磁砲少女みたいな青い電気を纏う一光。

「普通なら、ああ普通なら再会を喜ぶところだろうがな！」

「カズ・・・？」

ブチ切れた我が子の様子を伺う母・望美もまた視線を逸らした。

理由は、正面にいる濃いピンク色の髪の少女だ。

「あえて言おう！この子は誰！？そして何があった！！？」

一光が怒鳴る、隆正は笑い、望美は何も言えない。

怒りの余り我を忘れたように見えるが実の所は混乱しているのだ。

「そつだな、お前が消えた日にアミティエを家で引き取った。」

余りにも堂々と言われ、一光は怒りから反転し、隆正に呆れた。

昔からだか流石に・・・うん。

「説明しようにもお前は仕事が朝早く夜が遅い。説明するにも暇がなかった。」

「いや、だからって人が生きるか死ぬかの戦場を駆けずり回っている最中に？」

「そうか、通りで遅くなるわけだ。」

「アミタちゃんはず、アンタを捜すって言ってくれて・・・自分の秘密も明かしてくれた。」

望美が言う、元だろうがこの地球だろうが齊藤夫妻は変わらないようだ。

少し、安心できた。

「秘密？」

「そう、カズの姿を見てまさかと思ったけど・・・」

『魔力のことですね、と言うとリアル魔法少女ですか』

セイグリットまで会話に入ってきた。

え？今なんて・・・魔法少女だと。

普通ならば魔法なんて宗教みたいな物は齊藤家にとって無縁の存在

の筈だった。それがガジェット事件の一件から一光にとって日常になり、両親にとっては引き取った少女の存在で知れる事になったらしい。そして齊藤家はファンタジー的展開をフルOKで乗り切る事が出来る頭の持ち主が揃っている。

「いや待て、先ずその子と親父たちの接点が分からん」

そうである、仮にも一光が消えた当日に引き取るならば、それ以前よりも前に出会っていないければならない。しかも説明しようにもと言つ台詞からかなり前だろう。

「良い質問だ。」

「簡潔に答える。親父」

事情を聴きいているうちにかなり時間が過ぎている事に一光は気がつかなかった。

緋色は滞空しながら一光の到着を待った。一人でなのは達に合流もできるがそんな事をしたら後で酷い目にあわされると知っている。いくら能天気でも収束砲をブツ込まれれば覚える物だ。

「遅いな、とつくに時間過ぎてんだろ！ゼロ、セイグリットの反応を探れ、直接迎えに行ってバスターライフルぶち込んでやる！！」

勢いに任せるのは得策ではない、繰り返す、勢いにまかせるのは得策ではない。

「つまり、行き倒れているアミティエさんを発見し、事もあるつか母屋で匿い、俺が失踪した直後に法的手続きを取り、俺がいない間に、ガジェットを相手にしている間に……！」

ああ、あの修羅場に比べて軽すぎる。あ、またイラついてきた。後半が愚痴だが気には居られない。

「ともあれ、一光。もう現実が変わらん。お前は今、帰れない事情を持っているのだろう？」

「流石親父、分かってんな。」

「なら話は早い、お前はお前の道を行け。家の事は任せろ」

「そうだな、任せろよ。次に帰ってくるまで納得のいく理由を用意しておけ、じゃないと問答無用で打ち込むからな」

「カズ、気をつけてね……」

「お袋もな。」

「話せるようになったら、その秘密も話してくれるでしょう?」

「おう」

両親との短いやり取り、肝心のアミティエは一光に見えるよう、ある物を差し出した。一光のセイグリットと同じ、銃をクロスさせたようなネックレスだ。それが何なのか今の一光には手に取るようにわかった。

「デバイス・・・!」

「私達は同じ役割を担った者同士、私はアミティエ・フロリアン。今は齊藤と付きますが、私は貴方を兄と呼んでいいでしょうか?」

一光としてはかなり心境が複雑だった。

実の弟と妹は死去している、そのせいで両親が苦しんでいたのは分かっていた。せめて心配は掛けまいと一光は仕事に打ち込んで、金を稼いだ。

それが逆に心配を掛けていたと気付かなかった。ちゃんと母屋の事も気にかければアミティエの存在にももっと早く気づいただろう。

始めはアミティエを養子に迎えると言った両親があまりにも軽率だと思ったが、両親なりの思うところもあったのだろう、親父・隆正の言うとおり、六課に戻る事が今の道だ。なら、アミティエが両親の元に居ても良いかもしれないと諦めた。

「好きにしていぞ・・・俺はまたしばらく帰ってこないから」

そう言つて飛び立つ、今度は家族の視界から消えるまで個人結界を張らずに飛び去った。

『良いんですか？』

セイグリットが尋ねる。

「良いんだよ」

『即答ですか、マスターはまだ動揺しているでしょう？』

「煩い……」

『ハア、マスター。解りやすい悩みつぶりですがウイングゼロを鎮圧しとかないとまた二人に砲を撃ち込まれますよ』

セイグリットは言うなり、猛スピードで迫る緋色をモニターに映す。

一光も訳が分からないまま、^{ヘヴィエッジ}大剣を構えた。

「齊藤！貴様に義妹が居たとはな！！」

そう叫びながらサーベルを抜く緋色、危機感に任せて逃げる一光。

「知るか！てかマジで平行世界だろ！？」

「それこそ知るか！遅いと思えば可愛い義妹とニャンニャンか！？」

「なんか勘違いしてるよ此奴！？」

「えーい！成敗じゃ！折檻じゃ！打ち首じゃ！」

「知るかドアホがッ！緋色、お前がバカな奴だとは思っていたがここまでか末期め！！」

夜空に二つの閃光が迸った。

追跡少女と食と言う武装（前書き）

作者「どうだ？一光！」

一光「訳分からん事するな！大体義妹設定なんて何で思いついた！？」

作者「ついさっき、『妹が可愛い訳がない』をCMで見て思いついた」

なのは「なんだが適当だねえ」

作者「良いのだよ、ちゃんと関係をはっきりさせたかったからな。」

緋色「おい、何で俺の扱いは不遇なんだ！？」

作者「そう言うキャラ位置だ。ゆえにパトリック的な生命力を誇るぞ！」

フェイト「長くなりそうだから、本編、始まります」

追跡少女と食と言う武装

「ほんと遅いねえ」

そんな事をなのはは呟くなり、空を見上げた。

「仕方ないよ、確認とるだけなんて出来ないだろうし、見つけちゃったら話くらいしたくなるって」

フェイトも片方の帰りを待っている。因みに片方とは一光の事だ、事もあるつかうっかりメールに書いた愚痴がアリサとすずかを通じて現在は実家が経営する喫茶店、喫茶翠屋で待機しているのだ。理由は主になるのは父・士郎が「信用に足る奴が見極める」と言ったのが始まり。

事態は数時間前、丁度日も傾いてきた夕方である。

「二人とも紅茶とかコーヒーとかイけるかい？」

「はいっ」

「どっちも好きです！」

「リンちゃんはアーモンドココアよねえー？」

「はいですう」

翠屋に立ち寄ったなのは達スターズ分隊はフェイトとの待ち合わせを翠屋で待つ事になり、高町夫妻から歓迎されていた。

「そう言えばなのは、一緒の部屋で気にかけたりしない？」

姉・美由希が尋ねた途端、なのはとスバルとティアナは肩を一瞬振るわせた。心当たりがありますと言っているような反応に桃子、なのはの母は笑顔だった。

「なのはも男の子が気になる？ユーノくんが居るのにねー」

因みに桃子が同意を求めた相手は美由希だ。美由希はなのはからのメールをすずかとアリサに見せてもらっているから悪ノリは出来ない。一樣オブラートに包んで聞いた筈だが、両親に見透かされてしまった。

「あはは、カズ君は気にしているみたいだけどユーノくんみたいで真面目だよ。今はちょっと確認に出てて居ないけど合流する予定だから」

その台詞に士郎は笑顔でTHE親バカを見せつける。

「なら、信用に足る人物が見極めようか」

から現時点に至るのだが……。

「ライトニング1からライトニング5へ、どうかしたの？」

フェイトに通信が入った、相手はコールサインから推測できる通り、緋色だ。一光も緋色も定着した支援分隊が決まっていなから時にはライトニングに二人が緊急参加する事もある。

『あー！フェイトさん！？今絶賛落下中だから当たったらごふげふっ！？』

言っているそばから歩道に落ちたウイングゼロこと緋色、ゆっくりと息を切らした一光も降りてくる。

「はあ、はあ、はあ……思い知ったか！」

「そーよ！兄さんに物騒なもん向けて！！」

アミティエが居た。同じ同型のセイグリット、ヴァリアントザツパ^{ザツパー}を銃形態で持っている。知らない青服少女の登場にスバルとティアナはしばし啞然とし、なのはとフェイトは少しムツとしていた。まあ、理由は桃子にとっては理解できたらしい。

「か、カズ君、その子は？」

なのはが指さす先にはアミティエことアミティエ・フローリアンがいる。

「……義妹らしい、一樣」

混乱する頭を必死に整理し、一光は苦し紛れに伝えたとアミティエはピースサインをして見せた。最初はよそよそしかったはずだが、一光も空中で意味のないバトルをしながら移動してきた際、突如緋色を砲撃し撃破。その後に一光に飛び付くと緋色に対して敵対心を露わにしたのだ。

「初めまして、アミティエ・F・齊藤です。」

因みにフェイト同様、彼女もフローリアンというファミリーネームを棄ててはいない。

「成程、カズ君のご両親が養子に迎えていたと」

事情をすぐに把握してくれたのはとフェイトには感謝してもしきれない。

「ま、はやての平行世界論は立証されたわけだ。ちったあフツ切れたよ、そんでだなあ」

『成程なあ、その妹さんも魔導師なんやね・・・カズ君、実は血統付きとか言わへんよね？』

はやても含め、長期の休みを利用して職業体験とか言いだしたアミティエの処遇について話し合っていた四人。はやてに至っては義妹と言うのに血統とか言いだしたよ。

「それはない、そもそも俺とアミティエは血縁がない。完全な突然変異だ。」

「でも、一樣任務中だし・・・」

「一般人を巻き込むのはちょっとね」

確かにマズイ位想像がついたが、一光もここが甘い所でアミティエの話を通そうとしている。それをなのはとフェイトが真っ向から仕事だしと断ろうとしているのだ。これが普通、しかし、この部隊長は違った。

『ええやん、魔導師やったら将来有望やしうち等もやっとなし。魔力暴発とかしたら危険やからな、それに戦力が増えるんは好都合や』

「でも、はやてちゃん。今は任務中だよ？それにカズ君の親御さんにも連絡しないといけないし、魔法なんて第一お母さんたち見たく受け入れてくれるかどうか」

なのはも受け入れることに反対ではない、フェイトも任務中でなければ魔力の危険さを諭し、六課に短期間でも居る事を進める。しかし、そうなると齊藤家に事情を説明しなければならない。

「それについては心配いりません、お父さんもお母さんも兄さんの所に行くっていったら許してくれました。」

『なら書類はうちがでっちあげるさかい、気にせんといええよ。なのはちゃんも教導よろしくな、カズ君は第一線戦力で換算するからそのつもりで』

はやてとアミティエは親指を立てていた。代わりに苦笑する四人と満面の笑みのアミティエ。

「ですから、なのはさんとはですねえ・・・」

士郎が一光に会話振って暫く逃げ出せなかった。その間にもケーキの箱詰めは終わり、士郎を言い負かすだけとなった。

「アミティエさんだったよね？私はスバル・ナカジマ！よろしく」

「私はティアナ・ランスター。しかし、貴方も魔導師なんてねえ」

「スバルとティアナね、私の事はアミタって呼んでね！」

「僕はエリオ・モンディアルです。」

「キャロ・ル・ルシエです！こっちはフリード」

「キュツクル〜！」

即効でフォワードと打ち解け始めていた、流石は年が近い女子とだけあり、一光のように苦労はしなかった。

「よろしくね、まさかと思うけど、局員さん？」

アミタが尋ねると一斉に頷いた。

「そうよ、アンタも魔導師なら解るでしょ？」

「そんな事言っても私は魔法使えるようになって一ヶ月しか経ってないよ？兄さんに聞いたくらいしか解らないなあ」

ティアナがぶつきらばうに返すとアミタは首を傾げた。

それに「いつ！？」と驚くティアナ。

「すごい！アミタも一光さんみたいな魔法を使えるの？」

スバルは目を光らせて尋ねる、しかしアミタは首を横に振る。

「出来ないよ、フツの魔力弾くらいかな。」

「それにしてもアミタさんには甘いんですね、一光さん」

エリオがふつと呟く、誰にでも優しい一光をエリオも慕っているがアミタには特別そう見えた。

「そんな事無いよ！殆どあったこと無かったし」

「え？」

聞き返したのはキャラだった。仲の良い兄妹に見えたが実際は違う、アミタが一方的に一光にじゃれついているだけで、一光は正直どう思っているのか分からない。

「会った事無いんですか！？」

「うん、兄さんは仕事で遅かったり早かったりで私が迎えられた日に消息不明になってね。私も同じように魔法と出会って母さんに打ち明けて、兄さん探して・・・今日見つけて」

「それは大変だったんだね」

何故かしんみりした空気、何だこれは？

スバルとティアナからは非難轟々という視線、何をしたのかさっぱりである。

「仕事も良いけど家族を大切にしなきゃね？」

「あれ、フェイトさん？これは俺が悪いんですか？」

「後、私も呼び捨てで良いよ。なのはだけずるいし・・・」

後半が聞き取れなかったが別にいだろうと一人で納得し肯定した一光は何とか士郎を言い負かした。さしもの士郎も「こいつが原因ですよ！」とはやての通信モニターを指さすときよっとして苦笑、変な事はしないと強く言って会話を切った。

「それじゃ、改めてだけど私は高町なのは。一様、アミタちゃんには基礎からやって、やるからにはフォワードと同じメニューに追い

つくまで！」

現在はフェイトの運転する車の中、五人が限界だろうに九人も乗っている為狭い。一光しか男性はおらず、他は女性でいろいろと不味い。しかも何溶け込んでいるのかアミタはすっかり六課に馴染んでいる。

「カズは優しいよね？」

「仕方ないだろう、親父に電話掛けたら特技を生かせる職場を体験させとくべきだとか訳わかんねえし」

フェイトがクスリと笑い、一光は正直うんざりとしていた。会って間もない、しかも義妹とか言われても抵抗しかない少女を任せた？性分から言えばご法度だ。

「でも、一光さんは優しいです。アミタさんだけに限らず、僕たちにも」

「ほんとにそう思うか？エリオ」

「はい！」

うん、これまた爽快な返事を返すな。

「それで居て一光さんは強いからすごいと思います！」

「キャラ、それは買いかぶり過ぎ・・・」

因みに、今の席順はこうだ。運転席はフェイト、助手席に一光とエ

リオが一光の膝に座りシートベルトは二人兼用、交通違反も甚だし
いが仕方ない。後部座席に左からスバル、なのは、アマタ、ティ
ア、キャラとスモールモードのライン。流石に車内まで人間サイ
ズで居る事もない。

『良かったですねマスター、ハラOWN親子に見えますよ』

セイグリットが茶々を入れる、流石愛機！と言いたところだが内
容がな。

『ほう、貴様だけハーレムモードとは・・・ほう！？』

緋色がジツとこちらを見ている。装甲の下は恐らくジトツとガン
飛ばしに決まっている。

『ごめんね、これ以上は車に乗りきれないから』

念話でフェイトが謝る。しかし、フェイトの顔は赤面している。

（親子！？え、私とカズが！？）

セイグリットの発言はこの車内のメンツには聞こえる、後部座席の
なのはと三人には届いていないようだ。が真後ろのキャラとエリオ、
フェイトには一字一句間違えずに伝わり、フェイトは内心動揺し、
エリオとキャラは「お父さん」とか呟く始末。

「おい、セイグリット。何か混沌としてる気がするぞ」

『何の事ですか？私は率直に感想を述べただけです。マスターの思
い違いでは？』

くそう！と吐き捨てたのは内緒である。

待機所に着いたのは日が暮れてからだった。

「あら、これが話に聞いていたロボット？」

待機所として利用させてもらっているコテージには所有者のアリサ、すずかとシャマルにはやてがいる。当然ながらなのはとすずか、はやてを含む古き友人メンバーは再会を喜ぶのだが、緋色が着くとアリサが急接近。

「あ、それ人がはいつとるんよ」

「人お？魔法って何でもありなわけ？」

「うーん、緋色くんの場合は少し違うかな」

アリサがいぶかしんで言うとなのはが訂正する。

「私達のデバイスと同じで緋色君の今の姿はデバイスを纏っているからなの」

「え？」

ベタベタと物珍しそうに触っていたアリサは固まった。

よくよく考えると男性の体をベタベタ触っていた事になると気付いたときには緋色が硬直から解放され、アリサにひざまづいた。

「初めまして、美しいお嬢様方。私、機動六課に協力させていただいている・・・フゴツ!？」

「何を言い出してんだ、今は仕事中だぞ！」

苛烈なツツコみを入れたのはヴィータ、アイゼンでブン殴りノックアウト。

殴られた緋色は弧を描いて棧橋に落ちた。後で蘇生してやらねば。

それはそうと夕飯の支度に取り掛かる六課一同プラスαである。

「あ、自動車」

アミタが向かってくる車に気付いた。

「はぁ〜い！」

「みんな！お仕事してるか〜？」

「お姉ちゃんズ参上！」

降りてきたのは先ほど別れたなのはの姉の美由紀さん及び二人。

「エイミィさん！」

「アルフ！」

「それに美由紀さん？」

「さっき別れたばかりなのに!？」

上からエリオ、キャラ、スバル、ティアナ。

フォワード一同で驚く、一光と言えば、蛇の如く緋色を引きずっている。

「いやぁ、エイミィがなのは達に合流するって言ってから私もシフトの合間だったし」

「そ、そうですね」

「あれ？キミが齊藤君？」

エイミイが緋色を引きずりから担ぎ上げ、平然の歩いてくる一光を見つけるなり、悪戯を思いついたはやてのような笑みを浮かべて尋ねる。別段隠す必要もないので肯定する一光。

「あ、はい。そうですが・・・何方さま？」

「ふうん、アンタがねえ。それは誰だい？」

「何だよ君は？後これはある意味不死の男だ。」

いきなりエイミイとアルフに声を掛けられて一光は首を傾げた。アルフの追及にはかつて学生時代に通用した緋色の二つ名で答えておく。

「アルフー！」

フェイトが呼んだ。

「フェイトー！フェイト！フェイト！」

犬耳に尻尾を付けた少女がフェイトに抱きついて尻尾をぶんぶんと振っている。つまりはあの少女がアルフらしい。

「元気そうだね！」

「元気♪」

二人ともとてもうれしそうだ。今話しかけるの野暮だろう。

「エイミイ、カレルとリエラは？」

「母さんが見てくる。連れてこようと思ったけど丁度おねむの時間だしね。」

「うん・・・」

『どうしたんですか？マスター』

「いやな、桃子さんも若いし美人だった。美由希さんも言うまでもねえんだがよ」

『新たに現れた美人はフェイトさんと親しそうで何なのこの状況ですか』

セイグリットと一光は話し始める。こう言った意見は即座に同一で疑問は晴れないのがセイグリットと一光の凄い所だ。流石は愛機と考えるとこころがあれである。

「ああ、それだけじゃなくアリサさんや月村さんも美人で、緋色が即効口説きモードに入っただのもあながちうなづけるしな・・・これはアレか？」

『ええ、多分。』

そう、類は友を呼ぶというやつだろう。

「あれ、この音、この匂い・・・」

キャラがどこからか聞こえてくるジュウという音に気がついた。フリードは臭いの元をたどろうと必死に辺りを嗅いでいる。

「はやて達待機組が夕飯でも作ってたんじゃないか？」

一光は適当に言ってみた。

「お帰りなさい」

鉄板焼きをしていたのはシャマルとはやて、しかし何故かシャマルが焼いている何かは既に原形を留めない何かに変異している。

「うっ！」

「シャマル、お前は何をしている？」

ヴィータとシグナムが青ざめている。ヴィータに至っては一光の影に隠れるほど、そんな弱腰キャラではないはずだがこうなるだけの威力がそれには隠れているに違いない。

「この匂いは！？」

「あ、ほんとだ！」

「生き返った、あんなに痛めつけられたのに!？」

ガバツ!と顔を上げた緋色に、屍に至るまでの経緯を知るスバルとティアナは驚き、しかもその蘇生原因が臭いとくるから驚きだ。

「あ、待ち時間あつたし、シャルに頼んでおいたんよ。」

はやてが事の経緯を説明した。つまりは、下ごしらえしたバーベキューの具材を焼いていたはやてとアリサ、すずかはなのは達の到着に気付いて一時シャルがすべて担当、鉄板を主に使っていたシャルは何かを仕出かして説明しがたい何かを作り出したと。

「なあ、はやて。」

「何や?カズ君」

「アレは何だ?教えて欲しいんだけど」

一光が指さす先には仮名称・シャル焼きがべちやりとしている。モン。風に言えば上手に焼きましたー!である。

「さあ?最初はキャベツとお肉の筈やったんやけどな」

「嘘だろ?」

「本当よ、ねえ?すずか」

「うん、でも不思議だよね?」

共に調理していたこの三人、明らかにシャルは人選ミスだろうと

思う。キャベツと肉が焼くだけで何でスライムのようにドロ〜として片栗粉を使ったようなとろみを備えるのか分らない。

「フォワード一同、食器だしとはいせん、お願いしていい？」

フエイトが尋ねると気前のいい返事と共にフォワードは素早く動いていく。これもある意味日々の訓練成果だろう。

「兄さん、アレ食べれるの？」

アミタが痺れを切らしたように尋ねる。一光は一樣首を縦に振った。

「止めとけよ、罰ゲームじゃあるまいし。」

回避を進める、強く、とても強く。しかし、恐いもの知らずとは凄いい物で緋色はスバルから一枚皿を貰うとそのシャル焼きに向かっていく。

「ちよつ！？緋色くん辞めとき！」

はやてですらあの反応、どうやら素晴らし威力らしい。

「す、凄い！藤原はアレを見て臆さないのか！？」

「死ぬぞ！止めとけスケベ！」

シグナムとヴィータが驚いている、しかも何気にヴィータは緋色のランクを下げている。

「それじゃ、緋色君にアレ片づけてもらおうか？」

「なのは！知っているでしょ！？」

「そうだよ！なのはちゃんも見たでしょ？恭也さんがアレを食べた時どうなったか！！」

因みに恭也というのはなのはの兄で高町家長男だ。今はロンドンにすずかの姉・忍と結婚して住まっている。過去の被害を目の当たりしていた友人達はなのはのぶっ壊れ発言、ないしは死刑宣告に抗議するが。

「お、案外大丈夫じゃね？」

「アンタは知らないから言えるのよ！」

一光の思い出した一言にアリサが猛反発するが、一光はかつて起きた罰ゲームを明かした。

「いや、多分昔のペナル^{ティ}茶よりはましかと。」

「カズ君、そのペナルティって何？」

なのはが小首を傾げた。

「ブラックコーヒーとキムチの素、さらに各種ドレッシングをブレンドし最後に日本茶を加えてシャッフルしたのが当時のペナルティ、それを飲みほした奴なら大丈夫だ。うん！」

「もはや茶でもないわよ！」

「飲んだんですか？あの人が！？」

「ああ、ボーリングの罰ゲームだったがアイツは爽やかに飲み切った。」

ツッコむアリサに驚くすずか、なのはは絶句しはやては青ざめ、シグナムに至っては吐き気を催したらしく口を手で押さえている。

「単に味覚音痴とかじゃねえの？」

「ヴィータ、それなら胃が異常を訴えるだろ？緋色はその後三杯も飲みやがったんだよ」

「三杯！？どんだけ用意してたんだよカズは！？」

「作ったのは俺じゃない！あくまでレシピを考えたの俺だが」

「同じだボケナス！！」

口論しているうちにシヤマル焼きを独占した緋色は最後の一口に差し掛かっていた。はいぜんはフォワードがしている為、フェイト、なのは、はやて、ヴォルケنزを始めにアリサとすずか、アミタと一光は成り行きを見守る。しかし…………。

「ぶはばあ！？」

激しく吐血して緋色はダウンした。外だから掃除は簡単だろうが、シヤマル焼き…………恐るべし！！

追跡少女と食と言つ武装（後書き）

今作のアミティエ・フロリアンはあくまでオリキャラとして考えてください。

キャライメージは原点通り、年設定はティアナと同じです。

戦闘？いいえ銭湯です。

仮・シャル焼きは兵器指定しても可笑しくはない威力だった。何せゲテモノドリンクを物ともしなかった緋色は何の前触れもなく吐血。辺りを血の海に変えて動かなくなった。

「大丈夫！？」

作った張本人は駆け寄るが一人の犠牲で大勢は救われた訳だが・・・。

「なあ、カズ」

「何だ？ヴィータ」

「霊柩車呼んだ方が良いんじゃないか？」

「いや、大丈夫だろ。」

見なかった事にした目撃者たちはこんな会話の後に楽しい食事に戻って行った。

「ごちそうさまー！」

全員が声を合わせた。しかしながら一人未だにイレズデットされない緋色は血の海に沈んでいる。血の海と言っても今ではすっかり乾いているし、若干雑草に赤いしずくが着いているくらいだ。

「さてつと、サーチャーの様子を監視しつつお風呂済ませとこか。」

「そうか、なら先に女性陣が済ませてくるといい」

はやての言うつと一光は気を使って言ったつもりだったが。

「そんな必要はないわカズ君、デバイスを身につけてれば反応はそのまま確認できるし」

「最近ほんとに便利だね」

なのはが代弁してくれた、最近はと言うと昔はずっと張り込んで居ないといけないのかと思うと気がめいる。

「技術の進歩です！」

リンが言う。

「あ、でもここお風呂ないし・・・湖で水浴びって季節でもないし・・・」

アリスが少し考える、このコテージには風呂がない。一光や緋色は耐えられるかもしれないが女性にとって、なのはやフェイト達には死活問題かもしれない。風呂ぬきは嫌だろうし、耐えがたいだろう。

「となるとやっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう！」

因みにわずか、美由希、エイミィの順だ。

「それでは六課一同、着替えを準備して出発準備！」

「これより、市内のスーパー銭湯に向かいます。」

楽しい隊長陣を余所にスバルとティアナは首を傾げる、事もあるうかアミタまで首をかしげている。もしかするとアミタも他の世界から次元漂流したのかもしれない。

「なぬ！？銭湯って！！」

おお、今度は銭湯と言う単語でリビングデットを果たした緋色。もうこの男本当に不死身の域かもしれない。

「ねえ、兄さん。スーパー銭湯って？」

「何だ？アミタも知らないのか、もしかすると養子に入る前は他の世界で過ごしていたか？」

「うん、そんな感じ。スバル達も知らないみたいだし」

「様は風呂屋だ。スーパーつつうのはちょっとした食事やマッサージー

ジ・トレーニング何かを出来る施設が一緒になっている風呂屋の事だな」

「一光さん、詳しいですね？」

ティアナがそんな事に感心していたが、一光からすれば懐かしい施設でもある。前の職場に居た時は毎日利用していたから。

「そりゃあ六課に来る前、仕事の帰りに寄るのが日課だったからな」

「そ、そんなに遅くまで仕事してたんですか？」

「おう、二十三時なんてざらだな。」

「お願いだから兄さん、しっかり休んで！」

ティアナは呆れ、アミタは何故か語尾を荒くした。

「いらっしやいませ！海鳴スパラックツアによっこ……団体様ですか？」

スーパ―銭湯に着くなり店員はそろそろと入ってくる人数に最初は

驚いていたがすぐに対応、流石はプロ。はやてがざっと見まわして答える。

「大人十五人と・・・」

「子供四人です」

エリオやキャロは先頭のはやてからでは見えなくて人数を把握しきれず、フェイトがそれをフォロー。スバルが本人が居るにも関わらずに「ヴィータ副隊長は？」と聞いた。うん、ここにも恐いもの知らずがいるな。

「アタシは大人だ！」

ごすっ！と踵で思いつきり踏むヴィータ、しかしその脚はスバルではなく。

「・・・おい、俺が何をした？」

一光の足であった。因みに足の甲って意外と急所でもあり痛いのだ。

「はいっ！こちらへどうぞ」

「あ、お会計済ませとくから先行っててな」

と言う事で会計にははやてを残し、一同は脱衣所に向かう。やはりどこも作りは似ている物だ。早めに上がってマッサージチェアにも座ろう。

「おい、齊藤！」

「止めとけよアンデッド緋色。覗こうものなら排除されっぞ」

「何でそう冷めてるのか！あんだだけの美人だぞ！？しかもお前の義妹もかなり高レベル！！覗かずして男はかたれながっ！？」

拳が見事に鳩尾にクリーンヒット、一光は引きつる笑顔で言い放つ。

「俺もフツ切れたが義理でも妹に手え出したら今度こそ刈り取るぞ？」

「そうか、家族と命は大事に……。しかし！諦めんぞ！！」

「そうか、何を諦めないんだ？」

今度はシグナムだった。

「よかった。ちゃんと男女別だ。」

エリオは何を想像していたのか暖簾の前でそう言った。緋色はまだ未練がましく女湯の暖簾を見ているが。シグナムに黙殺される。

「広いお風呂だって、楽しみだね？エリオ君！」

「うん、スバルさん達と楽しんできて。」

「あれ？エリオ君は」

「ぼ、僕は男の子だし……！」

「だつてほら！」

「え？女湯のへの男児入浴は、十一歳未満のお子様のみでお願いします？」

キヤロはエリオと入りたいようのでエリオも誘いを断り切れていない。
うむ、青い奴。

「エリオ君十歳！」

「エリオとお風呂は久しぶりだし、入りたいなあ」

「ふえ、フエイトさん！？」

「え！いや、あの・・・アリサさんやすすかさん達も居ますし！」

エリオの決死の反撃、しかしそれは無力に終わる。

「アタシらは構わないわよ？」

「良いんじゃない？仲良く入れば」

「・・・ほら！一光さんや緋色さんも居ますから！！」

そう言つてエリオは助けを求めるべく、話題を振ると。

「そうか、ならばエリオ。俺と変わればハア！？」

「良いぞ、俺らに気を使わんで」

ボディブロー一発で緋色を黙らせた一光が緋色を担ぐ。エリオの希望は薄かった。

「えー！あ、アミタさんも居ますから！！」

「良いわよ？気にしないから」

最後の抵抗も空しく、キャロがエリオの手を掴もうとする。

くの字に体を降りながらも緋色は恨めしそうにエリオを睨むが一光も親友をおいそれと犯罪の道に進ませるわけにもいかない。

「すみません、遠慮させていただきます！先に上がってこの辺で待つてますので！！」

そう言うところではエリオはフェイト達の心底残念そうな声を振り切り、男湯に消えた。

「ほれ、俺らも行くぞ」

「くそおおお！ボカス力殴るな！！」

「そうでもないと言えたらいい？」

なのは達女子はしばし呆然と一光と緋色のやり取りを見ていた。

（あんなので通じちゃうんだ・・・）

勿論、気心知れていなければ無理なやり取りだ。知れていても嫌がる人もいるだろう。

親友と言っていたから通じるところからあるのかな。かけ離れた魔法と武器で連携を組む仲だし。

なのははそんな事を思う。

アルフがフェイトの変化に気付いたのはこの時だった。

何やかんやと緋色と言い合いながら暖簾を潜る一光を見る目、その視線は見覚えがある。

（んー、何処かで見たような表情だね？でもフェイトがあんな表情かおをするなんて・・・）

アルフは少し考えたが止めた、きっとフェイトに答えが出たら教えてくれると思うから。

「どうしたの？フェイトちゃん。」

さながらそんなフェイトに気が付いたのはアルフだけではなく、親友一同だった。なのはが尋ねるとフェイトは赤い顔のまま横に頭を振る。

「え！？うつん、何でもないよ？」

「そお？フェイト、アイツと何かあったの？」

「な！何にもないよ！？」

ありました、と言うようなリアクションにエイミィだけが笑顔で頑張れとエールを送った。

（何だろう、モヤモヤした感じ？）

フェイトは、初めて感じる感覚に少し戸惑いを覚えていた。

一光が六課に来て、それから色々あつて同じ部屋になり、セイグリットに『夫婦に見えますよ』と言われても不思議と嫌な感じはしなかった。

風呂から出て直ぐにロストログアはセンサーに引っかかり、フォードが封印にあたり見事封印。

フェイトとなのはは少し昔を思い出して懐かしかった。

ホテル・アゲスタ

出張任務も終わり、季節も過ぎやすくなった。

地球で言えば五月前、即ちゴールデンウィーク前の今日、一光はライティング分隊の補佐でフェイトと協力に当たってくれている捜査部から資料の回収にクラナガンの街にいた。

「後は、地上本部か」

「うん、ゴメンね。付き合って貰っちゃって」

「何だよいきなり？構わないよ、コレも仕事だしね。」

「そう？じゃあお仕事着買って帰らない？次の作戦に必要なんだ。」

「ん？分かった。それじゃ行こうか」

フェイトが運転する車は軽快に走っていく、地上本部で偶然出会ったレジアス中将。

そんなトップから一光はある勧誘を受けた。

「おい、お前」

「はい？」

「傭兵だそうだな？」

固まった、一光は自分を傭兵と名乗った覚えはない。ましてやレジアスの様な地位の人間が管理局に協力しているとは言え、一傭兵を呼び止めようか？

『はやてがでつち上げたカズの経歴だよ』

『成る程、次元漂流した迷子ではなく傭兵ね……』

フェイトが念話で教えてくれた。実に有り難い、しかしレジアスは苛立ちを垣間見せながら返答を待っている。

「はい、その一傭兵に時空管理局地上本部の長が何かご用でも？」

少し挑発するように返すと傍らにいた局員の動きをレジアスは片手で制止した。

「何故、出身世界を探すのかは知らんし興味もないが、もしその気があるなら儂直轄になれ。」

「そうですか、残念だがその気はないよ」

きっぱりと拒絶の意を一光は示した。レジアスの顔色は怒りに染まっていく。

「そうか……」

そう言っただけの数秒、にらみ合いがあった。

憎悪を向ける様なレジアスに対し、一光は微笑みを浮かべて余裕を見せる。

「犯罪者と戯れるのがよいか？」

「お年なんだから世代交代じゃないツスカ？」

フェイトは、こんな一面に驚いていた。

レジアスを苦手とする若い局員は大勢居る、面と向かって「年なんだから隠居しろ」なんて言えないだろう。一光は笑顔で言っていた。攻撃の矛先が他に向いても的確に決る。

「行くぞ」

何人かの連れを引き連れ、レジアスが去る。

「後悔するな？」

「ええ、精々裏切られて足下を掬われん様お互い気をつけましょう。」

「そんな事言っただんか！？」

帰るなり、はやては話を聞いて驚いた。当然、事情を知るフェイトと居合わせたなのははやて程ではないにしろ驚いている。

「ほえー、良くそんな啖呵切れたねー」

なのはも実際の所、レジアスは苦手である。そしてはやてとレジアスは壊滅的に仲が悪い。経緯まで知ろうとは思わないが、一光からしてあの程度の硬派な爺程度なら口論で黙らせる自信はある。

「まあ、ちつと頭に来てな。はやて達に昔何が起きたかは知らんが犯罪者呼ばわりはないだろ？」

「ありがと」でも、カズ君引き抜こうとしたんは何でやる？」

「さあ？実歴も誰かがでっち上げた張りぼてだしな。」

「でも、その張りぼてにカズは中身を入れてるよね」

「そうだよ？カズ君はもう第一線で活躍できるし、嘘じゃなくなってる。」

自嘲気味に言うフェイトとなのはがフォローしてくれた。

そこにフラフラと入ってきたのは緋色だった。

「八神・・・部隊長、完成しましたよ・・・」

「ほんまか！？」

はやてが嬉しそうに聞き返す。緋色はシャーリーと一光の協力を得てモビルデバイスの製作に取り掛かっていた。

主張任務から帰還して直ぐに研究室に籠もりっぱなしで突貫作業。今日で五日目の徹夜になるところだったらしい。

余談ではあるが、はやては量産性を重視した試作機を地上本部に売り込む気満々である。

ある意味実験部隊である機動六課は任期を終えれば解散となるが実績は残る、デバイスに新しいジャンルを生んだとなれば高実績。実験部隊から正規部隊に格上げも夢ではない。

「緋色、こんなに早く？」

尋ねたのは一光だった、完成したモビルデバイス・ストライクは一光が使用し、実戦データを取るようになっていた。その分、一光も開発協力は惜しまずやったし、緋色とアミタのデスクワークもこなしただが、完成には早すぎるのではないか？と言う疑問を抱いた。

「それは私が説明します！」

「シャーリー！？」

「九割以上をモビルガジェットのコピーなんですよ。」

聞いた刹那、一光は緋色を締め上げる。フェイトとなのはが何とか引き剥がすと緋色は崩れ落ち、一光を抑えている二人はまあまあと宥める。

「しかし！ユニゾンデバイスとアームドデバイスの基礎理論をハイブリットさせて誕生した纏うデバイス第一号！このシャリオ・フィノ、こんなデバイス完成に立ち会えるなんて感激です！」

そう言つてカード型の端末を渡してきた。画面には確かにストライクガンダムが映っている。

「これは？」

「ストライカーフォームを最初に選択するんです、それは待機状態でありながらフォームを選択して後はいつも通りです。」

軽くいじつて分かった事と言えば緋色の努力がある意味では物にしたデバイスがこれであるという事だった。シャリーリーの言うストライカーフォーム、それは原点で言うストライカーパックの換装だった。エール・ソード・ランチャーと三形態あるストライクを起動中でも切り替える事が出来るゲームのようなシステムを取りこんだことで魔導師との戦闘は勿論、ガジェット戦もより楽になると思う。

デフォルトはエールストライカー、飛行も可能だ。ライフルとサーベル、中距離から近距離に対応が可能。

「あれ？てかガジェットのコピーって言ったよねコレ？」

「はい、ロストロギアが駆動源になっていたので改良にはそれ程苦労しませんでした。私はデバイスの基礎肯定と質問にしか答えていないので通常勤務にも差し支えなく、殆んど緋色さんが完成させましたよ」

成程、締め上げた事を謝らねばなるまいと思う。

翌日、警備任務と言う事でアミタも含めたフォワード一同と各隊長陣は移送ヘリで捜査の途中経過の説明を受けていた。

ガジェット・モビルガジェットの製作及びレリックを中心にした次元犯罪の第一重要参考人として、広域事件犯罪者のジェイル・スカリエッティが上がり、調査自体はフェイトが行うが一樣記憶にとどめておく。

「あの、八神部隊長。兄さんも作戦には参加するんですね？」

「アミタちゃん、気になるん？」

アミタは一光を良く知らない。はやての尋ねた質問は直球と真ん中で、機動六課に来たとは言え、アミタとフォワードの間には差があり、殆んど魔法のトレーニングに一日を費やしている。その間に書類仕事は一光が担当し、なのはの一部分のデスクワークも消化してアミタのトレーニングを見てもらっていた。緋色が乗っているのに一光は居ないとはおかしいと思ったのだ。

「あ、それは私も思いました！」

スバルが拳手して言う。

「そうやな、明かしてもええ頃や。カズ君」

はやてが通信モニターを開くと画面は暗いままでサウンドだけの通信となる、そこから聞き慣れた声が響いてアミタはホッとした。実際、現場の協力まで行うとは思っていなかったからだ。

『はいはい、こちら齊藤。なんか問題でも？』

「今どの辺にいるんやろ？」

『お宅らのすぐ横、そうだな……。窓から見えるだろ。』

「外にモバイルガジェットいます！」

エリオが叫び、一光が笑う。モニター越しでも十分聞こえる笑いっぷりにキャロはきょとんとして、なのはが誤解を解くために説明を始めた。

「何で！？」

「ああ、あれはガジェットじゃないよ。」

デバイスを取り出したティアナになのはが言う。何も知らないティアナとエリオはキョトンとして「はい！？」と聞き返す。

『中身は一光ですよ。緋色が要望出して、モビルデバイスを作り上げたんだよ。もつとも殆んどモビルガジェットのコピーらしいが・・肩に管理局のロゴ入っているだろ?』

「あ!」

「ほんとだ・・・」

窓に張り付くようにしてティアナとスバルが確認、エリオは一息ついて、キャロも緊張を解いた。アミタだけ首をかしげ、何故一光がそこに居るか分からないと言った様に考えている。

「兄さん、セイグリットあるね?なんでモビルデバイス何か使っているの?」

『おう、その声はアミティエか?』

「アミタと呼んでって言った筈!」

『おう、悪い。ストライクは俺が一番使っていた機体だ。緋色との連携もスムーズにいくし、ミッドで一番知っているのは俺と緋色以外いないからな。それに開発者にテスターしてやるよって言っちゃったし』

「そう、それでこの人が乗っているんだ・・・」

『どう言う訳か、突貫で完成させたらしくてまるつきり寝てないんだよ、緋色の奴。』

「せやから、ストライクの馴らしも込みでカズ君が外飛んでるんよ。」

分かった？」

「ほんと、アミタは緋色君のこと嫌いなんだね。」

「はい。」

はやてと一光から事情を聴いてアミタは納得、しかしフェイトの質問には即答だった。

「ところでシャル先生、その箱は？」

キャラが薄く四角い正方形の箱を指さして聞いた。シャルの足元にある箱は警備任務とはかけ離れた存在に見える。

「隊長達のお仕事着♪」

シャルは楽しそうに笑顔で答える、中身を知る者からすれば笑えないだろう。きっと笑えない。

「慣れない服は着るもんじゃないな・・・」

『何言ってますか、役得ですよ？マスターは何だかんだで美味しい奴です』

ホテル・アグスタ受付前、そこにはスーツ姿でびしっ！と決めた一光が居た。

普段はラフな動きやすさを重視するのだが今回はそう言うわけには行かない。

資産家や骨董品マニアだろう金持ち貴族がわんさかと来ている。明らかに場違いだが仕方ないっちゃあ仕方ない。

セイグリットの言う意味が分からん。何が役得なのかサッパリだ。

「ごめん、待ったかな？」

「いや、以外と早い……」

「どうしたの？固まっちゃって」

「何処か変……かな？」

はやてが来たと振り向けば、そこには普段とは違う三人が居た。

華やかなドレスを纏うなのは達、確かに普段でも美少女と言われれば肯けるのだ。化粧をして着飾れば当然……役得万歳。

「いや、変というか綺麗だ。」

「ややわあ！褒めても何もでえへんよ？」

顔を赤らめる三人、はやては照れ隠しかそんな事を言っていた。

「所でカズ君は誰と回るの？」

なのはが尋ねると一光ははやてに助けを求める。まさか、こんな会場警備も隊長の随伴なんて有り得ないだろう。

「カズ君が好きな方と回つたらええよ」

うん、前言撤回。狸は着飾っても狸だ、おのれ役得……。

「私とだよね？」

ぐっ、と袖を引っ張ったのはなのはだった。何故か気まずい。

「なのは、何言ってるのかな？私とだよね、カズ？」

負けまいとフェイトが空いていた左手を直に掴む。何？何処で間違えればこんな修羅場に？

因みにフェイトから逃げ切る自信はない。

「カズ君次第やけどウチと回る？」

はやてが満面の笑みで誘う。何だ、この四面楚歌！

「アミタはあんまり魔法得意じゃないのね？」

「そつだよ、ティアやスバルに比べたらね」

アミタはティアナと警備にあっていた。

メイン会場は隊長達が警備しているのでフォワードが担当するルートは比較的暇である。

「一光さんが短期間で私たちを追い抜いたからてつきり」

「兄さんは無茶ばかりして身につけたみたいだけど私は出来ないし。特別多く魔力を持つてるわけでもない」

「凡人は、私とアンタだけか・・・」

ティアナは呟いた、化け物じみた伸び方をした一光にも異常だと感じたティアナだがアミタと共感できる部分があった。

凡人と言う意味ではウイングゼロなしでは何も出来ない緋色もだが、ティアナはそう思っていない。

「私には、私のスピードがある。それはティアも同じだよ？スバルとコンビなら一緒に伸びてるって」

アミタはそう言ってティアナを励ました。

一光は室内警備、その権利はなのはが勝ち取った。

因みに公平なジャンケンで、辺りからは小さな笑い声が聞こえたがそこはやはり十代乙女。

まったく、と言うほどではないが気にしなかった。

「ノリノリだね……」

「うん！気にしないで、今回の警備ルートだけど」

モニターに見取り図を出すのは、少し前には思いもしなかった状態で少し緊張気味のー光はモニターを覗きこんだ。殆んどオークション会場がメインで、ー光は防衛機能のチェックに回る手はずだ。

『カズ君、今日はどないするん？』

はやてからの念話で、内容が読めなかった。今日はどうするとは一体。

『ストライク、実戦配備はしてないんよ。あくまで試験演習、フォードの対モビルガジェット訓練にあてたいんや』

はやてが言うには、モビルだろうがノーマルガジェットだろうが隊長陣は問題にならない。当然だ、なのはがやられるなど想像もできない。

『おう、それは願ってんない事だ。』

『そつか、良かった。緋色君は実戦で性能見極めたいらしいけどそのプランでいこ。なんもなければカズ君の出番はないから』

『りょーかい』

そんなやり取りで終わる念話、なのはと分かれ、防犯設備をチエックし終える。

「それじゃ、もしものときはアミタとキャロは下がって、私とスバルか、エリオ込みの三人でいく」

「うん、分かった」

ティアナはアミタに最終確認をとっていた。五人でのフォーメーションは訓練中出来なかったので、ティアナが建てた即興の物を伝え、事を待つ。起きては不味い、不味いがまあ、いいか。

屋上ではシャルと緋色が監視していた。その索敵範囲外でガツチリした大男と小さな少女がニヒルな笑いを浮かべる科学者と通信をしていた。

「何だ？レリック以外での連絡はない筈だ。」

そう言う男に科学者は笑う。

『そう言うわなくてくれ、もうすぐオキシオンが始まる。そこに私の欲しい物が紛れ込んでいてね。』

「なに？」

浮世離れた感じの少女は聞き返す。科学者はより凶悪な笑みで答える。

『これさ。』

モニターに差し挟まれた画像には文様が描かれた棒が、剣の柄と繋がり、全体的に見れば一振りの剣、しかし刀身と言うより棒で何かの儀式剣にも視えない。

「取ればいいの？」

『ああ、可愛いルーテシア。ありがとう、それと例のロボットと面

白い魔導師が嗅ぎつけるかも知れない。気をつけるんだよ』

男は、そうは思っていない科学者を睨んでいた。

最悪の未来（ヴィジョン）

「クラールヴィントのセンサーに反応!？」

「センサーに感、敵は・・・ノーマルタイプか。」

屋上でシャマルと緋色が同時に敵を捉えた。これに対処するのは遊撃をウィータとシグナム、第一防衛ラインをザフィーラ、最終防衛ラインをフォワードである。

『藤原、作戦通り、狙撃できるだけ狙撃してくれ。ただし、威力は絞れ』

シグナムが指示を出す、緋色は肯定してツインバスターライフルを構え、未だに山岳地帯を抜けきれないガジェット一型と三型にターゲットをロックする。

「戦闘レベル、最大効果確認」

あくまで拡散を押さえただけの砲撃に大抵のガジェットは吹き飛ばす筈だった。

「転送……」

ルーテシアと呼ばれた少女が、着弾前にガジェットを転送し、仕留めたのは数体の一型のみ。大男もまた、襤褸切れみたいな布の下にデバイスを握る手に力がこもる。

「無茶はするな」

「うん、大丈夫」

希薄な返事を返して、ルーテシアは魔法陣を展開した。

「来ちまっただか……」

ユーノが今解説する骨董品オークション会場で、一光は念話をした状態で呟いた。無事済むとは思っていなかったが、モバイルタイプも無しの攻撃があるとは。

「責任者さんはなんだった？」

「オークションは続行、防衛ラインを突破されん限りは中止せんゆうとるよ。でもシグナムもヴィータもおるし、緋色君もいる。フォワードまで流れ着かんやろ」

『ワープとかそう言った魔法の類は警戒しないのか？』

『そうやね、一樣保険にカズ君は斬りこんでみて。活性化モードエナジーズなら簡単やろ？』

『毎度のことながら無茶を言っねはやては……』

念話は切り上げ、一光は会場を後にする。斬りこんで、その先に魔導師がいたら鎮圧。簡単そうで難しい仕事だ。

「来た！」

「転送魔法！？」

「優れた召喚士は転送魔法のエキスパートでもあるんです！」

最終防衛ライン付近、ティアナとアマタ、キャロ側に出たガジェットは早々に先制したティアナの弾丸を無効化し、三型が迫る。

「やあああつ！」

それに対応したのはアマタ、一光のセイグリットヴァイパーと同型

のヴァリアントザッパーを大剣に換え、それを突き立てる。すぐにスバルがヴァリアントを杭を撃つ要領で殴打、意外なコンビネーションで一機撃破。

「やった！」

「気を抜かない！来るわよ！！」

「え！？」

ヴァリアントを握り直す間もなく、ガジェット一型がアミタに迫っていた。

放たれるレーザーを避けることが出来ず、自動防御が発動して障壁が防いだ物のじり貧である。

（どうしよう！？こう言うときは！）

考える間も与えたくないようで、回り込んだガジェット、スバルとティアナに牽制を仕掛けるガジェットと無人機の動きでは有り得ないパターンを組む。

「アミタ！動いて！」

「この動き、まるで有人！？」

スバルが叫び、ティアナが分析。エリオをフォローに向かわせると抜けられてしまう。

「ひっ」

声が詰まった。

アミタがようやく避けて反撃に移れた先に三型がいたのだ。一型とは出力が比にならないレーザーを防げるか疑わしい、アミタが恐怖で凍り付く。アレに撃ち抜かれて死ぬのか？と自問した時、無性に恐ろしくなった。

『遠隔操作ですかね？マスター』

「知らん、が！」

一振りの剣がガジェットを貫き、青白い閃光を纏う一光がそこに居た。

「妹だからな一様・・・」

『割り切れてないんですか？』

「まあ、そりゃあね」

セイグリットと愚痴愚痴言いながらガジェットを破壊してアミタを救った。その姿はアミタから見たらカツコイイ兄である、一光の境遇を出張任務から帰還途中になのはから聞いた時に何処か自分に接するときの溝が理解できた。そんなアミタも今のは些細な事を忘れてしまうほど、見惚れてしまう程だった。

「立てるか？」

「あ、うん。」

ザッパ
銃形態で持ち直したヴァリアントとセイグリットを兄妹は放ちながら一光は深みに切り込む。アミタはティアナを支援しつつ、エリオも気にかかる余裕を取り戻した。

「一光さんカツコイイ!」

「嘘!?アレが・・・ねえ」

スバルも目を輝かせ、ティアナはりニアレールに出動した時の飛び降り拒否、怖気づいた一光とは別人だと思った。アレさえ見ていなければスバルと同じ感想を抱いたかもしれない。

「ハアッ!」

シグナムが斬り込むとガジェット三型が見事にベルトを巧みに操り、レヴァンティンを受け止める。一瞬驚いたシグナムだが、それで隙を作るほど甘くはない。反撃の気配を察知するや後方に飛びのき、障壁を張り、レーザーを防ぐ。

「打ち砕けー！」

空からシュワルベフリーゲンによる鉄球狙撃をしていたが避けるはずもないガジェットのおわぬ回避に数発地面に激突する。

『ヴィータ、気づいたか？』

『ああ、いきなり動きが良くなりやがった。転送で何体か後ろに行つちまつたし、くそ！』

『落ち着け、ならば私達が早急に殲滅して向かえば良い』

『その必要はないですよ？シグナム』

ヴィータの撃ち漏らしたガジェットが幾分も行かない距離で起爆している。念話に割り込んだ一光が破壊してまわっているのは明白だが、シグナムは怪訝な表情になった。

『何故、齊藤がここに居る？』

『はやての指令でね、少しばかり斬りこんでみる。』

『……無茶すんな、無茶したらアイゼンでぶん殴るからな！』

『おう、敵さんの顔を拝んでくるよ』

飄々と軽い口調で答える閃光の主は既にシグナム達から離れつつある。ヴィータはただ不安を噛み殺した。一光はなのはの様な様だ、昔の無茶を繰り返す頃のなのはに似ている部分がある。

「死ぬんじゃないぞ……」

ヴィータの呟きは爆音にかき消されていった。

「む？どうやら嗅ぎ付けられたか」

男性が眼下の森を見て呟く。

常人では捉えることすら難しい速度を木々の揺れや爆音の接近、何より殺気で近いことを理解する男性。

片手剣ダブルフェンサー二刀流を携え、一光は飛び上がる。

「よう、少女にオッサン」

落ちながらセイグリットの刀身は赤く熱せられている。

火焰煉瓦刃を使用した状態で男性へ飛びかかった一光は左側を銃ザッパに換え、魔法陣の中に立つ少女を狙う。しかし、男が邪魔で狙いが定まらない。

「若いな……」

「そりゃどうも」

少女の前に男である、この男は戦い慣れている。一光も喧嘩慣れはしていたが、そう言う戦いではない。

命のやり取りに慣れているのだ。

「だが、いい目をする。」

男が槍を振り抜く、受けから攻めに転じた勢いで片手剣^{フェンサー}を弾き、無防備になった所へ切り込む。

「っ!？」

身を引いて直撃を避ける。胸板を横一閃、裂かれたジャケットは湿っていく。

「惜しいな、反応が良い・・・」

「そう簡単にはいかんよ。それに実戦での対人は初めてでね」

槍と剣では、勿論リーチは槍の方が長い。数歩バックステップを踏み、その間に大剣^{ヘヴィエッジ}へ換え、一気に踏み込む。

「武器を捨てて、投降しろ! そうすれば弁解の機会だってある・・・」

大剣が振り下ろす途中に弾かれた。

「ふんつ、我を使わせるからどんな奴かと思えば貴様か・・・」

有り得ない、一光がそう思った時、白銀の濁流が押し寄せた。

『セイグリット、アラート』

ゼロシステムを起動させている最中は緋色の口数が極端に減り、胸部に位置するデバイスコアが光り続ける、そして未来を見せる。緋色がこれを選択し、実現させる。

「あのバカ！」

事件は終息に向かっていた、オークションを襲撃したガジェットは全機撃破して今のところ負傷者はいない。ただ一人だけ、戻っていない奴がいる事以外は何事もなくいつもの任務通りだった。

緋色がフェイトの制止の声を無視して飛び出して行ったのは丁度、ウィータが探しに出てから二十分くらいたってからだった。

「兄さん、遅いな・・・」

ミスショットをしてしまったティアナ、一光に救われたアミタは正反対の方向で待っていた。アミタは現場検証が始まってすぐにはやてと査察官・ヴェロッサと共にロビーに居る。

「まさか、何かあったのかい？」

緑の長髪を揺らしてヴェロッサが我ここにあらずと言った感じのアミタの視線を追う、それは一光が斬り込んで行くと言った転送魔導師の居る方角だ。もっとも居ると言ってもあくまで保険と見回ってもらっただけだった、警戒心を張り詰めている一光の不安を和らげようとはやてが言った案。

「何にもあらへん。この子の、アミタちゃんのお兄さんはそれこそ不死身みたいやし」

はやても若干不安を感じている。ティアナの焦りはあの事が原因だし、しかし一光は民間協力者、それに今までも笑って帰ってきた。

「だといいね……」

ヴェロッサの台詞が、この後にだと良かったと思える事になる。

「ふざけんな！あんな未来・・・現実になる訳がねえ！！」

緋色が焦って飛行する、白亜の翼を広げて最大戦速で向かう先は最後にセイグリットがアラートを発した地点。

その方角は既にヴィータが現場調査に向かっている、巧く行くならヴィータに手伝ってもらおうと思う緋色は急ぐ。

ヴィータはガジェットを差し向けた誰かの手がかりでもないか一頻り探した後、事件の手がかりよりも先に見つけねばならない人物を探していた。

「居ねえ・・・何処まで行っただよアイツ。」

地面に残るブリツアクシヨンの後から推測するにここを通ったのは間違いない。その後の痕跡が数十メートル離れた木にあるが、その後一切なくなっている。

「ま、あいつもガキじゃねえし帰っちまってるかもしれないしな。ティアナの奴大丈夫だよ・・・な」

誤射した時、間一髪で誤射からスバルを救ったのがヴィータだった。そのときつく当たってしまった。今思えば、なのはなら上手くフォローできたかもしれない。でもヴィータにはそんな事が出来る訳がない。

ガシガシと頭を掻いて空を見上げる、ネガティブな考えをリセットするように見上げた空に緋色がいた。それもこちらに向かってくる。

「ヴィータ！齊藤見てないよな！？」

「んだよ？お前、シャマルと一緒にリーダー役じゃ・・・」

ヴィータが持ち場を離れた緋色を咎めようとした時、がしやりと何か金属音がした。

「誰だ！？」

ヴィータが叫び、揺れる茂みの先に居る誰かに問う。しかし、彼は答えずに倒れた、答えられる状態ではなかった。

バリアジャケットはズタズタに破れ、左肩には武骨な剣が刺さっている。至るところの切り傷は何か鋭利な物で切り裂かれたのだろう。そんな満身創痍の彼は弱弱しく答えた。

「よお・・・ヴィータ、に・・・緋色」

ヴィータが思い出したいくない記憶をフラッシュバックさせる。緋色がデバイスを解除して駆け寄り、立ち尽くすヴィータは歯を食い縛って一光の元に向かう。

思い出したくもない、あの事件と重なった。

もう二度と起こさない、起きさせはしないと誓ったはずだった。

「おい・・・！」

呼びかけても血まみれの一光は返事すらしない。

・・・仲間を護り通して見せると誓った筈だった。

「ヴィータ！手え貸してくれ、コイツを運ばないと」

うろたえる様に呼びかけるヴィータは、割と冷静な緋色にこの時ばかりは感謝した。

「おい！一光おお！！」

最悪の未来（ヴィジョン）（後書き）

作者「取り合えず怪我せえ主人公」

一光「ふざけんなああ！！」

終わらぬ前進

オークション警備任務から三日、医務室には左腕が機能不全に陥った一光がムスツとして寝ていた。

傷自体は即日完治。やはり医療魔法は凄い、力量による左右もあるだろうがこれはシャマルに感謝だ。そして、何故か仕事中的アミタが横に居る訳で。

「アミタ、お前訓練は？」

「今はそんなことどうだっていいもん！」

何故か涙ぐんでいる、一応言っておこう。一光は沈黙に耐えきれなくなつて聞いただけであつて、アミタが鬱陶しいとかそういう意味ではない。

「……そつか。悪かつたよ」

ただ謝るしまない、アミタにとってミッドチルダに存在する唯一無二の家族は一光だけ、それが一時でも大けがをすれば心配するし、アミタは血まみれの一光を見ているだけに泣きじゃくっていたそうだ。

「カズ君、よう避けきつたなあ」

入ってきたはやてはセイグリットを差し出して言う。記録されていた映像ファイルに犯人と思しき人物を見つけたからだ。

「しかし、誰や？このキンピカピン」

ご丁寧に写真を用意しているはやて。一光もそれが知りたい、どうして初対面の筈なのに声音には聞き覚えがあったのか。

「分らん、取り合えず不思議なのは、個人単体でアレだけの剣を飛ばす魔法があるのか？」

「それだけやない。剣だけやのうて鎌に鉋、薙刀・・・上げたらきりのない種類や、それを空間から射出しとるんよ。少なくともこんな魔法は存在するのか疑わしいで。それより、カズ君、どうする？」

「というと？」

「決まってるやん！このまま協力しても今回みたいな事もあるんや！！アミタちゃんと実家に帰って・・・」

「却下で」

はやては話しながら俯いていたがバツと顔を上げ、驚いていた。

「それにな、俺は生きている。次がある以上負けはしない。」

「でも兄さん死ぬかも知れないんだよ！？」

「大丈夫！立ちまわり次第さ。それに俺にはストライクもある。」

喰って掛ってきたのははやてでは無く、アミタであった。今にも泣きそうで必死に訴えているがコレは譲れない。

「まさか、ストライクでやるつもりなんか!？」

はやてに至ってはさらに真顔で驚く。

「おう、それ用にセイグリットの機能調整プランもあるしな」

「却下や!カズ君はまだ絶対安静!！」

「いや、大丈夫だよ!ちと血が不足してますけども!！」

アミタはとはやてにダブルパンチを食らい、一光はまたベッドに沈んだ。

時は過ぎ、昼休みになった。食堂を目指すフォワード一同及びなのはとヴィータ、途中で合流したアミタはやはり浮かない表情である。

『ねえ、一光さんの調子はどうなの?』

ティアナ自身も劣等感に悩み、最近はやど寝ずの訓練を続けている。しかし、目の前で兄を失い掛けたアミタの気持ちを分らない訳じゃない。

『まだ協力するって、ストライクがあるからって・・・』

アミタが一光を実家に引つ張つてでも帰りたい気持ちを一光自身は知らない。ティアナも最愛の兄を亡くした事があるため、どうしても放つては置けないのだ。

「なのはちゃん！カズ君知らへん！？」

息を切らしながら走ってきたはやてが尋ねる。

「はやて、あのバカがどうかしたのか？」

聞き返したのはヴィータだった。

後れてきたリインがさらに言う。

「医務室に居ないんです！こんなメモ用紙まで残してあったんですよー！？」

リインは抱えていたメモ用紙を広げた。そこにはこう書かれている。

“血を補充してきます、無茶はしないんで”

暫しの沈黙、そして一同の顔色が変わる。

「フォワード一同、カズ君の搜索を開始！」

「簀巻きにしてもいい、見つけ次第トツ捕まえる！」

なのはとヴィータが指示を出すとバツと走り出す五人。

一度は意識混濁まで行く大怪我をしておきながら動き回るなんて愚の骨頂である。

「アンタの兄貴ってバカ!？」

「返す言葉もないよ!」

「もし傷が開いたら大変ですよ!」

エリオが言う傷は古傷、一光は古傷だらけだ。これはたまたまシヤワー室で見たエリオがよく覚えている。

「手分けして探しましょう!」

キヤロが言う、五人で探し回るより効率的である。

「そうね、幾ら人間離れしていても人なんだから!」

各自デバイスの通信回線は開いたまま、敷地内を走り回る羽目になった。

「終わった。」

『ミッションタイム407にて終了』

ウイングゼロがカウンターを告げる、ちなみにコレは四時間七分である。

お昼休憩にめり込んでも何とか三人分をクリア、さすが社会人である。

『レイジングハートより通信』

「繋いでくれ」

緋色はウイングに告げ、現れたモニターに映るなのはに首を傾げた。

走りながら通信とは珍しいな。

「へーい、こちらライトニング05。どないした？」

『緋色君！カズ君が居なくなっちゃって・・・はっ、居場所に心当たりない！？』

ある訳ないが、大抵は彼処しかない。

「なのはさん、食堂回りました？」

『ふえ！？』

「お前、ホントよく喰うな」

ヴァイスが呆れ気味に言う。

緋色の予測は当たっていた。一光は食堂に居て暴食している、レバニラ定食の空き皿が既に五人前。

「仕方ねえっしょ」

「いやだからって医務室抜け出してまで喰うのか？」

怪我の度合いで言えば、魔法を使ったからと言っても精神面までは速攻ケアできない。ヴァイス自身それを知っている分、目の前の男が信じられない。実戦に恐怖するわけでも無し、怪我に対するトラウマとかもない。

「無くした血は補えねえし、今は左手を何とかしたいな」

力を入れた途端に抜ける腕を見る、日常生活は支障がないかも知れないが戦闘は別だ。ましてや一光のバトルスタイルは形式で言えばベルカ。

唾競り合いで力が入らないでは話にならない。

「コレばかりはリハビリかな・・・」

「そうしけた面すんな。妹さん、心配すんぜ？」

「そうだな、よし！お代わりしよう」

「まだ喰うのかよ！？」

今ならスバルとエリオにも負けない、ヴァイスはそう思った。

なのはが食堂に駆け込んだのは丁度、一光が食い終えた時だった。

「ああ！こんな所で何してるんですか！？」

リインが咎める。

良いなあ、リインみたいに乘っているだけなら息切れなんてしなくて。

「鉄分補給」

「だからって無断で動き回らないで下さい！」

「いやいやリイン、貧血で動き回るって結構重労働だよ？それを考えれば怪我事態は完治してるんだから……？」

反論中にいきなりバインド、それも腕だけではない。

しっかり足まで拘束して歩けない、これでは転んでしまうではないか。

「それでへんな書き置きして食事？」

なのはが素晴らしいプレッシャーを放っている、某木星帰りの機体よろしく動けたものではない。

「アタシらが探し回ってる間に・・・良いご身分だなあおい！」

アイゼンを向けて殺意むき出しのヴィータ。

「いや、あのですね・・・心配してくれるのは嬉しいんですがっ！？」

魔力弾かヒット、見事に眉間を撃ち抜いた。

「こつちがどれだけ心配してるか・・・」

アミタが放ったスタンバレット、鎮圧用魔法の使い方を間違えている。いや、これはある意味正解だろう。

「こんな所に居ったんか！」

「そんなにお腹が減ってるなら私が作って上げますから」

最後に駆け込んできたのははやとシャル、フォワード一同である。何気なくシャルが死刑宣告を言い放ち、この時ばかりは皆

「いい気味だ」と同意見だった。

それから午後の勤務が始まり、一光は屍と化していたが、はやてがアマタに頼んだのは一光の監視。

なのは達からすれば有り得ない行動力と生命力に驚かされるばかり、家族なのだからと不適な笑みを残したはやてに暫し苛立つ。

「何で兄さんは無茶ばかりするの？」

アマタに尋ねられ、少し考える。

一光は無茶をしたつもりはない。しかし、基本から学んでいるアマタからすれば、アレはどうなのか？となのはに尋ねれば絶対に真似しちゃ駄目と言われる。

「してるつもりはないんだけどな」

「してる、それにあんな大怪我した後なのに」

出来ることなら、自分も同じ所で戦いたい、一光を助けたい、その思いがアマタの焦りに繋がっている。

「大丈夫だよ、俺は死なない。」

「そんなの有り得ないよ」

「なら実現させるさ。」

「ふふ、変なの。兄さんは昔からそうなの？」

アマタがようやく微笑む、部屋の外で緋色は踵を返した。

兄姉の時間を邪魔したくない。

「これ以上アマタを泣かせないで下さい！」

「善処します」

何故かお見舞いと大量のアイスを持ち込んできたスバルとティアナ、そしてティアナの第一声がコレである。

『ティア、お兄さんを亡くしてるんですよ。アマタの気持ちを無視する一光さんに一言言いたいそうです』

念話でスバルがティアナご立腹の理由を教えてくれた。

「しかし……スバル。それで何個目だ？」

スバルの手元には空になったアイスカップが山になっている。

「ふえ！？」

しかも、返事した数秒にはアイスが平らげられている。速い、速すぎる！

「スバル、少し控えないと太るよ？」

アミタが言う、でもそれを言ったら普段の食事量からして既にブクブクではなかるうか？

「そんな事無いって！普段から動いてるし、前線のカロリー消費は凄んだぞ？」

何故か確信に満ちている、アレ？となるとスバルやエリオ位が普通かと思えばそれは違う。

「それにしてもどうすれば一光さんみたいに強くなれるんですか？」

エリオに尋ねられて、コレはコレで返答に困る。

やらなきゃならない状況に追いやられて、やらなきゃ死と言う状態が始めに組み上げられた。思い返せば、最初のガジェット戦からコツを聞いたわけでもなければ、教わる機会があるわけでもない。

「そうだな、やらなきゃ死ぬ。その状況で生にしがみつくな」

「はあ？何だか意味が分かりませんね。」

「そうだな、エリオ。でも俺は追い込まれた中で活路を見出してきたんだ。」

しばらくの沈黙、その一間にティアナは少し考える。

（追い込まれた先の活路……そんな事出きるわけない。才能のある人の理屈だ）

「まあ、その活路は人ソレゾレ。無茶な特訓の先にあるかも知れない、普通に生活している先にあるかも知れないんだから分からないよなあ。基本的には努力を怠らない事かな」

「それで今の？」

「ま、そう言うこった。才能の有無に関わらず、努力は人を裏切らん。」

エリオが尋ね、一光が完結させる。就職した当時から一光の言うやらなきやならない状況を打破してきたから言えること、実際、魔法のセンス云々を言えば一光は六課の誰よりも劣る。

ストライクは別にしても、セイグリットを扱い、基礎と自主トレを繰り返し、何とか現状の力量にこぎ着けたがこの様で正直、フォワードにはこんな目にあつて欲しくはない。

「あ、そうだ！明日模擬戦があるんですよ、良かったら見に来てくれませんか？」

スバルが思い出したように言う。

「構わないけど、許可貰えるかな・・・」

「良いわよ?」

突然現れたシャマルが告げる。

「でも、安全な場所から観戦。傷が痛んだりしたらすぐに帰ってきて、この二点を守ること!」

「了解、だそうだから行くよ」

「はい!いつもとは違う私達が見れると思いますから」

この時の安請け合いを後に少々後悔することになる、自分の性格に。

翌日、ストライクのアーマーにセイグリット専用ホルスターが備え付けられた。

ザッパ

銃固定になつてしまつがAIを搭載していないストライクの管制がセイグリットの主な役割になり、物理兵器であるコンバットナイフ・アーマーシュナイダーの廃止にともない急遽改良した状態だ。

「悪いな、藤原。」

軽く謝ると一光は小走りで訓練場を目指す。予想以上に時間を喰つてしまった。

「悪い、どんな状況・・・」

「私は！もう誰も傷つけないから！！」

観戦しているエリキヤロコンビ、ヴィータとフェイトに合流した時、言い切るより先に聞こえた悲痛な叫びに何も言えなかった。

後の結果はゼロシステムに頼らなくても、誰でも予想が付いた。

なのはは撃つ、経験から組み上げたんだと聞いた訓練メニュー。それは基礎と基本を繰り返す物だ。

裏を返せば、なのは自身が基礎と基本の重要性を理解する出来事があつたのではないか？

一光は悔いた、無責任なことを言った。間違いなくティアナは自主トレをしていたはず、スバルだって「新しいアタシ達」みたいなことを言っていた。

努力は才能の有無に関わらず人を裏切らない。

ティアナが思い詰めていたとは知らずに、しかしとても無責任ではないか！

「セイグリット、エールストライカー……」

なのはが放ったクロスファイアは見事にティアナに直撃した。それを見たスバルがティアナに駆け寄ろうとしたが、既にバインドで拘束されていて、なのははスバルを一瞥する。

「じつとして……そこでよく見てなさい。」

観戦していたアマタにもなのはの行動は衝撃的だった。しかし、一光が『すまん』と念話してきた時、ティアナの本心と悩みを聞いてから何と無く一光の行動が読めた。

「もう、バカ兄貴」

なのはが放った収束砲はティアナの前で止まった。正確には防がれた。

「ギッ！」

収束砲が弾けるとそこにはストライクが、一光がいた。上手く力の入らない左腕にシールドを固定し、ライフルを放ってスバルのバインドをかすめ、撃ち斬る。

「——っ！カズ君・・・」

なのはの視線が一光を射抜くような鋭さを持っている。しかし、一光も引かない。

「・・・やり過ぎだよ、なのは」

「・・・教導が間違ってるって言いたいの？」

「そうは言わない、俺は教導がどんなものかは漠然にしか分からないし、無茶したんだろう二人に非があるのも分かる。」

「——なら！」

「前にこの訓練メニューは経験から組んだ、そう言ってくれたことがあるよな？実際、密度は濃くても言うほど疲れは溜まりにくい。なのはも無茶が原因で怪我したことがあるんじゃないか？」

「——っ！！」

「アイツ！！！」

厳しい面持ちでヴィータとフェイトは事成り行きを見守っていた

が一光の介入に驚いた。

「おい、止めんぞ！」

ヴィータが駆け出す、それをフェイトは止めた。

「何すんだよ！このままじゃアイツ、落とされんぞ！？」

「ここは……カズに任せてみよう」

フェイトは過去の自分となのはを、今の一光となのはに重ねていた。

なのはは一光に尋ねられ、返答できなかった。

「今回の模擬戦、これにて終了とする。スバル、ティアナを医務室に連れて行ってやれ。」

今にも倒れそうなティアナを支え、スバルに放り投げる。刹那、再び収束砲が襲いかかる。

「勝手に決めないで！」

「ぐう！」

シールドで受けるにも限界がある、それに前より威力が上がっている。

「どうして勝手な事するの？」

そう尋ねつつ、なのはは次射の発射態勢に入る。

「俺は、今までの教導に間違いはないと思う。でも！今回は度が過ぎるか……」

「カズ君に私の何が解るの！！！！」

怒号と共にデイバインバスターを放つのは、この怒号もなのはの本心だろう。

紙一重で回避し、一光は反撃の素振りを見せないまま言い募る。

「確かに解らないさ！だけど伝えようとしたか！？」

アクセルシューターの魔力弾が追撃、一光が追撃する魔力弾を撃ち落とし、今度はサーベルを抜いた。

「話さないで、何が伝わる？どうやって伝えるんだ！？」

撃ち落としきれなかった魔力弾を斬り、叩き落とす。しかし、対応に追い付かずにデイバインバスターが直撃した。

「ああっ！」

流石に任せようと言ったフェイトもコレには声を漏らして心配している面持ちで煙が晴れるのを待つ。しかし、煙を貫いて青い閃光の中に赤みの混じった、ガジェットのレーザーに酷似した収束砲に啞然とする。

「っ！……どうして！？」

避けたなのはも驚きと困惑に駆られた。

自分は、自分の教導内容は間違えていない！間違えた、危ない無茶をした生徒を正そうとしただけだ。なのに、彼はどうしてここまでするか？

「そうだな、伝え方は言葉だけじゃない……か」

いつの間にかランチャーに換装した一光が身丈ほどある砲身を構え、一息吐く。

「一つ、提案……スターズコンビの模擬戦、俺が引き継ぐ。」

「……良いよ、負けたらこんな事した理由聞かせて貰うから」

ジャキツ！とレイジングハートを構えるのは。

「……俺が勝った時は、しっかりと話し合いの場を持ってティアナ達に話して上げてくれ。」

エールに再び換装し、ライフルを構えた一光。

想定外の真剣勝負が幕を開けた。

終わらぬ前進（後書き）

次回はエースオブエースVS戦！

すれ違った思い

飛翔する一光をなのはが追い、レイジングハートを向けて狙いを定める。

放たれた閃光を紙一重の距離、最低限の動作で避けた一光がライフルを放ち、魔力スフィア形成中に全て撃ち落とす。

「エリオとキャラは別令があるまでロビーで待機してて」

フェイトがエリオとキャラに指示を出し、飛び出したい気持ちを抑えるヴィータと並ぶ。

「アイツ、まるで攻撃する気配がねえ……何で模擬戦なんて」

「カズはもしかして、初めから戦う気なんて無いのかも……」

「……余計わかんねえ！模擬戦なんて仕掛ける意味あるのか？」

ヴィータが頭をぐしぐしと掻きながら言う。

「多分、気付いたんだよ。なのはの気持ちに」

フェイトは言うつと黙った。

（くそっ、直撃しかないか？）

あくまで迎撃しか行わなかった一光も攻める糸口を探していた。

当然、本気で落とすつもりが無い以上は戦意を削ぐだけのつもりでいた。

しかし、その考え事態が浅はかで逆に一光が追い込まれつつあった。

「アクセルッ！」

ライフルの連射速度を上回る速度でなのはフォトンスフィアを生成、アクセルシューターが絶え間なく放たれる。

わずかな隙でもあれば火力押しのランチャーで一氣にぶち込むのだがそんな隙はない。

むしろ、ランチャーの最大チャージでもなのはデイベインバスターの方が火力的には上だ。エールの機動力で攪乱を狙おうにもアクセルシューター、デイベインシューターと一度の手数が違いすぎる。

なのはは砲撃魔導師だと言っても歴戦のエース、ソードで斬り込んで仮になのはに肉迫できても対策は出来ているだろう。

「と、なるとっ！」

一光の中で一つの道が出来る、模擬戦を仕掛けてかつ一撃入れて

冷静にさせる手はコレしかない。

「セイグリット、俺のやろうとしてることは解るな？」

『分かりませんよ、大体マスターの戦い方良く分からないんですから』

セイグリットがストライクの管制をするのは初めてだが、戦い方はストライク事態に記録されているが一光のやろうとしているようなアバウト策は当然記録されてない。

魔力弾を回避しながらビル街を滑空する一光はエールからソードに換装して手頃なビルを探す。

ソードは瞬発力には凄まじいが持続しない、少しでも高台からではないとなのはへ届くことはないだろう。

「カズ君、強いな……でも負けない!!」

なのはは少し悔っていた、モビルガジェットのコピーで同型。一光は良く知っていると云っていたから当然弱点も知っている。それを既に明かしているため防御も手堅く、魔法は一切使えないにも関

わらず、アクセルシューターは勿論、ディバインバスターも防がれた。

「あそこだ……コレで終わりにしよう！」

屋上でスラスターを吹かす一光を見つけ、なのははディバインバスターの収束に入った。

「あつ、見つかった……だけど！」

一気に加速し、飛翔する。なのはは疲れているのかレイジングハートの先端がわずかに揺れている、勝負はここしかない。そう確信を持って、一光は初めて攻めに出た。

「セイグリット、パージブラスト！」

バクン！とエールストライカーだけがなのははに向かっていく。四つの高出力バーニアが一斉に炎を噴き、主を失った推進器が特攻していく。

パージブラスト、ストライクのフォームはストライカーパックと言うバックパックと連結した状態を言う。エール限定のこの荒技は

モビルデバイスの魔力で破損部分を修復すると言っシステムを逆手にとつて、飛ばしたバックパックが破壊される事前提であいてが破壊する、こつちが撃ち抜くも良し。

「そらっ！」

間髪入れずに一光はライフルを放つ。しかし、魔力弾はなのはではなくエールパックを撃ち抜いた。

爆発の後、煙で両者の視界を遮る。

（これじゃ見えない……でも、それはカズ君も同じ筈！）

なのはがさらに魔力スフィアを生成し、収束に平行して追撃の手を整える。

なのはが思うより速く、的確に収束砲・アグニをぶつ放す一光は冷静に追撃した。アグニの威力はアクセルシューターを収束させてしまえば簡単に相殺できるレベルで、牽制程度にはなると踏んでいた。煙を貫いた閃光の後を追うように破損したエールストライカーをリペアし、すぐに換装。

「回避もしない・・・当然か」

当てる気がないのだから僅かに動くだけで軌道から外れる。なのは
も落ち着きを取り戻してきたのか、対処が速くなりつつある。

「——ッ!？」

トラップタイプのバインドが仕掛けられていたのにも気づく余裕は
なく、気づいた頃には四肢を固定されていた。最大稼働まで引き上
げた力で引きちぎるとディバインバスターを避ける、今度はシール
ドごと左腕が閃光に飲まれ、後ろに引っ張られる。

「これで・・・撃墜だよ・・・!？」

なのはが完全に油断した時、喰らい様に放ったライフルの魔力弾が
なのはの右肩を捉えた。

見守っていたフェイトとヴィータは驚いた。本当に一撃入れてしま
った、エースオブエースの異名持つ友人に。

「これで五分だ・・・」

装甲は既にリペアされ、そこには息をついてリラックスした一光が
いた。

「でも、何でこんな事を!？」

幾分か冷静になってもなのははまだ納得が行かず、怒っていた。
被弾は一光が先だ、故に模擬戦の結果としてはなのはの勝利、しか
し、なのはは勝った気がしない。

一光も魔導師だ、それも経験を積み、急激に成長するタイプの。理論ではなく考えるよりも先に身体が動くと言う感じが、もしも一光が全快していて衝突していたら？能力制御の掛った今のなのには辛い相手だったのは間違いない。

「話す事からはじまないとぶつかりあう事になっちまう、歳が近ければ尚更……な。」

その口調はどこか悟った様な、悲しみを感じさせるものだった。

「俺は、なのはの何を知っていると聞かれたら今の肩書を答えるだろう。けどな、昔何があったかは聞かないし聞き出す気もない。」

「でも、それが勝手な事をした理由なの？」

「いいや、本心は身勝手に無責任な事を言ったせいでティアナが無茶したんじゃないか？そう思ったけど、俺なんかが思うよりずっと思いつめてたみたいで……やり過ぎたなのはに少しばかり反感を覚えたくらいか」

「……私は、間違えた内容を教えてないよ。」

「ああ、教導ではな。だけど教えるって言うのはデバイスにインストールするみたいに一方通行じゃないんだ。人同士なんだからすれ違って当然だし、メンタル面も気に掛けないといけない」

そこまで言われ、なのはは初めて、一光が何を伝えたいか分かった気がした。

「回り諄言い回しで悪かったな。ティアナが目え覚ましたらしつかり話して、全てはそれから教えて行けば良い。なのはの目指す最高の教導を」

鎧の下はどんな表情で語っているのか、なのはには想像がつかなかった。たった二つの歳の差でここまで考えられる様な事を体験しているという事だ。自分のような事件に巻き込まれた訳ではないにしろ、一光は一光なりに大変な人生を歩んでいた様で……。

「それじゃあカズ君、今日はちゃんとお話ししよう。」

「そついや、模擬戦は負けたから仕方ないか……。」

「もう、こんな無茶止めてね？」

「それはなのはもな、新人に怪我してほしくないなら教導官が見本を見せないと、な？」

「ふえ？」

「毎晩、何回も訓練メニュー見直してたろ？」

「……どうして知ってるの!？」

「そらあ部屋同じなら、目に着いちまうし……フェイトとヴィータから相談受けたし」

モニターに映る二人は苦笑して視線を反らした。反らす事なのと思うのだが、ヴィータは恥ずかしいのだろう。

「元気で笑顔、それがなのはには一番似合う。笑って居る時のなのは好きだぞ」

「『えっ！？』」

爆弾発言にモニター越しにフェイトまで固まる。それを聞いたのはこの二人だけではなかった。

『・・・・・・なのはは好きだぞ』

様子を見に来た緋色はその台詞と共に硬直したフェイトと真っ赤に顔を高揚させたヴィータを見て、そしてウイングゼロの望遠モニターで二人を捉えると・・・・あら不思議。

「は、あははははははは！！！」

かすれた笑いが漏れた。何故か？緋色には一光が告白したように見えたのだ。しかも、医務室にかつぎ込まれたティアナを見た後でスバルに「二人を止めてください！」と頼まれて渋々、ストライクの稼働データを回収がてら訓練シュミレーターを回ったのだ。

「うお！スケベが壊れた！？」

いきなりの聞こえた奇声にビクウ！と肩を震わせて驚いたフェイトとぶつかり、全く反応のない緋色に驚くヴィータ。

直撃を受けたのは緋色だった。この男は色々と六課を飽きさせない、一光に用があると言って女性寮に来たまでは良いのだが、最近の行動は少々問題。危うく抹殺されかねなかった、シャワールームを覗いた一件で緋色をヴィータは撃退。それ以降、緋色をスケベと呼ぶようになった。

「この自由^{フリーダム}奔放野郎がああああ！！！！！！」

「フェイト！取り合えずソイツ今は不味い！！」

いきなり走り出す緋色の瞬発力は異常である、それは学生時代から培ったトンズラ術の賜物である。ヴィータはそれに危機感を覚えた。何せ一光にそのつもりはないだろうが年頃の女子が大勢いるこの部隊でこの言動、そして一光はなのはとフェイトと同室で寝泊まり、ヴァイスが良くイヤミとか言っていたのを知っているし、何よりも一光は疲弊している。しかし、暴走野郎程度は即効撃退された。

その日の晩、出現したガジェットを破壊するため、出撃したのはフ

エイト・ヴィータ・一光・緋色の四人で、犯人側はモビルデバイスの存在を再認識した。その間、なのはは自身に起きた事件をフォワードに話し、昼間の行動の裏には「自分みたいな思いはしてほしくない」と言う思いがあったと伝えて、和解出来たそうだ。

とある休日 a

なのはとティアナの蟠り、と言うよりは行き違いから数日が経った。

「やあああつ！」

モビルガジェットが襲ってきた、と言う想定元新人たちのデバイスに掛けた出力制限解除の選定基準をからと駆り出されている一光と緋色はそのテストの相手になっていて、今エリオが一光に斬りかかった。

一光はソードフォームで対応している。学生時代のタッグ戦の様に前は一光が、後ろは緋色が担当してそんなに訓練もしていないのに息の合ったコンビネーションを見せる。

「フェイズシフトに物理攻撃は効果がない・・・説明したよな？エリオ！」

直に素手で受ける、ソードフォームの主武装は身丈程ある対艦刀・シュベルトゲベルと魔力刃ブーメランで、細かい動作には適さないサイズの長刀だから何故か魔力系攻撃をしてこないエリオに対して素手で応戦したのだが、それも作戦の内だ。

「スバルさん！」

「エリオ、ナイス！」

エリオは囿で、本命は後ろに隠れたスバル。わざと大ぶりに斬り掛ったエリオは、スバルを隠すための布石でしかない。そして、一撃

必殺ならぬ一撃必倒を心がけるスバルは憧れたなのは得意技をゼロ距離で放とうと言うのだ。

「デイベイーン！」

「……マジ？」

「マジです！」

律義に返すエリオは持ち前のスピードで既に離脱、スバルは慣性の法則に従って一光に突っ込んでいく、勿論、チャージした魔力スフィアを突き出して。

「セイグリット！シールドにプロテクション付与！！」

『間に合いませんよ！避けてください！』

セイグリットは相変わらずストライクの管制を担当し、ストライク姿で銃を使う事はない。あくまで保険としての装備だからライフルと比べれば威力は遥かに劣るし、一光の魔力変換資質・凍結を常時付与している為にショットガンアイスになりがちなのだ。今は新たに相手の動きを制限する着弾時に凍結させる”クリスタルマイン”を開発中。大まか、リイン曹長いわく「別に目標物が凍ればいいのです」らしい。

「はいっ！」

「チッ！」

「ヤッ！」

「しっこい！」

圧倒的火力で焼き払うなんて啖呵を言った緋色は見事にアミタも卒業試験、基礎は終えたからヴァリアントの総仕上げで参加した為、ティアナから緋色の足止め役で片手剣でバスターライフルを撃たせないように妨害を入れていた。アミタもティアナと同じクロスファイアを習得し、射撃にキレが出てきた。なのはいわく「並みの相手ならカズ君の背中を守れるよ」とのこと。本人は物すごく喜んでいった。

『良いわ、アミタ。下がって！』

ティアナが念話で指示、緋色は解放されて漸く狙いを定めるが時は遅い。ティアナのカートリッジ四発消費、クロスファイア・フルバーストがしっかり狙っていた。

「よし、これで……」

緋色が真っ青になって逃げに転じた。空では全弾避けきる事は出来ないし、障害物を利用しようとビル街に降りた時だ。

「錬鉄召喚！アルケミック・チェーン！！」

しっかりとキャロが待っていた。しかも捕縛魔法をしっかりと唱え

た後で緋色はピンクの鎖でグルグルに捕縛され、転がるしかない。

「なんのおおおおおー!!」

それでも転がって避けるから凄い。緋色はゼロシステムに頼りがちで、なのはに「それじゃ訓練にならない」と止められていた。その末路が路上を転がって避ける。ウイングスラスターが変な方向で固定されているからこうなったようだ。

ベシッ!と緋色は巨大な生物に踏まれた。召喚魔法で本来の姿を取り戻したフリードに踏まれたのだ。

「へ?」

『アラート、回避を推奨』

「フリード!ブラストレイッ!」

ウイングの警告むなしく、火炎弾の雨を受けた緋色だった。

「フォワードの皆、確実に強くなってるね」

そんな緋色の丸焼きシーンを生中継中のモニターは観戦組の各隊長陣、居るのはフェイトとヴィータ、なのはだ。三人とも何処となく嬉しそうで、表情が綻んでいる。

「ティアナの奴、あの一件以来動き良いしな」

緋色を撃墜とみたティアナは一光へ狙いを定めている。そんな映像を見ながらヴィータだけでなく、なのはも嬉しそうだ。

「うん、しっかり基礎も固まってそれぞれ個人技能に移れた。」

「これもアイツのお節介のおかげだな？なのは」

「……そう、そうだね！」

この時の間は何なのか？そんな疑問を持ったフェイトだったが、気にしない事にした。

「うん、これで緋色君撃墜！カズ君は……」

魔法が使えないからか灰になっていた、正確に言うとディバインバスターでアーマーが消し飛ばされている。

「凄い、二人とも落としちゃった！」

なのは対ストライク戦を見ているだけにモバイルデバイスも使い様だという事は立証されている。しかしそれはモバイルデバイスの特性を生かしてこそ話。フェイトは手加減してもらっているにも関わらず、驚いてしまった。

「さっきの模擬戦は皆の次のランクへのテストだったんだけど・・・」

模擬戦終了、なのは達が合流して暴露する。緋色は焦げた頭を気にしている様で、フリードは満足そう。

「文句なしの合格だよ！」

その一言でフォワードの表情は一気に明るくなる。

「まだまだ甘い所はあるがな」

「実際に相手をした二人からはどうかな？」

フェイトが意見を求める、緋色は暫く考えた後・・・。

「合格・・・だけど今度から髪が焼けるまで火い吹くなよ？チビ竜」

「キュツクル〜！」

何気なく翼がグツと親指を立てたように見えたのは気のせいだろう。

「カズはどうだった？」

「合格だよ、まったく・・・蟠りがなくなったら一気に強くなったな。良い事だが！スバル、もうちつと威力考えてくれ」

「ふえ？何ですか？」

「シールド事吹っ飛ばすのは受ける側が死ぬる」

「成程！」

そう言つとブランツと力無く垂れた右肩を思いつ切り持ち上げる。

ゴキッ！と音を立てて、一光は軽く右肩を回した。

「・・・は、外れてたんですか？」

まさかと言う感じでスバルが尋ねる。

「まさかシールド事持つてくとはなあ、このバカ魔力め！」

「す、すいません！大丈夫ですよ？一光さんタフだし」

「あのねえ・・・」

時々スバルは何処まで本気で言っているか分からなくなる。

「ご褒美つてわけじゃないけど、たまには息抜き！」

「と言う訳で今日はお休みです。」

ワツと声上がる、当然ながら一日でも休めれば前線は任務があれば激務になるから身体を休めるには打って付け、かという一光と緋色も先の模擬戦でスタボロである。

「まあ、俺はな。外見的ダメージがない。」

「外見的ダメージ？」

「ですか？」

順的にはキャロとエリオ。緋色は必要にフリードを睨む。

「キュー」

「うむ、普通ならチビ竜が愛らしいのだろうな。あのボンバーヘアでなければな！」

緋色は悲しい事にアーマーで覆われていたにも関わらず、爆裂アフロになっている。不思議などと考えていけない。

『ポップコーン式ですか・・・ゼロ？』

『理解不能』

デバイスたちはどうしてか会議中、セイグリットの質問をウイングゼロは即答した。

「大丈夫ですよ！うけますって！」

「そうだな！違う意味で浮くな！間違いなく！！！」

何故か緋色が弄られている。スバルはフォローのつもりだったのだろぅがフォローになってない。

「あははは」

乾いた笑いはティアナ、少しショボンなアミタは今日帰ることになっている。それで一光は送る事になっている。それには当然、転送ポートを利用するのだが。

「それじゃ行こうよ、カズ君」

「駄目だよ、なのは。」

一光が顔を引き攣らせ、既に恒例となった取り合いを眺める。

「なあ、齊藤。お前ってホント羨ましい奴だよな……」

緋色がポンツと肩に手尾を置く。この男は、いや、この男・緋色を始め、ヴァイスに至るまで一光の安眠と言う時間を知らないから言える。世間的に睡眠時間は、セイグリットとストライクの同調具合の調整で睡眠時間を削り、その後仮眠をとるのだが最近になつて一つ問題が発生している。

『質問一、セイグリット・マイスターは桃源郷に？』

『ゼロ、一度貴方も現状を見てみる事をお勧めします。』

『任務了解』

しかし、そんな任務を実行しよう物なら緋色は死ぬだろう。

場所を移し、食堂で異常なまでの威圧感が空間を支配していた。

「なのは、どうして拘るのかな？」

左にバルディッシュを持ち出してもおかしくない意地っ張りモードのフェイト。

「そう言うフェイトちゃんも何でカズ君と行きたがるの？アミタちゃんを送るだけだよ？」

某白い悪魔もビックリ状態なのはが右にいる。挟む形で一光は朝食を取っているのだが。

「なあ、二人とも少し落ち着かないか？」

「「少し黙ってて！」」

なのはとフェイトが一蹴する、もしや再現されるのかと身構える一光。

「く、空気が重い……！」

「こ、こんな疲れる朝食は初めてね・・・」

いつもなら朝からがつつくスバルだがそんなに食べていない、ティアナもグッタリしている。

「すごいです！一光さん、圧迫感を無視してます！」

食堂を訪れた人々のように疲弊して出て行くわけではなく、淡々とニュースを見ている。

「ねえ、何でこんな空気なの？」

「あ、シャーリーさん。実はですね・・・」

キャロに尋ねたのはシャーリー、説明中も進展がないままにらみ合いが続く。

「フェイトちゃん、私はカズ君から好きって言って貰ったよ？」

それは先日の爆弾発言である。初耳のフォワードもぎょつとして驚く。瞬間、男性局員達に気絶する者がいた。それも一人ではないところを見るとなのはファンだったのだろう。

「ほ、ホホホントなの！？兄さん！！」

「いや、うん・・・確かに言ったけど異性うんぬんでは無くアレは人生の先輩としてだね？」

激しく動揺したアミタの質問に答えながらどう逃げようか考える。

重苦しい雰囲気から殺気満ちた空間に変わりつつある。

その出来事ならフェイトも知っている、それでもダメージはデカいがフェイトには切れるカードがある。

「エリオ、キャロ……」

「はい……」

フェイトが振ったのはエリキャロコンビ、安全圏から危険域に引き込まれた。

マズい、それだけは確信できた。

フェイトは何気なくアプローチを仕掛けていたが、昨晚ついにやらかした。これは他言するには恥ずかしすぎるからとフェイトがやらかして口止めされたのだが。

「お父さん、欲しい？」

「それは……」

「欲しい……ですけど」

渋々答えるエリオとキャロ、即ちフェイトの彼氏フラグであり、デバイスを取り出す男性局員達をヴァイスと緋色が宥めて回る。

「それにこの前、カズと寝たよ？私」

なのは轟沈、と言わんばかりに机に突っ伏す。

男性局員の軍勢が、そこに緋色も加わる。

「任務了解！」

背に「殺せー！」「消し炭にしてしまえ！」「我らが女神の純潔を汚す輩に死を！」などの言葉を受けて嫉妬から抹殺ミツシヨンを受けた緋色がツインバスターライフルを手にした瞬間、緋色はバインドで動きを拘束された。

「おい、食堂ブツ壊す気か？」

「皆さんも殺気だったせんといてなあ、事の真相はしっかり公表するから」

悪戯笑顔の狸、はやてだ。緋色を止めたのはヴィータ、後ろにはシグナムとシャマルも見取れる。

「「しなくて良いから！」」

間の悪いことにフェイトと一光がハモるとはやての目が怪しい光を放った。

「何や、あからさまに何かありましたあ言っ反応！ますます気になるわあ、なあ？なのはちゃん」

あれ？轟沈したよねなんて確認は入らない、既になのはも有無言わさずの追求モード。

「そつだねえ……アレは抱き枕の筈だったよね？フェイトちゃん！？」

ずいつ！と迫るなのはにフェイトは「あの、だから」と言い訳を探す。

「で、どうなんや？ 実際。カズ君もそんな憔悴しとらんで」

「誰のせいだ？ 誰の・・・」

気のせいか、竄れて見える一光は語る。

「えっと、知りたいのか？」

一同が肯定、フェイト以外は興味津々だ。

「分かった。フェイトも失言だったと諦めて。」

そして語られた真相はこうだ。

フェイトがアプローチを掛ける、理性崩壊の危機に寝るからと切り上げた一光がソファで仮眠には入る。

「こんな経緯があつたの」

なのはも余裕の笑みが戻り始める。

『そこら辺からの映像、ありますが？』

セイグリットも最近では悪乗りを覚えたらしい、うん。

「消せえ！」

一光の叫び空しく、セイグリットは投影した。

「何故、こうなった・・・」

「何気なく兄さんって、二人の気になる相手だったりするの?」

知るわけ無いから答えられないのが現状だ。

一光は恋愛感情に疎い、世間的には鈍いとも言つ。

「ごめん、待った?」

「いや・・・って、フェイトさん!??」

軽く驚いた、私服姿を見るのは初めて。しかし、元の質が高い以上レベル高い美女になるのは当然だ。

化粧をしてアマタ曰くミッドチルダ流行ブランドのワンピースを着て、うん。釣り合わないほど美しい。

「どうかな?」

「とっても似合います！ね？兄さん。」

アミタが尋ねるがすぐに同意できない、何でか？ガラでもなく見とれていたからだ。

「セイグリット」

『はい？』

「役得って素晴らしいな」

『はあ、重症ですね。行きましよう、緊急事態は時と時間を選びませんから』

とある休日b

転送ポートは申請さえ出せば大抵は使えるらしい。現に一般人だろ
う学生の一団や訓練校一団が異世界に旅立つのと時間が被り、立ち
会う形になった。

「フェイトじゃないか。」

提督の制服を着た青年がフェイトを見つけるなり声を掛けてきた。
見た限り二十代だろうか口調は親密そうだ。

「あ、お兄ちゃん。」

「お兄ちゃんはよせ、お互いに良い歳だぞ」

「兄妹に歳は関係ないでしょ？」

視た感じ言い負かされている。てか、フェイトは今お兄ちゃんと言
ったと言う事はエイミィさんの旦那と言う事になる。すると青年が
話題を変えようと一光に目を付けた。

「初めましてになるな、齊藤一光くん。」

「えっと・・・」

青年の名前、記憶にはある気がする。確かはやてが見せてくれた後
見人の中にハラオウンのファミリーネームがあった。

『ほら、マスター。クロノ・ハラオウン提督ですよ。フェイトさん

の義兄で、エイミィさんの夫、時空航行部隊で戦艦・クラウドディアの艦長をしていらつしやる人物です」

「その通りだよ、優秀なデバイスだな。それにモビルデバイスも驚かされたよ」

クロノが肩をすくめて答えた。つまりははやてが売り込みの仲介人を選んだという事か。この人も苦労しているようだ。

「どうも、クロノ提督も貧乏くじばつかですか？」

「ほう、どうしてそう思う？一光君」

「一光で良いです。何と無くですよ」

「はは、お察しの通りだ。所で何でこんな所に居るんだ？」

「それはアミタちゃんを地球に送る為に転送ポートを利用しようと思っただけど・・・」

フェイトがモニターを見た、後二時間待ち。何でこんなに込んでいるのか不思議だ。

「そうか・・・ついでのなるがクラウドディアを利用すると良い」

クロノがいきなり提案する。しかし次いでは何だろう？任務のついでに送ってやるってことならそれはそれでおかしい。

「違うぞ、一光。今整備中で艦が動かせないから任務もない、転送ポートは使える筈だ。帰りはこちらになるがな」

「良いの？兄さん」

「ああ、構わない。」

「ありがとうございます！」

アミタが頭を下げた。

「それじゃ使わせてもらおう？」

「ん？ああ・・・」

歯切れの悪い返事を返す一光にクロノは苦笑しながら言った。

「妹は大切にしてくれ・・・」

妙な重みのある台詞を背に三人は転送ポートに向かう。

転送ポートを新たに設置すると新たに設置するには割と手間らしい。そんな手間を個人の頼みでやって貰うわけにも行かず、一光には因縁深い所に出た。

「……ここかよ」

そこは最初にガジェットに襲われた駅前だった。大破した乗用車は既に破棄され、当然そこには面影もない。

何匹苦虫を噛み潰したか分からない一光は呟いた。

「あれ？」

アミタが見つけたのはビルに残る亀裂、結界内の出来事は基本一般人には認知されないが、物理的破損は結界が解かれた場合、直に影響される。それがコレというわけだが。

「コイツは俺が撃たれたときの奴だな。」

「えっ！」

アミタが言葉を詰まらせた。彼女は兄がどことなく寂しげな表情を漂わせる事に未だ慣れない。

兄弟と言っても互いに育った時空・世界が違うからかアミタは一光が自分を見ていないのではないか？と思うときがある。

「何でアミタが泣きそうになってるんだ？」

「あ、ゴメン……そんなつもりはなかったんだけど」

「ん、謝られてもなあ。」

バツの悪そうな呟き、するとフェイトはくすりと笑った。

「アミタはカズが傷ついたかもって思ってるんだよ、何だかんだ言
ってカズの事見てたし好かれてるんだよ」

フェイトが微笑んでアミタは無理に笑う、少しばかり気まずい一
光だった。

長らく電車を乗り継ぐこと二時間、ようやく最寄り駅に着いた。

「ここからは分かるか？」

「うん、ありがとう。兄さん、フェイトさん」

アミタは深く頭を下げた後、改札を出てまた礼を言っ
て走っていく。その足取りは、軽快だった。踵を返す一光にフェイトは意外と
言っ
よう様に言った。

「家まで送らないの？」

当然と言えば当然の疑問だ、フェイトもそのつもりでお洒落をし
てきている。

何故か？フェイトも自分の気持ちに多少戸惑いはあったが如何せ

ん惚れたと自覚したのはごく最近の爆弾発言直後である。

なのはが遠回しなアプローチ、買い物に同行したりしていたのでまさかと疑ったら案の定、親友も好意を抱いていると気がついたのも六課から出発直後だ。十年来のつきあいであるのは朴念仁だったが、それを恋路に目覚めさせるだけの威力がユーノではなく一光と言うのが何だが皮肉である。

しかし、気付いてしまった以上ライバルより差を付けたいのは必定。で、件のアプローチに臨んだわけだ。

一光がもしもなのはを選んだら？それは最悪のケースだが身を引く気にいる。

「流石にこんな傷だらけだしなあ、心配させるのは避けたいし」

朴念仁は一光も同類、しかも鈍感。左腕は傷痕だらけ、何処の戦場帰りだ貴様！？みたいな状態だ。

何も知らない親が見れば心配するだろうがフェイトの気も知らない一光の判断。

「せつかくだから挨拶もしときたいし、ほら私は上司でも」

「ああ、気にしないで良いよ。それよか……!？」

気のせいかフェイトから黒いオーラが漂っている。

「行こうよ、ね？」

「……はい？」
「ね？」

一方でなのはつまらなそうに石を蹴った。

「せっかく……」

蹴った小石は何処かに消えた。なのは先日の一光の一言で悩んでいた事の答えを見つけた。

初めての悩みに相談する気にもなれず、悩んでいたが「なのは笑顔が好き」なんて事を言われ、ドキッとした反面悩みが解消された。

一光が気になるのは私が好きだからだと。

どうして一光を好きになったなんて分からない、なのは自身はつきりしていない。

しかし、フェイトと出かけていることが面白くなかった。

フラフラと訓練場を訪れたのはは、訓練に勤しむ緋色を見つけた。腕ほどの長さがあるバスターライフルを二丁、左右の標的に向かい交互に放つ姿は背の翼とミスマツチ、彼にも幾度か救われていることは事実だし、訓練プログラム通りでは緋色がパターンを覚えてしまっているため外さない。

「うーん、体を動かせば気分転換にもなるかな？」

この後暫くしてから緋色の悲鳴が木霊した。

「よもやカズの上司さんが貴女みたいな美人だったとは！」

フェイトに押し切られ、仕方なく実家を訪れた一光は身辺報告込みで話していた。

まあ上司と言ったらオッサンをイメージしていたらしくギャップに驚いたらしい。

実際に一光も最初は嘘だと思ったし、隆正の反応も当たり前と言えは当たり前だ。

「何でそんなテンション高いんだ？」

長くなるから行かない方が良く、それが本音であった。

オフシフトは通常一時間以内に帰れる所で取るのが原則だ。こうなると不謹慎だが緊急事態でも起きてくれないものかと思ってしまう。

「こんなバカだけどよろしくね、ハラオウンさん」

「い、いえ！カズには助けて貰ったこともありますし」

フェイトが謙遜して言う、しかしながら一光の記憶にはフェイトを助けた記憶は一切無い。てか母が息子をバカ呼ばわりって酷くない？酷いだろう。

『お二方！緊急事態です・・・って、フェイトさん？』

待ちに待った緊急事態、不謹慎極まるがそれどころではないのが今の状態、フェイトは少しボートとしてしまうほど暴走気味、コレではあぶなかつしい。

『顔、真っ赤ですけどどうしたんですか？』

通信はシャーリーから、大方六課の司令室からだ。

「何でもない！何でもないよな！？」

「えっ！？あ、うん。シャーリー、転送ポートと単独飛行承認をお願い！すみません、お邪魔しました！」

フェイトは律儀に挨拶すると玄関に急ぐ、一光はフェイトの後に続く。

庭、玄関先に開かれた転送ポート・魔法陣にバリアジャケットを纏いながら飛び込む。

フォワードが保護したレリックケースに繋がれた少女と真逆の方向に現れたガジェット航空戦力の殲滅に当たっているのは緋色なのは。

殲滅次第フォワードに合流する手筈だ。しかし、モビルガジェットも混在している為、上手くは進まない。

「数ばかりの雑魚が！」

緋色が毒づく、なのはは既にガジェット二型の殲滅を終えた。今は援軍の対処に当たっている、引き替え緋色は紺色のカラーリングに変更されたダガーに苦戦していた。

単機ならばバスターライフルで一撃だが、ガジェット二型に乗って襲ってくる。

最後の一機はまるで致命打のバスターライフルを撃たせないように立ち回っている。

「緋色君！」

気付くとなのはを無視したガジェットの波が押し寄せる、ダメー
ジは気にしていられない。

「『攻撃最大効果、確認。』」

ゼロシステムが起動し、緋色はレーザーを無視してツインバスター
ライフルをぶっ放した。

地下下水路に進入したガジェットを破壊していた濃い青色の髪の
少女の手にはリボルバーナックルが装着されてマッハキャリバーと

同型のローラーブーツを履いている。

「アレがモビルガジェット!」

少女が拳を握りしめる、敵モビルガジェットはモノアイを不気味に光らせたグフだ。格闘戦を得意とするタイプで少女とバトルスタイルは似ている。

彼女はモビルガジェットを相手にするのは初めてだ、それでも後れるわけには行かないと拳を強く握り、一気に肉迫する。

「ギッ!」

手首辺りから伸びた何かを弾くと彼女を不意に電流が襲った。

ビクッ!と仰け反る彼女の脇を白亜の機体が擦れ違う。

グフを蹴り飛ばした機体はモビルガジェットだ、しかし様子がおかしい。

「今度からスラスター・リミッターは解除しない方向で行こう」

『了解、しかしマスター。始末書の山ですね』

「んなわけあるか!」

まるでコントのようなやりとりだ。

でも機体^{デバイス}ダメージは深刻である、ストライクのスラスターは本体からエールまで焼き付いて使い物にならない。部品^{パーツ}交換は必須の状態

だ。まあ修復には魔力を使用すればいい話だが、左腕も大分回復したからそろそろ良いだろうとストライクを解除、セイグリット単体のバリアジャケットに戻す。

「あー久々だなつと、大丈夫かい？」

一光は尋ねると少女はハツとした。

「あつ、はい！」

「その手、リボルバーナックル！それにマツハキヤリバーと同型のブーツって事はキミは・・・誰？」

確かリインがプレゼント用とか言っていたのを思い出す、となると彼女は陸士部隊の隊員だろう。

名前を聞いた気がするが、うん。思い出せん。

「ギンガ、ギンガ・ナカジマです。助けていただきありがとうございます。」

「俺は齊藤一光、六課の民間協力者だ。あれ？ナカジマってスバルと同じ・・・」

「スバルは妹です。と言うことは貴方がアイアンマンですね」

「あ、アイアンマン？」

「スバルのメールにそう書いてありました。重傷にも関わらず動き回るとか」

「アイツの頭ん中で俺は鉄人かよ・・・」

軽く落ち込むが、敵はそんな暇をくれなかった。回復してきたグフがヒートロットを振るうが片手剣でヒートロットを切断し、間合いを詰めてブレイズキャノンを放つ。一連の流れを見たギンガは啞然とした。

「凄い！」

「格闘戦しか出来ない不良品風情が、さてフォワードは何処だ？」

愚痴りながら下水を進む。

アンダーラインバトル

フォワードと合流した一光とフェイトの合流で緋色はダメージを無視してフォワードの元に急いだ。

『損傷率23%、ミッションに影響無し』

白亜の羽を羽ばたかせる緋色にウイングゼロは報告する。

「問題ないか・・・ダガーの次はウィンダムとはつくづく空戦をお望みみたいだな！」

丁度、緋色がツインバスターライフルを放とうとした時、別の角度から砲撃が放たれて直撃した。それ自体は完全にチャージしなかったのだから、装甲を貫通せずに幾分か緋色自身にダメージが通ってしまったがそれだけだ。修復をするほどの損傷にもならず、ウィンダムを一太刀で斬り捨てる。

「別角度！？敵さんの増援・・・センサーに反応は！？」

起爆は確認したのにも関わらず、無数のウィンダムが緋色を囲む。さっきは一機だけだったがこれでは数十、数百は居ようと言う数だ。何時の間に現れたか分からない、緋色は若干焦りながらバスターライフルを構える。

「クソッ！！！！」

「それを大人しく渡してくれ、危ないから」

広い空間に抜けた一行はレリツクケースを抱えた少女に言う。しかし、表情の一つも変えない少女には見覚えがあった、一光は振り向き様に銃を構え、ショットガンアイスを放つ。少女を諭そうしていたスバルが驚き、キャロとエリオは背後で砕けた氷とそれを受けて鼻を鳴らす人物に驚いた。

「何時の間に！」

エリオがストラーダを向ける、その黄金の鎧を纏って髪をオールバツクにした青年は何の構えも取らずにただ腕を振った。

「遅いぞ、こんな奴らすら捉えられんとは・・・低能にも程がある。我^{オレ}が出なければ行けないのか？」

『あらあゝそれはネイキッドがずば抜けているからですよぉ？ 私達は私たちなりのペースがありますう』

通信しているらしい、眼中にないと言いたげな男にギンガが殴りかかる。

「ハアッ！」

ナックルダスターを撃ち込んだギンガは目を疑った。手ごたえはあ

つたのに青年は何もしていない、それこそ埃を払うような仕草でギンガの拳を払う。それだけでギンガは殴り飛ばされたような衝撃を受けた。

「ッ！！？」

「まったく酔狂な奴だ。この程度の奴らを欲しがるとは！」

ギンガとスバルにいきなり迫る青年にティアナやエリオ、キャロは反応すら出来なかった。しかし、一光だけは的確にショットガンアイスを撃ち込み、大剣に切り替えると肉迫する。勢い任せに破断撃を撃ち込むと流石にネイキッドと呼ばれた青年は笑みを浮かべ、空間に手を突っ込んで何かを抜く。

「たつく！」

追撃の破断撃もその剣に防がれる、それは武骨な剣で彩色等は一切されていない。しかし……。

「流石はバビロンの一撃を初見で捌いた男だ、私の動きについてくるか！」

「何嬉しそうにしてんだよ、動きが丸見えだつての！」

攻防は明らかに一光の防戦だった。先の言うとおり、圧倒的な速度差があっても動きが見えていれば対処のしようがあるし、反撃も可能だ。無論それは隙があればの話で、剣撃を避けてもネイキッドは開いている左手を振るうだけで無数の刃を飛ばし、反撃の隙を潰してくる。

「仕方ねえ！火焰煉瓦刃だ、常に最大威力を維持ッ」

『全く、怪我しないで下さいよ？』

「それ自体無理！」

飛ばしてくる剣や槍にも限界があるらしく一振りに五本、ならば活性化^{クシス}で速度を向上させ全てに対応すればいい。無論、捨て身だが。

『海上はウチが一掃する、なのはちゃんとフェイトちゃんはカズ君と緋色君のサポートに！』

はやては事態を重く見て自身が動いた。はやての持ち味は広域殲滅、六課からフォローを受けつつ、ガジェットの殲滅に乗り出した。

新型に押されつつある緋色は持ち前の大火力のバスターライフルを封じるタイプ、近接格闘型モビルガジェットに苦戦している。報告すら出来る状態ではないほどに、一方で一光が合流を果たして上手く事を運んでいたフォワードチームも金色の鎧をまとった青年の登場で圧されている。

一光は自身が金色青年・ネイキッドを相手して、フォワードはレリックの回収と現場の判断は正確だ。しかしネイキッドの狙いはスバ

ルとギンガで、レリックはおまけ程度の物。一光は初撃を取り、一度撃墜されているがそれでも必要最低限の回避はした、と言う事実がネイキッドの興味を引き、注意をひきつけている。

ネイキッドは未知の力で一光を相手にして、離脱を図ろうフォワードまで攻撃する余裕がある。

一光は対応出来ているが、それでも回避ばかりで攻める機会が少ないう上にスバルとギンガ、二人を護りながらの戦闘だ。ネイキッドが二人のうちどちらかを狙った時、引き寄せた所での一撃しかない。

緋色はなのはとフェイトを手間取らせた幻影と本体の混合隊に苦戦しつつも、本命の赤い装甲・エピオンを相手に奮闘している。格闘型のエピオンに対して緋色は不利だが、それでもサーベルで対応し、少しずつ削り取っている。

それでも緋色が不利なのは否めない事実、ガジェット戦で最後はダメージを無視した攻撃で撃墜し、それを先のウィンドラム戦でも繰り返した。

これは幻影を作り出した張本人である戦闘機人・クアットロもびっくり。普通は避けて確実に落とすのだが、一光も緋色も魔法の基本なんて知らない。全て我流で戦ってきた、緋色に至っては魔法が使えないからこそ、ウイングゼロを使いこなせなければ勝ち目はないし、かつてのゲームモーションに加え、訓練も余念がない。

フォワードはヴィータとリンが到着すれば離脱させることは可能だが、ネイキッドの力は現時点で未知数。それこそ隊長陣をぶつけるのが妥当だがギンガが全く反応出来ない速度となればフェイト、となるがフェイトも制限付きでは厳しいだろう。

「ぐ、らあああ!!」

緋色が気合いを迸らせ、サーベルを弾き返す。エピオンが振るう手からヒートロッドが伸び、バスターライフルを切裂いた。

「チツ!」

「撃たせんよ!」

まるで鏡写しの様な戦いに緋色は疑問を持っていた、仮に自分がエピオンを使うならこのような常に肉薄する戦闘スタイルになっている筈、しかも引き際の攻撃とまるでこちらの攻撃を見透かしたような行動だ。

「まさか……有人!?」

行きついた答えと有り得ないと思いたいゼロシステムの存在、エピオンはビームソードを一度振るうと肉薄してきた。

「取った!」

エピオンがソードを振るう、確実に当たるであろう距離まで光刃が近づき、エピオンが勝ったと確信を持った。当然、自分の獲物が敵を斬った所を見ればそう思うだろう。

「誰が!？」

縦一閃。

「何故だ!？データでは貴様に戦う力は残っていない筈!！」

エピオンは驚く、当然自分は最高の力を彼から授かったのだから負ける事は許されない。姉妹たちにも示しがつかない。

「古いんだよ、俺は齊藤見てえに頑丈じゃねえし・・・魔法も使えねえ」

ヒートロットを失ったエピオン、いや、その使用者はたじろいでいた。何故たじろいだ?と自問しても答えなんて出てこない。

「でもな!」

ゴウツ!と一瞬見失うほどの速度で緋色はソイツに肉薄、左から回し蹴りを喰らわす。

「グウツ!」

「アイツと同じくらい、大切な者に命を掛ける覚悟くらい持ち合わせている!！」

回し蹴りを防いでよろめいた所に緋色はサーベルを突き立てた。

「姉さま達に知らせなければ……」

そう言うエピオン、緋色が追おうとした時何故かウイングゼロは強制解除された。

『ダメージ限界突破、システム……ダウン……』

「くそ」

毒づいた、一光の様にはいかない。何せ魔法とメカだ、でも引けないと思うし、自分の問題でもあるからと緋色は呟くと落ちて行く。

「緋色君!!」

それを支えたのはフェイト、何とか間に合ったのだ。

「うおりやああ!」

ネイキッドを気合いと共にヴィータが殴り飛ばした。スバルとギンガを狙う数本の剣をストライクを起動させ、我が身を盾に防いだ一光をヴィータは睨む。

「死ぬ気かお前!？」

「その気はない、それとチャージは済んだ。」

ネイキッドは天井を支える支柱を二・三本へし折ってようやく体勢を立て直した。ヴィータは手加減などせずに全力で殴打、刃全てを身体で受け止めた一光に怒鳴る。

「退けえ!」

ランチャーフォームの最大攻撃はアグニフルバースト、最大出力で放つ一撃は現行の量産デバイスの魔力弾よりはるかに威力が高い。しかし六課ではそれも並みだが、手回しの速さ、出の速度を考え追撃にもってこいなのだ。

真っ直ぐネイキッドに吸い込まれる様に向かうアグニ、それを間一髪で避けたヴィータ。

「アブねえじゃねえか!」

「良いからフォワード連れて離脱してくれ!ここももう持たないぞつと!」

ストライクを解除し、ヴィータに一光が言う。言ったそばから無数の刃が一光を追うように突き刺さり、ネイキッドが棒のような刀身の剣を高速回転させ、魔力の竜巻を作り上げ、直に斬りかかった。

「流石だ!雑種、褒めて使わす!幼女とのチームプレーも中々だ!」

それを聞いたヴィータはアイゼンを強く握りなおした。

「誰が幼女だコラア！」

ヴィータが殴りかかろうとアイゼンを振り上げたとき、崩壊が始まった。

仕方なく脱出するヴィータとフォワード、ギリギリまで戦闘を継続する一光。

振るう大剣と回転し、触れるものを砕いてしまう剣は相反して弾けた。

火焰煉瓦刃で強化していたため、セイグリットに破損はない。しかし、ネイキッドの剣は見るからに異質だ。

刀身が回転、それも魔力を帯びてグラインダーの様に、いや、削岩機のように触れた柱を削りきった。

「チッ！」

舌打ちした、天井が崩れてネイキッドと一光の間に落ちる。両者を分かつ壁は簡単に破壊できるが今は脱出が先決だ。

先に脱出したフォワードとギンガ、ヴィータは召喚士らしき少女を逮捕しかけていた。

「公務執行妨害、その他諸々で逮捕だ。」

と告げるヴィータを後ろから小突く人影があつた、念のために言うがスバル達ではない。

「コラ、ちゃんと罪状を言え。」

「うつせえな！良いだろ別に」

「よかないだろ、普通に！」

言い合う二人を余所に、離れたビルの上屋上に砲身を抱えた少女とメガネを掛けて白いマントを羽織った少女がいた。

「ディエツちゃん、狙いは？」

間延びした口調の尋ね方は人によつてだがイラツと来る。

「問題ないよ、雲もないし遮蔽物もない。」

がしや、と少女・ディエツチが砲身を構える。

少女は顔色一つ変える気配がない、流石におかしいだろうと思い始めた矢先――。

「・・・逮捕は、良いけど」

急なことで一光も驚いた、緋色の姿がないとなると被弾しすぎてヘリにいるはずだと思う。取り合えずはと危惧の念を払う。

「大事なヘリは放って置いて良いの？」

刹那、シャリーとアルトの通信が開く。

『収束砲チャージ確認！』

『物理型、推定Sランク！』

聞き終わるより先に一光は地を蹴った。

ヴィータが取り乱した事を考えると過去を繰り返すわけには行かない。

「おい！どう言うことだ！？」

ヴィータが少女を揺すり、問いたです。

「ヴィータ副隊長落ち着いて！」

「うるせー！」

スバルを突っぱねてヴィータが少女・ルーテシアを睨む。

そこでヴィータは心配の種をもう一つ見つけた、横で警戒をしていたはずの一光がいない。

「おい、アイツ何処行った？」

一気に冷静になった。一光は仲間第一に動く、それは今まで知っている事だ、ともなればヘリを守りに行ったに違いないが。

「さっきまでそこにいましたよね？」

「大方、ヘリの所だと思います。」

ティアナが溜息を吐いた、つくづく一光は無茶を厭わないのが本当に無茶云々でなのはへ楯突いたことが嘘のように聞こえる。

六課の司令室ではヘリの被弾映像が見れた。黒煙から間に合った正直判断しかねる状態だ。

突如、赤い光が黒煙を切裂いた。それは掌から発せられた何か、なのは姿も見受けられるがその前に居る人物は突き出した右腕を赤

く染めていた。

『スターズ05、ヘリ防衛に成功・・・』

オペレーター陣、同時にグリフィスも身を盾にしたのかと思ったが、その右腕の赤いソレは魔力光だった。

『スターズ01、犯人確保に移ります！それと・・・』

通信に割りこんだのはとヘリから現れた緋色が一光を捕獲、そしてヘリに連行。

『お、おい！』

『スターズ05及びライトニング05は負傷に伴い戦線を離脱』

『了解や』

結果、犯人は確保出来なかった物のレリックは無事。怪我人はモビルガジェットと戦闘した緋色と素手で砲撃を防いだ一光だけで、一光はなのはに説教を受けた。当然と言えば当然の落ちだ。

病院での出来事

翌日、普通ならオフィスでキーを打つ一光だが、緋色共に医務室に居た。

「何で素手で受けたの!？」

朝からなのはとフェイトはとつかえひつかえこの調子である。さしも映像では魔力光に見えたがしつかり出血していたのだ。それも掌から手の甲に掛けてバツサリと切り傷があり、一光は笑いながらこう言った。

「うん、血イ止まらん……」

これが朝の出来事、訓練があるからと早朝になのはが洗面台に向かった時、部屋にサスペンスよろしく血がぶちまけられていた。昨日の出来事が原因だと言うのは明白で、新魔法『我龍双煉掌』を片手であの砲撃を相殺出来るレベルまで引きげた結果、夜中、寝る間際にブシイ!と切れて大量出血。いきなりの出来事に騒然とした一光はしばし何が起きたか分らず首をかしげていた分けで。

「仕方ないつしょ! あん時はシールドも間に合わなかったしプロテクションでも俺じゃ防げねエし!」

「私、居たよね?」

なのはがお話モード、人によっては魔王モードないしは瞑王モードに変化すると一光は平謝りするしかない。因みに朝の現状を見たフェイトは悲鳴を上げた。

「なのは、カズには危険の度合いを教えた方が良いかな？」

「だね、フエイトちゃん」

「ちょ？あの御二人さん？真っ黒な笑みで団結しないで！」

『自業自得ですよ、マスターは身体をいたわった方が良いでしょう』

セイグリットすらこの調子だ。かと言う緋色は盛大に上半身に包帯を巻き、今はシャマルに変えてもらっている。

「おいおい、齊藤。この落差は何だ？見せつけてんのか？？」

「あら、緋色君にはシャーリーがいるじゃない？」

「「いやそう言う関係じゃありません！！」」

シャマルの一言にこっちもナイスコンビネーション。シャーリーと緋色がハモると皆吹きだした。

「お前は頑丈居然に痛覚を持たないのか？」

「シグナム、一樣痛覚は持っているよ？俺だって人間だもん」

先日の事件で保護した女の子を引き取りに行く、これでは語弊があるので見に行くと言うのは一光に同行を求めた、それに応じ、利き腕・掌が某ネコ型ロボットぽくなった一光は承諾。それに同行するシグナムから言われて一言は酷い気がする。

「そうは思えん」

「おいおい・・・」

「そつだよ、フェイトちゃんなんて悲鳴上げた拳句に腰抜かしちゃったんだもん」

「なのははどうだったのよ？俺もまさかあの量が出るとは思わなくてさ、いやぁ掃除が一手間だった」

「私も驚いたよ、まさか血とは思わなかったしケチャップでも零したのかと・・・」

「お前は天然か？」

初めてシグナムと意見があった気がする、魔法は毎度凄いが今回はかりは痕が残った。何でか？そんなもん知らん。

聖王病院に着くと事態は急転していた。何でも保護した少女は人造魔導師素体、言う所のクローンだと言う事実とその検査も兼ねていたが検査の合間に逃げてしまったらしいとシスターシャッハから聞いた。

「それでは齊藤さんはあちらを！」

途中まで一緒だったシャッハがそう言うなり左に走っていく、こっちって確か中庭だ。

『変ですよ、マスター』

「んあ？」

『たかが五歳やそこの女の子にこんな対応ですよ？まるで危険物でも取り扱みたいじゃないですか』

「そうだなあ」

『何とも思わないんですか！？』

「ザ・貧血で今はまともに頭が回らないん」

『あ、そうですか』

セイグリットは呆れたようだが、実際はちゃんと一光も考えている。確かにこの対応はおかしい。そんな事を思っただけだと考えていると茂みが揺れ、金髪の少女が出てきた。なのはやシャッハから聞いた特徴と照らし合わせて多分、間違いないと思う。

「……なんてあっさり……」

流石に冗談抜きで貧血らしくフラフラしてきた一光は少し屈んだ。余り長時間動ける余裕はなさそうだ、戦闘なんて持ったの他だろう。少女が警戒しないよう出来るだけ優しく微笑む、それでも少女は警戒したのか後ずさる。それでも逃げ出しはせず、じっと一光を見ていた。

一光が目の前まで来た時、背後から迫る何かを感じ、セイグリットを起動。フェンサー片手剣を振り向き様に構えると衝撃が走った。

「……何のつもりですか？シスター」

驚いた少女はこてん、と尻もちをついて震えている。反面、一光の目は鋭く戦闘態勢に入っていた。

「何をするんですか!？」

邪魔され、苛立ったのかシャッハの口調は荒い。しかし、一光もまた苛立ちを覚えた。

「それはこっちの台詞……子供対する態度かそれは？てか、何で武装する必要がある？」

ヴィンデルシャフトを構えたシャッハに対し、一光はセイグリットを解除して咎める。しかし、正義感の強いシャッハはこの程度では下らない。

「人造魔導師だからです!どんな危険があるか分からないんですよ

「!?」

「おいおい……アンタアホだろ？」

「何を言い出すかと思えば！貴方は次元漂流者だからそんな事が言えるんです!!」

「なら、この世界の人間すべてがアンタの様なのか？生まれ方が不幸だっただけで危険視されるのか？なら俺はそんな世界願い下げだ。ぶっ壊す側に加担しても良いと思うぞ」

さらりと言つてのける一光にシャツハは身構える、と言つより手に力を込める。

「どうしてもどかないなら力づくでどいてもらいます!」

身構えたシャツハに一光は非武装で少女の前立った。一触即発の空気が漂う中、二人の間にシグナムとなのはが割って入った。

「シスターシャツハ、これはやり過ぎかと」

「カズ君も落ち着きなよ」

どうやら思っていた以上に顔に感情が出ていたらしく、なのはが諭してきた。

少しおびえた少女になのはが近づいていく。因みにシャツハはシグナムが何処かに連れて行った。

「ごめんね、恐かったね」

落としてしまったウサギのぬいぐるみを差し出しながらなのはが言う。

「私、高町なのはって言います。お名前、言えるかな？」

「・・・ヴィヴィオ・・・」

「ヴィヴィオか、良いね。可愛い名前だ」

優しく微笑みかけるなのはに少しずつだが、ヴィヴィオの警戒心は薄れているようだ。一光は本当にフラフラしだして目を押さえていた。そんな一光を気にするヴィヴィオに気付いて頭を掻きながら答える事にした。

「さっきは悪い思いをさせてごめんね、俺は齊藤一光って言っただ。」

屈んで視線を合わせてヴィヴィオの頭をなでる、不思議と警戒される事はなく何だか不思議な気分だ。

「うー・・・」

ズボンにしがみつくヴィヴィオ、どうした物かと助けを求めてなのはに視線を投げるとにっこりとなのはは微笑んでいた。何で微笑んでいるのかは定かではないが、大体は想像がつく。しかし、今はヴィヴィオをどうにかしないといけない。一光は冗談抜きで貧血だ、いつ倒れても不思議ではない。

「抱っこ、してあげたら？ヴィヴィオもそうして欲しいんだと思う」

「マジか？ヴィヴィオからすれば目の前で恐い思いをさせた張本人だぜ？」

「なら、抱っこして安心させてあげたら？」

それは正解で、ヴィヴィオは嫌がる素振りを見せずに、強く服を掴んだ。それから六課に戻るまで降りることを嫌がった。何でさ・・・

予言

機動六課に戻るまでヴィヴィオは一光にベツタリだった。そのせいか聖王教会が機動六課、どちらにヴィヴィオを置くか等談義する必要もなく決定。

しかし、本当の苦労は戻ってからだった。

「行っちゃいやだあああつ!!」

六課に着き、フォワードと触れ合っていたヴィヴィオ。

それを微笑ましく思い、眺めていた一光と「あの子を引き取ったのか?」なんて馬鹿げたことを聞いてきた緋色はなのはに呼ばれ、ロビーを離れようとしたら感良くヴィヴィオはなのはと一光の裾を掴んだ。

「どこか行くの?」

上目遣い、と言っても身長的問題からこうなるのは仕方ないが何故

になのはのスカートの端まで掴んでいるのか。

そして、出来るだけ優しくなのはが「すぐ戻ってくるから、ね？」と視線で一光へバトンタッチ、それに習って取り合えずこう言ってみた。

「すぐ戻ってくるから、良い子にしててくれるか？」

すると見事に冒頭の通りヴィヴィオの目から涙が鉄砲水のごとく吹きだした。

「うおおっ!？」

驚く一光と戸惑うなのは、これにはフォワードもお手上げ状態。しかし、余裕の二機がいた。

『あゝやっちゃいましたね、マスター。レイジングハート・マイスターもしっかりしてください、マスターをすっ飛ばしたあの剣幕は何処へやら』

「セイグリット、カズ君をすっ飛ばすのとヴィヴィオをあやすのって関係あるのかな?!」

あたふたと対応を試みる一光を余所に戸惑いながらも抗議するなのは、それを見て苦笑するフォワード一同。なんなの?この光景は。一光は子供をあやしたことなどない、当然と言えば当然だが、かといふなのはもヴィヴィオほどの年齢の子供の相手はよくわからない。

『セイグリット・マイスター、任務失敗』

「ウイングゼロ！お前、これは任務ですか！？任務なのですか！！」

「そらあ、齊藤になついたんだ。しっかり面倒見てあげないさいよ」

「緋色、てめえ覚えてろよ？人事だと思っでいい気になりやがつて」

必死に抗議するも当人たちは知らんぷり、しかもヴィヴィオが泣きやむ気配はなくなのはにべったりとしがみ付いている。最も一光が退室しよう物なら余計に泣きわめくだろう、しっかりヴィヴィオは一光も見ているのだから。

扉越し、ガラスの自動ドアが開く前からはやては微笑ましい光景を目にしていた。少し前を歩くフェイトからしては面白くないかもしれないがまるで駄々を捏ねる幼子に困る夫婦の様に見えた。

「何や、難儀な事になつとる見たいやね？フェイトちゃん」

はやてが振るとフェイトはそうだねと返した。修羅場やな、それがはやての心中で呟いた一言である。

「・・・・・・・・・・ッ」

自動ドアの開閉は即ち、一光にとって軽い死刑宣告だった。有無言わせない圧迫感なのはを一時でも凌ぐフェイトとニコニコ笑顔の

はやて、一気に青ざめる一光に緋色は手を合わせた。

「何や、エースオブエースと鉄の男ターミネーターが揃っても勝てへん相手はおるんやね？」

学生時代のあだ名に目をひんむいた一光は緋色を睨んだ、はやてへの情報源は間違いなくこいつだ。あれは周りが呼んでいただけでぶっっちゃけ自分から名乗ってはいない。

「二人とも、大丈夫？」

「ふえ、フェイトちゃん！」

何やら、何やら救世主が降臨なさった。なのはの反応とエリオとキヤロの保護者という肩書は伊達ではなかったらしく、念話でなのはから状況を聞きながら手元にあつたぬいぐるみでヴィヴィオの注意を惹きつけてあやす。その間に一光となのはははやてと共に離脱、そしてすぐにフェイトも追いた。その際に緋色がガタブルと震えていたのは何故だろうか？

「直に会うのは初めてだな。クロノ・ハラオウンだ」

聖王教会について、ちょっとした会議室・・・と言うより茶会のテ

ーブルに通された一同。そこには黒髪青年、服装からして提督とシャッハと似た服装の人がいた、教会関係だろうその人と名乗り出た青年に緋色と一光は一礼する。

「どうも、齊藤で……ハラオウン？って言うത്フェイトの御兄さんですか？」

「ああ、報告通りだな、キミは。謙遜したような態度だが現場では変わるそうだしな」

「いや、アレは前の職場からの癖と言いますか……はい。」

「それにモバイルデバイスを組み上げたのはキミとキミか？」

「藤原緋色ツス、アレは九割がたコピーですし量産を視野に入れますから」

「そうか、あのデータは本局で部門会議に掛けられた。」

「それって不味いんつか!？」

「いや、技術部が採用をどうかと議論した。採用されれば二人とも気持ち次第では局員入りは出来る」

クロノの言葉に緋色と一光は軽く拳をぶつけた。ストライクとウィングゼロだけではなく、緋色の言っていた事が現実なるかもしれない。

「初めまして、私はカリム・グラシアと言います。聖王騎士団騎士長をしている物です」

皆が席に着き、カリムの自己紹介の後すぐに本題が話された破滅の預言。

「つまり、俺と緋色が呼ばれたのはその本題に関わるかもしれないからか」

六課の設立意義と二人を六課に組み込む裏技など、暴露もほどほどに一光は尋ねた。するとクロノとカリム、はやてが頷く。

「正直、カズ君の成長速度は異常やった。間をおかずに緋色くんと遭遇したのも偶然やないとウチは思った。」

「そこで、相談の受けた翌日に現れた詩にもしやと思いました」

一枚の羊皮紙がモニターに拡大され、難解古代ベルカ語が訳されていく。そして一つの詩が出来あがった。

「運命を背負いし三つ閃光、果てなき放浪、白き預言、黄金の剣、すべて揃いし時、混沌は砕かれん」

カリムが読み上げる、一光と緋色には聞き覚えのある単語があった。

次第と表情は険しくなり、腕を組んで考える。

仮にだ、一光と緋色が「運命を背負いし三つの閃光」の内二つだったとして、最後は誰か？しかも揃いし時と来ているから二人では難しいのではないか？グルグルと頭を疑問がうず待ていく。

少し前なら、誰かが何とかしてくれる。そんな他力本願だった、サライーマンには荷が重過ぎるだろ？第一、コレ当たるんか？当たったらめっちゃ当事者？いや、当たらんでも当事者か・・・犯人追っているわけだし。

「大丈夫、俺と齊藤が最良の未来を引き当てます。」

「ふ、藤原！？」

悩んでいた一光の横で緋色があっけからんと言いつつ。それはクロノ達も驚いているし、一光に至っては勢いよく立ちあがってしまった。

「はは、本当にどうにかしてしまいそうや・・・ウチ等には希望のピースが二つある。ちゅう事は何とかなるかもしれへん！」

緊張が続いたせいか、はやては脱力してそう開き直った。そう開き直れない一光は少しばかり俯いた。

「カズ君だけじゃないよ、皆で解決していくんだ。」

なのはが言った。後にどれだけこの一言に救われたか分らないと思う。

「そうだ。二人で出来ないなら私達も協力する。だから抱えこまないで？」

「そう・・・だな、樂觀視はしない。けど、悪くは考えない事にしよう、俺と藤原そして誰かが揃わなくても、なのは達がいるしな」

そう言つて、一光は顔を上げた。

明るい知らせと困惑、一光と緋色に一つの選択肢を生んだ会合は幕を閉じた。しかし、苦勞は絶えない。

冒頭に述べたとおり、苦勞は六課にいるのだからな。

平穏な日常 その1（前書き）

作者「何だかんだでフェイトさん、御免なさい」

フェイト「はい？どうしたの、作者さん」

作者「今話までぶっちゃけ、なのはさんか貴方様とヒロイン候補に挙げてただけど迷っててね」

なの・フェイ「うんうん」

作者「今話からなのはさんメインヒロインで行くことにしました。」

なのは「ええ？だってフェイトちゃんに滅茶苦茶優位な内容で話が進んでなかった!？」

作者「そうなのよ、だからフェイト、マジすまん。サブでがんばれ。それなりに見せ場は」

フェイト「……………（ジャキッ）」

なのは「ふえ、フェイトちゃん？」

緋色「ああ、作者。キレたフェイトさんは恐いぞ、責任とれよ？」

作者「そうだね、前置きなのに武器構えているよこの金髪美女、これがアレか？ヤンデレ？」

一光「違うだろ、間違いない」

はやて「大丈夫や！フェイトちゃん、ウチなんか最初^{はな}から眼中にない感じやし本編も出番少ないで！！」

一・緋「いばれないから！それはいばれないぞ！？」

フェイト「ごめんね、皆。私、作者さんとお話ししなくちゃ……」

作者「すまん、急用が……」

フェイト「トライデントスマッシャー！」

作者「アーツ！！！」

ヴィヴィオ「始まります！」

平穏な日常 その1

聖王病院からヴィヴィオを引き取ってから数日、知らない内になのはとフェイトはヴィヴィオの保護責任者と後見人、簡単に言うともマになっていた。

そんな事をシャリーから聞いた二人、一光と緋色は互いの愛機の改良に勤しんでいた。

何でか？訓練に間に合わせるためだ。

「それにしてもフェイトもなのはも思いつきりが良いというか」

「そうだなあ、フェイトさんに至っては既に二人の子持ち・・・」

「俺らには考えられん苦労だ、独り身で良かった。所でこんなふうによ？」

「I・W・S・P・か、良いんじゃない？燃費考えると多用できそうにないが」

一光はストライクの^{フルドライブ}の全力稼働の設定、総合ストライカーパック・I・W・S・P・の開発と設定だ。前もってチマチマ造り始めていたからパーツを組み上げるだけで時間は掛からず、どちらかと言えば、緋色のニュー・バスターライフル開発に前夜から付き合っている。後数時間で訓練だが見事に設定まで終えた、I・W・S・P・を使用すると長期戦は不味い、ここぞと言う時しか使えないな。

「バスターソード（以下BS）ライフルって手回し悪そうだな」

「良いんだよ、近付かれたらサーベルしかねえ、一刀両断出来ればな。」

「そうかい・・・俺は先に上がるぞ」

するとシャーリーがニヤケた、何故だ？

「一光さんも大変ですねえ、部屋に戻られるんですか？」

何となく、シャーリーが何を考えているか分かった。

「安心しろ、シャーリー。もう二人の巣窟には土足で入らん」

ポッ！と緋色とシャーリーが赤面、文句を受ける前に離脱した。

「おはよう、カズくん。」

なのはがモニターをいじりながら言った。少し固まった一光は頭を掻きつつ、溜息を吐いた。

「どうやら、とことんかなわならしい。」

「おはよう、なのは。早いな？」

「ふふ、凄いでしょ？寝坊したことあんまり無いんだ。カズくんもあんまり徹夜しない方が良いよ？」

なのはが悪戯っぽく微笑んだ。少しばかり凶星を突かれて痛い。

「あ、ああ・・・気付いてたの？」

「だって昨日は部屋に戻ってなかったでしょ？ヴィヴィオが心配してたよ。」

「そっか、謝らないとな。てか、なのはもあんまり無茶すんな？」

「そうします」

今日の訓練はニューフェイスがいた、と言っても大抵顔見知りらしく反応は普通。

「陸士108隊から出向しました、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしく願います！」

と挨拶する紫髪ロングヘアの少女、確かスバルの姉で歳・階級共

に二つ上。先の出勤で一光をモバイルガジェットと勘違いしていた、仕方ないと言えば事前に知らせなかったこちらの不備もあるかも知れないけど。

「……齊藤、何でも女性ばかりなんだ？」

緋色が痺れを切らした。何でか？ギンガに続いて自己紹介しているマリエル・マテンザさんと女性続きで、一光と緋色からすれば肩身が狭いとそんな理由だが、実際は本能に忠実な緋色がいろいろやかしているため、一光はそれ程肩身が狭いと感じていない。

「俺に聞くな。」

「良いよな、こういう感覚の麻痺った人は」

「煩い、こっちも結構遠慮があるんだぜ？」

「そうなの？」

「そうそう、体重計の前で青ざめてるのは見た時に声かけないとか……ハッ!？」

「ふーん、見たんだね？」

因みに緋色↓一光↓なのは↓一光↓なのはであり、なのはの顔は真っ赤だ。

レイジングハートが圧力警告を出すのではないかと思う程強く握り締め、一光に迫る。

そんな光景にスバル達は笑顔、ギンガー人戸惑った感じた。

「ねえ？スバル、いつもあんな感じなの？」

「あ、うん。対外は緋色さんと話しててボロだして」

「なのはさんがあやって問いたただす感じです。まあ、ああしているなのはさんはどこか生き生きしているというか・・・」

「なんか普通の女の子みたいで少し親近感覚えてたり」

「同感・・・」

「でも、明らかにセクハラよね？」

「それはまあ・・・」

と言葉を濁したティアナ。しかし、純粹とは恐ろしいことにさらっとエリオが答えた。

「同じ部屋だと目に付いてしまっうんじゃないでしょうか？」

「おっ 同じ部屋！？」

「はい、それで色々あるそうです」

仰天するギンガにエリオとキャロが答え、ギンガまで赤くなった。

補足すると一光が女子寮シャワー・脱衣室に入ったわけではなく、なのはとフェイト、はやてにも言えるらしいがチマチマ体重チェッ

クを三人でしているみたいだ。何でかと聞かずともやはり十代乙女はプロポーションにも気を使らしい。少々カロリー超過気味、いや大いに超過するスバル、エリオらと食事を共にするとつい食べ過ぎてしまつらしく、先日何故かなのはだけ体重計の表示に青ざめていた。しかもソレを平気でソファア前でやるもんだから一光は退散、頃合いを見計らつて帰ってくるのだが・・・うん。

遭遇してしまつたのだ、三人が表示の前で硬直している所に。

ああ、俺つて頑丈・・・。

そう呟いたが誰にも聞こえない。何でか？そりゃ心内にだからさ。

なんて一光は漸くいて帰つてきた、危なく三途の川渡る所だったし。なのはめ、本当に加減を知らんのか？

そう、あの後すぐになのはがデイベインバスターを放った。失言もそうだがなのはも最近に加減を忘れがちになっている、それだけ親しくなったのか？という疑問は残るが実際に吹っ飛んだ先が瓦礫の山だったからか本当に危なく死ぬところだった。

とっさの受け身はやはり無茶と模擬戦からのたまものだろう。

「あうゝやつぱ、ギン姉には勝てないよお」

「ふふ、まだまだ負けないわよ？」

模擬戦をしていたらしく、ギンガとスバルは実に良い笑顔だ。結果的にはギンガが勝ったが、一步違えばスバルが勝利し知多かもしれない。それ程実力差は埋まってきたという事だろう。

「てえゝ・・・緋色、生きてるか？」

「おう、お互いに吹っ飛び慣れたか・・・」

「本当なら慣れたくはなかったがな」

緋色は大の字になってめり込んでいた。どうやらヴィータが追撃したらしい、それを思うと緋色も負けず劣らず頑丈だ。

「はい！全員集合！！」

なのはの号令で集まるフォワード一同プラスアルファ、そこにはそれぞれの愛機を握って生き生きしている隊長陣がいた。うーん、これは模擬戦だろうか？

「一つ疑問なんだけど、なんで皆さまハジキなんぞお持ちで？」

「何だよ、ハジキって？」

ヴィータが緋色の一言にツツコミ、因みにハジキとは極道やそつち関係の人間が使う俗称だ。拳銃がそれに該当し、なのはらの場合はデバイスだろう。

「まさか、とは思うが模擬戦？」

「そうだよ、カズ君と緋色君とギンガを含めたフォワード七人対隊長陣で！」

「いや、なのはさん？俺死ねると思うんだよね？？」

「安心していいよ、モビルデバイスならフルドライブまで大丈夫だから」

「フェイトが補足説明、でもモビルデバイスは魔法が使えない、それだけでも大いに不利だ。」

「だから、魔法使えないんだけど！？」

「心配すんな、なのはに迫るだけの实力があるじゃねえか」

「そうだ、ウイングゼロには未来予知ができるしな」

必死の抵抗もヴィータとシグナムがバツサリ。緋色と一光は諦めてしまい、ギンガは啞然と目を見開いている。驚いてんだよね、うん。

「ギン姉、これ時々やるの」

「最初は幻術や地形を利用して、それから緋色さんを盾にして何とか生き延びて」

「隊長達は本気で潰しにかかってきますので」

「一撃入れば撃墜になります」

「キュツクル〜！」

あらま、何気に酷いなフォワード一同、てかティアナ。確かに緋色はフォワードにも良い所見せようと無茶して結果、盾になった事は何度かあるが、今は別だ。滅茶苦茶頼りにしているぞ、主に盾的な意味で。

「クウオラア！盾にするなよ！死ぬから！マジで死ぬから！！」

不憫な奴だ、スバルは親指を立てた。いや、緋色的にはグッドではなくバッドだろうし一光も他を見る余裕などなくなるから最初っからI・W・S・P・で行くしない。

このやり取りは毎回だ、もはや慣れっこ。実際は逃げ回るフォワードの為に後衛を担当し、一光と緋色は速攻で散る。やはり、エース達は伊達ではない。

『警告、上空より敵勢力』

二人、緋色はBSライフルを構える、片刃で刀と言う峰の部分にバスターライフルとして機能する銃口を備えた新装備を迫るシグナムとフェイトに向ける。

「ゼロ、未来を見せる！」

叫び、緋色が戦闘モードのスイッチを入れた。シグナムの斬り込みをまるでここに来ると知っていたかのように避けると回し蹴りを繰り出す。

「ふっ！相変わらず大した奴だ」

シグナムは鞘で防ぐと緋色は鞘を踏み台に、フェイトへ斬り込んだ。BSライフルを振り上げ、フェイトを力で圧倒する。が、勿論積極的に接近戦に取り入れたのは今回が始めてで、一太刀目でバルディッシュと唾競り合う。

「新装備だね？」

「そうなんですよ、てな訳で押し切ります！！」

一気にスラスタを吹かす緋色は切り返すシグナムを無視している、何故ならフェイトは力負けして吹っ飛んでいるからだ。ここにバスターライフル撃ち込めば少しは勝機が見える訳なんだけども。

「ギガント！シュラークツ！！」

「ええええ！？」

フェイトは持ち前のスピードで回避、射撃体勢に入ってた緋色をヴイータが叩き落とした。模擬戦でのリペアは禁止となっている為、肩のアーマーが無残に拉げた緋色が何とか持ち直す。

「何だよ！？三対一か……」

「オメーからけさねえと厄介だしな！」

「同感だ。齊藤と同格の力は侮れんしな」

シグナムとヴィータが獲物を構え、そう告げた。

「あー、緋色落ちたかなあ」

一光がコンバインシールドに装備された魔力ブーメランをキャッチし、115フォトンキャノンを放ってディバインバスターをチャージするのはに牽制する。

「凄いね、それがフルドライブ？」

あっさり避け、なのはが尋ねた。

「ああ、以前は一回一回フォームを変える必要があったけどな、I・W・S・Pなら全てのフォームとして機能する。」

その為の対艦刀、その為のフォトンキャノン、魔力ガトリングコンバインシールド。

しかし、コンバインシールド・ガトリングはなのはが撃ち続けるディバインシューターがしっかり相殺している。

「あの、新装備ですのに効いてないよね？」

「ん？そつでもないよ、されより後で話があるんだ」

「おう、分かったよ……やっぱセイグリットに切り替えて良い？」

「ダメ」

「ですよー？」

シューターからバスターに切り替わった閃光に飲まれた。

「くっそおおー！」

軽い悲鳴と共に空に逃げた一光だった。

物の10分しない内に決着は付いた。

「あゝー！悔しいー」

「あそこでもつと上手く行けば！」

と本気で悔しがるスバルとティアナ、息を整えるのに必死のエリオとキヤロ。

「中々、動きも良くなった。惜しいところだったな」

「うん、もう少しだった。」

シグナムとフェイトが誉めるが、喜ぶ余裕のないフォワード。

「おい、いつまで死んでんだ？起きろ」

こう言う時のヴィータは鬼だ、PS装甲があるストライクは別としてウイングゼロなんかあっちこちボコボコに凹んでるし、緋色はピクリともしない。

「鬼……」

と呟いた緋色、とりあえず生きてはいるようだ。

「取り合えず、煮詰めるべき所はわかったな……てか、マジで加減しろよ」

「そんな事言っても、私じゃなくても全力で潰すと思うよ？」

少しばかり抗議してみる、一光は緋色ほど負担を強いられてはいない。何故ならなのはだけを相手にしていたから。それでも緋色の様に未来予知なんて出来ないから、かなり負担になる。

「そうだね、カズ君は特に」

「そうだぞ、スケベ以上に面倒な相手だ」

「ああ、攻撃の隙は耐えたくないな。高町相手に一番奮起していたからな」

フェイトから順にヴィータ、シグナムと緋色撃墜タイムと一光の撃墜タイムを見比べる。十分の差は実戦において長時間に思える長さだ。しかも、合流した隊長陣相手に奮戦してフォワードの逃げる時間をきっちり稼いだ。

「なあ、齊藤ってホントストライクだと栄えるよな？」

「分けてわかんよ？」

「皆いい感じですね」

「それはデバイス？それとも新人たち？」

「どっちもです」

少し離れたところでシャーリーとマリエルは談話していた。

「それにしてもすごいですね、モバイルデバイスを作ったのはあのお

人たちですよね!？」

「そうなんですよ! 基本基礎だけであそこまで高性能なデバイスを組んじゃうんです!」

シャーリーとマリエルは熱くなる、両者ともにデバイス関連の仕事の為、今や未知のデバイスだと断言できるモビルデバイスは機動六課じゃないと今はお目にかかれないし、作り上げた本人たちも居る。そこをとてとてヴィヴィオが通り過ぎる。

「えっと、あの子は?」

「なのはさんとフェイトさんのお子さんです」

「へー・・・ええええ!？」

答えられてマリエルは驚いた。当然、同性同士そういった行為をしたとしても子供は出来ないし、なのはもフェイトもまだ十代の乙女、五歳六歳の子を持つには若すぎる。とか言いつつもフェイトにはエリオとキャロ、二人の子持ちだが。

「ママー!」

全員がその声に振り返った、精気の失った目をしていた緋色は苦笑し、一光もそれにつられる様に笑みをこぼした。待ちきれなくなつたヴィヴィオがこちらに向かってきている。

「危ないよー! 転ばないでねー!」

フェイトが声を上げて言う。しかし、案の定というかお約束と言

うか、ヴィヴィオはきれいに転んだ。すぐににフェイトが駆け寄ろうとするがなのはが制止する。

「大丈夫、地面も芝生だし奇麗に転んだ。」

そう言うもんか？と緋色は思った。今にも泣きそうなヴィヴィオ、それを抱きかかえるように立たせたのは一光だった。

「うえ！」

「大丈夫か？今度から気をつけてな。」

「うん！」

いきなり表情が晴れて行くヴィヴィオ、一光はよく分かんと思う。でも皆幼少時はこんな感じなんだろうか？

「もー、カズくん優しすぎ」

「あんまり厳しくするのもどうかと思うぞ？」

「そう言えば、なのは。あの相談の事伝えた？」

「うん、内容はこれから。相談って言うのはカズくんに保護責任者を一緒にやってほしいってことなの」

なのはの一言に凍りついたのは緋色とフォワード陣営、それと傍観していたシャーリーとマリエルだ。ある種第二の爆弾発言に一光も驚いた。

「な、ななな何を言っている？」

「ヴィヴィオも懐いているし、カズ君にヴィヴィオのパパになってほしいから」

「私も適任だと思うな。」

なのはも時々有無言わせない時があるが、これは凄いインパクトを帯びている。何かしらの相談とは思っていたがまさか親になれとはフェイトも何故かこれでもない程の笑顔だ。

『と言う事はマスター、良かったですね！』

「は？何がだよ・・・セイグリット」

『レイジングハート・マイスターの娘さんの父親ですよ？こういう場合、必然的にマスターは妻ゲットなわけです。朴念仁だったのに・・・ハア、世間の音尾を敵に回しますね。羨ましいですよ？あんな美人をゲットとは』

セイグリットの言っている事がおかしい、なのはも冷静を装っているようだ。顔は真っ赤。ヴィヴィオはにまーっと見上げている。ああ、マジで？これは止めて欲しいんだが。

「待てよ・・・ってことはなのはさんが齊藤と！？」

緋色が暴走し始めた。面倒事は厄介だ、誰かあのバカを止めてくれ。

「おじちゃんかパパ？」

軽く傷ついたよ、一光はまだおじさんなんて年じゃないんだけども
ヴィヴィオ位の子供が見れば十分おじさんだ。

なのはが頬を染めた状態で並ぶとスバルを始め、ティアナ達まで唸
り始める。

「確かに一光さんが加われば親子に見えなくもない・・・」

「けどいくらなんでも若すぎない？」

ギンガの正論もここでは意味をなさない、何で？一度始まった暴走
は収まりを知らないからだ。

「確かに適任よね・・・ヴィヴィオに好かれていてなのはさん達の
注目の的」

「確かに親子にしか見えませんが・・・」

「何だか不思議ですね、一光さんの見た目が三十代に見えるからで
しょうか？」

「キュクツルッ！」

助けてください、本当に。とそんな思いを天にはさせた一光である。

訓練シュミレーターに残った一光は一人でセイグリットを起動し、

片手剣を軽く振るった。左腕は完全に復活したようで少し安心した。

『マスター、どうするんですか？』

「何が？」

『アレですよ、ヴィヴィオの保護責任者の件です。』

「少し考える……」

悩みの種は尽きない、ほんと止めて欲しい事だ。大体、おいそれと気易く請け負う事なんてできないだろ、普通に考えて。犬でもネコでもない……悩むのやめよう、疲れるし。

考えることをやめた、ヴィヴィオを引き取ってくれる人たちが現れるまでだ。何時までになるか分からないが、少なくとも、まあ……
……いいか。

「カズ、ごめんね。何だか悩ませるみたいな事持ち掛けて」

瞑想しているとフェイトが来た、謝る事でもないと思うが適当に流す。流せると思っていた。

「いや、構わないよ。少し考える子尾が増えただけだから。」

「ふふ、一つお願いがあるんだ。」

「な、何？」

「なのはを泣かせたら許さないから、ね？」

凄い気押された気がする。フェイトが何を伝えたいか何と無く、いや全くわからんが釘刺された……様な気がする。

平和な日常 その2

悩みの種は尽きるどころか次々舞い込んできた。

それは、はやてにも言えるのだがミッドチルダだつて見境なく仕事をして良いわけではなく、最大48時間の残業しか認められてなく既に超過している者が居るのだ。

「アカン、この二人なら笑って続けてまうかもしれん」

モニターされた勤務時間のグラフは皆、午後八時を過ぎた時点で平行線になる。しかし、全体表示でブッチギリトップ争いを繰り広げている赤線がある職員の名前は親友と本来なら雑務辺りの民間協力者だった。

「はい、ヴィヴィオ。あーん」

「あーん！」

訓練の後と言うより、ヴィヴィオが来てすぐに食堂に向かった一行は朝食中だ。なのはとヴィヴィオは仲良く食事している。その光景は母と子その物なのだが、同じテーブルに着く一光とスバルとティアナは不特定多数の視線が気になってしかない。

「一光さん、難しい顔してどうしたんですか？」

ギンガがスバルに負けない、あるいはそれ以上の山盛り丼をトレイに乗せて尋ねてきた。

メニューはスバルと同じ、六課定番のスパゲッティ……。の筈、しかし、スバルの様に四人で突くわけでもなく一人では末恐ろしい。なのは様に体重計で酷い目を見ても知らんぞ。

「まあ、後ろの殺気立った連中が何を仕出かすか分らないからね……。……てか姉妹揃ってよく食べるね」

半分呆れている、アレだけ動いて魔法使って青ざめたなのはよりも食っているのに体系維持出来る辺りはもはや遺伝子に何かあるのか？それともナカジマ姉妹だけそれ相応の燃費消費術でも知っているのだろうか？

「ええ、前線はカロリー消費激しいですから」

『それ言ったら分隊長もそれなりじゃないでしょうかね？』

「セイグリット、後でお話ししようか？」

『その辺はマスター、お任せします』

「逃げんなよ！」

なのはの目が笑っていない、必死になる一光を見て笑う三人。マジで笑い事じゃないんだが、そこにひっこりとリンが加わる

「むー、楽しそうですね」

やや不機嫌なリイン、はやての補佐だからか山のような仕事を切り崩していたに違いない。

「リイン曹長、どうしたんですか？」

「本題ははやてちゃんが来てからでも間に合うから良いです、それより緋色さん達が殺気立ってますがまた一光さん何かやらかしたんですか？」

小首を傾げる仕草は可愛らしいんだが、リインは何故か一光のせいだと思っているらしい。

「俺のせいじゃない、ありや妬みだ」

凄、言い切った！とギンガは思った。普通は言い出しづらい筈だ、たぶん。

「そうですか、てつきり一光さんが爆発発言したのかと」

リインの一言に後ろでベキツと音がした、多分だがなのはファンの連中がトレーでも折つたに違いない。

「あのさ、俺は爆弾じゃないぞ」

「そや、鉄人やで。リイン、あんま変なこと言つてガイヤ刺激せん
といてな。それと丁度ええ、なのはちゃん、カズ君、少し話がある
んよ。」

「はやて、鉄人でもないから」

それ以上ツッコむ気力の失せた一光は机に突っ伏した。

「それよりはやてちゃん、話って？」

「ああ、仕事のことなんやけどね」

はやての言い出した内容になのはは首を傾げる、一光も起き上がって腕を組んだ。

「なのはちゃんもカズ君も頑張ってくれてるし、こんなこと言いたくはないんやけど」

「まさか、書類に不備でもあったか？」

あ、アレねと言う顔で一光が答える。

「いや、書類不備なんてない……分けてや無いけど確信犯かい！？」

「いや、違う。つか俺に回すの整備課の取り寄せ書類だろ？」

「殆どストライク用やけどな」

「後は会議報告書だね」

なのはが言つとへーと言いたげな顔でスバルとティアナが聞いている。

「ところで部隊長、一光さんとなのはさんってそう聞いていると何の話だが分からないですよ？」

スバルの一言に頷いてはやてが言う。

「そうや、スバルの言うとおり二人ともようやってくれとるけど問題は勤務時間や。」

「ほえ？」

「ああ、残業のし過ぎってか？」

きょんとしたなのはとその程度かと肩を竦める一光、はやて的にはその程度ではない。

「そうや、何やの？二人揃って残業時間のトップ争い、しかもこの空気は何かあったやろ？」

はやてが痺れを切らして尋ねる。流石にティアナは視線を逸らし、なのはは苦笑し、一光は食事に戻る。

「ますます怪しい、スバル。何があったんや」

「え！？いや、その、なんと言いますか……」

スバルでさえ、答えようがなく言葉を濁す。フォワードも段々、はやての性格を理解しだした結果だな、これは素晴らしい。話題にならずに済むかも知れん。

「パパが出来たよお」

そんな淡い希望は無邪気に碎かれた。満面の笑みで言うヴィヴィオにスバル達はあちゃー、と思いつつも苦笑する。

「ホンマ？良かったなあ……は？」

軽く流す様な流れだったはやてはヴィヴィオの言葉に驚きを隠せない。何せ、笑い話なんてレベルではないのだ。

予想していた緋色が暴徒寸前のなのはファン一同を食堂から連れ出す。

ヴィヴィオはとてとてなのはの袖を引っ張って一光の脇まで来ると二人の間に座り、最大級の爆弾を投下した。

「なのはママとカズパパ！」

それを見てリンとはやては一度目を擦る、息がぴったり合っている辺り流石は融合機とその使い手だ。

「何だと！？一光、お前ついなのはさんを！！」

「黙れ、ヴァイス。自棄酒なら付き合っ！てか付き合え！！」

ヴァイスを緋色が引きずっていく、お前等勤務中だよな？

「どうなるか気にならへん？」

はやてが悪巧みを持ちかけている相手はと言うと、法務関係の書類を抱えたフェイト。

「はやて。な、何で私に振るの？」

約二時間前の事、はやてはあの後に意味もなく部隊長権限で一光となのはに休みを消化させるために完全休暇を言い渡した。完全休暇とは普段からオフシフトにも関わらず現場に呼び出される管理局特有の呼び名、呼び名通りにそう言ったことのない休暇だ。

はやてはニタァ！と不気味にニヤツくとフェイトを小突いた。

「またまたあ、気になるやろ？一線を引いた言ってもカズくんのこと気にしとるんはバレバレや。」

「そうだけど、休暇中に覗き見ようなんて悪趣味……」

「行き先は、カズくんの実家らしいで？」

「うん、気になる。」

変わり身早っ！とツツコミ人員が不足中の六課、そんな事も知らずになのはワンピースを着てちよつとした化粧までし、ヴィヴィオの手を引いて六課のロビーにいた。

以前にフェイトがアマタを送る事を口実に一光の実家を訪ねたことがある、なのは良い機会だからとまさに切り札を引っ提げて行くと言いだした。

「カズパパ遅いねえ」

ヴィヴィオがつまらなそうに言う。

「そうだねえ」

『あ、兄さん？どうしたのいきなり』

「アマタ、お前今日休みか？」

一光と言えばパニック緩和役に義妹・アマタき助の連絡を入れていた。

『うん、日曜だしね。と言うかどうしたの？切羽詰まった感じは？』

「いや、混乱回避役に頼もうと思ってな・・・」

『何それ？分けわからないよ』

「良いか、騒がず落ち着いて聞けよ」

一光は必死で根回しの最中だった、混乱を避けるのは勿論だが掻い摘んで説明すると表情は視る見るうちに変わっていき、最後には。

『えっと、つまり兄さんに娘が出来た！？』

「結果そうなった。」

『ええええっ！！？』

十代女子の声は異常に通るほど高い、アミタも例外に及ばずその声音は実家にすれば母屋と離れに様があり大差ない。そして、その驚き余りの絶叫だ、駄目だ。希望は潰えた、どうやってカオスを取り消そう。

「分ったな？何とかお袋達を言いくるめておいてくれ。」

『いや、言いくるめるのは良いけど何分くらいで着くの？』

「出来るだけ遠回りに行くさ」

遠い目で答えると付き合いの短い義妹は親指を立ててくれた。しかし、それが後に両親らと繋がる所があると知るのもう少し後の話である。

休日Ⅱ突撃訪問

一光からして出来るだけ出かける目的地に実家というのは避けたい、しかしこうなったのは主にヴィヴィオのわがままからである。

「そう言えば、前にフェイトちゃんはカズ君の実家に言ってるんだよね？」

ピシッ！と一光の動きが止まる、なのはは何故かヴィヴィオを引き取ってから実に親らしい？のか分らないがヴィヴィオ優先の行動をとっている。まあそれ自体は問題ではない。

そう、なのはの思い出した様なこの発言が問題だった。

「……まあ、少しだけな」

はぐらかすにも限界があり、一光はそう言った事が苦手だ。出来るだけ騒ぎのネタは持ち込みたくないのが本音。

「少しだけって？だってフェイトちゃん、時々思い出し笑いするよ？」

マジで！？と聞き返す事はしない、きっとそれはなのはの見間違えだろう。多分……。

「そらあ、なのはだってするだろ？」

「そうなんだけど、普通は誰かの名前なんて言わないでしょ？」

「んまあ、そうだな」

「それでね、アミタちゃんもどうかなって思ったから挨拶しないと
って」

それ以降、なのはは何を言っても意見を変えてくれなかった。いつ
かはなのも言いだすと思っていたが今とは。

「パパのお家？」

ヴィヴィオが呟くように尋ねている、なのはが「そうだよー」と応
じると表情が明るくなっていく。何故かは知らんがヴィヴィオにと
ってなのはと一光の実家は興味の的だったらしく、

「ヴィヴィオも行きたい！」

となった。断るのは簡単だが強く断れないうえになのはもそれに悪
乗りしそんな感じだった。案の定、なのはも笑顔でこう言ってしまう。
う。

「それじゃ、今日はお出かけしようか？」

「うん！」

何故かこの二人で決定して、一光は寝ていたかったがそれすらでき
ない状態。何故ならば……………。

「カズ君、案内よろしくね」

「は？いや、そもそもどこに行く気だ？俺はミッドの事なんて……

・
」

「何をいまさら、カズ君の実家だよ？上司としてのあいさつもあるしね」

あれ、何かデジャヴを覚えるよ？確か前もこんな理由で押し切られた気が。そんな事を思っているとヴィヴィオが上目遣いで「駄目？」と迫る、それに陥落した一光は降参して出かける準備をしているわけだが、はやてに知れた経緯は、様子を探るリインだった。蛇さん顔負けのスニーキングで事を聞くと口元がつり上がる。

「おお、良い事を聞いたですよ。くふふ〜！これははやてちゃんに知らせないと。」

これが、はやての悪巧みに繋がっていった経緯だ。

わざと遠巻きに転送ポートを開いて貰い、アミタを送っていった時と同じルートで自宅に向かう。途中下車すれば幾らかヴィヴィオも楽しめる施設はあるしな。

そんな観光気分ならぬ観光思考に一光の頭がシフトしている最中、携帯が鳴った。

「はい、もしもし？」

『兄さん、ごめん。私じゃお父さんとか止められない』

アマタからだった、しかも止められないと来たか。でもこの事は知れていない筈だ、別の理由でもあるのか？一光だって両親が荒ぶった際、止められた経験は少ない。それでもアマタより当然、長く付き合ってきたのだから対処のしようがあると思ったのだろう。

「どうしたの？」

尋ねてきたなのはを適当にあしらいつつ、一光は聞き返す。

「まさかと思うが伝えたのか？」

『うん、聞かれた時にポロっと』

「そりゃ、無理だな。止められんよ」

既に我が家はカオス、混沌が支配している様が浮かぶ。一番避けたかった事態に崩れ落ちそうである。

『いや、兄さんが直球に言い過ぎなんだよ？アタシだってこの歳で甥っ子とか早すぎるし！』

「何を先走つとるかバカアマタ」

『酷くない！？』

一光のやり取りを見ていたなのは、辛うじて聞こえた「甥っ子」と言う単語につい視線はヴィヴィオに向いてしまう。

何かしら意味が間違っている気がするが電話の相手はアミタで、アミタも暴走気味の様だと言うのはわかった。

（と言うことは私、アミタちゃんの中でカズくんのこと？いやソレはないよね？）

珍しくなのはも暴走寸前だった。

「ハア、より帰りたくなかったな……。なあ、なのはって、どうした？」

「ふえっ！？」

「顔、真っ赤だぞ」

一光もトロい、否。鈍感と言うべきか、先程のアミタ暴走発言は携帯からかなりの音量で響いていた。隣にいたなのはは聞こえたのだが、他の連中は知ったことではない内容だし、一光としてはなのが熱暴走を起こすなんて想像も出来なかったのだ。

何せ、すっ飛ばされた記憶しかないし。

酔えば暴徒、怒りのあまり我を忘れれば冥王、犯罪者からは白い悪魔と恐れられる高町なのはだ。

まあ、確かに最初は可愛いなとは思ったさ。思ったけど……。思い出すのを止めよう。

一光はそこでなのはの事を思い返すことを止めた、何故か？トラウ

マに触れたからである。

一方でリアルタイム中継を眺めるはやてを始めとした主要メンバー。そこには緋色、ヴァイスの姿もある。

「こうして見てるとホント家族みたいやねえ」

はやては期待していたらしく少し空振り、はやくカオスを見たいのが本音だ。

「ねえ、はやて。やっぱりやめない？」

「何言うとんの、フェイトちゃん！これからやん」

「確かに気になるけど、これじゃあプライベートもクソもあつたものじゃないよな。」

珍しく緋色は常識人だった、いつものように悪ふざけをするわけでもなく、心底と言う感じに呟く。

「そうだよ、緋色の言うとおりだ」

「おお！いつもウチ側やったのに緋色君が真面目キャラや！」

「頭でも打ちました？」

「ティア、やっぱりさっきの模擬戦じゃない？」

「それを言ったら、ねえ？」

ティアナがエリオに振った。具体的にはこの二人を逃がすために緋色は囷という名の盾役を務めたわけだが、勿論任意じゃない。

「ティアさん！ば、僕に振らないで下さいよ！」

慌てるエリオ。当然だ、力量差は当然言うまでもないが緋色も一対一ならなのは等に対しても対等以上の実力者だ。エリオ達を気遣った緋色の行動に感謝している、最近になって緋色も一光に負けず劣らず優しい面を持っていると分かってきた。

普通のマイナス面さえ無ければ、フェイトやはやて、ティアナも惚れてしまうかも知れない。まあ、それは藤原緋色がもつと六課でオープンになってフェイトやはやてにアプローチを掛ければの話だが。

「あ、着いたみたいですよ」

キャラが言つと皆がモニターを凝視する。

さて、実家に着いたのは昼過ぎ辺り。

やっぱりどう足掻いて見ても二時間ちょいの引き延ばしが限界である。

「わぁー、お家がいつぱい！」

ヴィヴィオが母家込み五軒の物置を見るなり一際明るい表情でそう言った。一光の実家は丁度正四角形に塀が並び、その中に東西南北と物置が四軒あり、中央に二階建ての母家がある。現在は内一軒が離れでアミタの自室となっている。

「結構広いんだね」

「まあ、農家だからな。」

なのはが辺りを見回しながら言うと一光は諦めたように告げた。

「あ！母さん、兄さんが帰ってきたよ！」

ひょっこりと玄関かは顔を覗かせたアミタが、直ぐに屋内に消える。そして経験上、一光は密かに身構えた。

「この不良息子があ！」

そんな叫びと共に隆正が走ってきた、そして何の前振りもないパンチが繰り出される。

何でこうなったか追い付いていないのはとヴィヴィオは目をパチクリとさせているじゃあないか。

「ついさっき美人を連れてきたと思えば何か！またか？しかも今度は子連れって何だー！！」

「ついさっきって何だ？むしろ俺の方が聞きたいわ！」

どこぞの格闘アニメ顔負けのやり取りが繰り広げられる。

何だろう、何か間違えたかな？と思い始めるのはである。

「ごめんね、驚いたでしょ？」

物腰の柔らかな女性が出てきて言った。続いてアミタも出てくる。

「いえ、それでも……」

ない、とは言いい切れないのは。確かに訓練風景と比べればそうでもないが、あるいは一光の父は格闘家なのかも知れない。それなら納得がいくかも。

「無理しなくていいよ、なのはさん。父さんは時々ああなるらしいから」

呆れたアミタが簡略的に説明した。

「初めまして、齊藤望美です。カズもやるものね、今度は美人だけじゃなく可愛い子も連れてくるなんて」

さも嬉しそうに笑う望美を見てなのはが僅かに赤くなった。

「こちらこそ！高町なのはですっ、それでこの子が」

「こんにちは、ヴィヴィオです！」

ぺこりとお辞儀をしたヴィヴィオ、その仕草に望美はつい表情が綻んだ。可愛い、世事を抜きにして本当に可愛い、しかしだ。一光となのは、二人はまだ知り合って一年も経たない。その二人がヴィヴィオを、5、6歳の少女を連れているのはおかしいのだ。

「二人とももう止めなっ！」

アミタが語気を強くした、互いの拳を受け止めて両手でクロスを描く形で一光と隆正はプルプルと震え、押しあいをしていた。

「パパもおじちゃんもケンカ駄目！」

ヴィヴィオの一言で組合はすぐに解かれた、正確には隆正が止めたのだ。今度から親父が暴走したらヴィヴィオに止めてもらおうかな？ そっちの方が効率的だし。

「そうだ、ケンカはいけないな。初めまして……で、一光。何でこんな可愛い子を連れてるんだ？」

暴走がやんだと思ったらいきなりシリアスモードの隆正、はっきり言っこの変化には付いて行き難い物がある。肩で息をしながら一光は溜息をついて言う。

「詳しく説明すつから暴れんなよ、親父。次暴れたら容赦なく魔法使うぞ」

「カズ君、ダメだよソレは。」

「冗談だって」

なのはが少し責め寄って言うのと一光は苦笑して誤魔化した。正直、なのはの大胆な行動は少し苦手だ、理由は特にないが異性として意識せずに飛びついたりする時がある、本当にソレは止めて欲しい。なのはファン一同に抹殺されるからな。そうでなくてもドキッとするから正直心臓に悪い。

玄関に消えていく一同を見ながらアミタはなのはの小さなカバンの中に隠れているリインにグッと親指を立てた。

「ありがとですよ、齊藤さんに見つかったらどうなることか・・・
・・アミタさんがいてくれてよかったです！」

「まあ、兄さんも凄いですからね。怒ると周りが見えなくなうと言
うか見なくなると言うか」

アミタも一光も正直隆正みたいな所があると思っている。重傷にも
関わらず飛び出していく所とか周りを見ない発言とか。

「で、なんで隠れているんですか？ぶっちゃけてきても家ならお

っけーですけど?」

「実は極秘ミッションなのですよー」

「ああつ、八神部隊長の悪戯ですか?」

「そうです!映像転送係だったりするんですよー」

この会話を知る由もないのはと一光はヴィヴィオの一件を必死に説明していた。

ささやかな不安

なのはと一光の強制休暇から数日後、残り数日足らずで公開意見陳述会が開かれる。地上本部でレジアスの推し進める質量兵器についても詳しく説明、語られることになるがそれ以上に別世界から来た筈の一光と緋色は予言通り、地上本部が襲撃された場合の対処を考えていた。

「魔力を無効化してくるのは絶対、モビルガジェットも惜しみなく出してくる筈だ。」

「ましてや、戦闘機人……何人だっけ？必要最低限、こっちの突入経路には配置してくるだろ？」

素人の考えなど立ち会って聞いているシグナム、ヴィータからすれば「何でこんな事に？」と頭をかしげる事もあるだろうが苛烈な実戦経験を積んだ一光、一時は一人でジェイル陣・管理局を相手に立ちまわった緋色。この二人は互いに見た視点から物を言い、二人なりに対策を立てている。それはそこのミリタリー好きが言うような物ではない的確な物だ、敵の手段とその先兵にモビルガジェット及びガジェットが使用される・キーポイントは戦闘機人に割り当てるだろう。

「所でシグナム、アンチ・マギリング・フィールドAMFで魔法が使える魔道師はほぼ全員が警備に当たるんだろ？」

緋色が腕を組んで一光との対談を聞いていたシグナムに尋ねる、シグナムははやての付き人として会場に入る為、その穴を緋色が埋める事になる。

「多分な」

「多分って!」

緋色が抗議しかけた時、仕方ないかと思った一光がいた。全魔導師がはいそうですかと対AMF訓練を受けているかと言えば違っだろうし、今回の様な事態に対処するのも想定していない筈だ。

「アタシらで守りさえすればいいんだよ。」

ヴィータがハンツ!と最後に付け加えた。

六課も勿論警備に参加する。前日の夜から警備に当たる為、いつも通りヘリで向かう。

先発組はフォワード、なのは、ヴィータ、リン、一光だ。

「悪い!ギリギリか!?!」

「ほんとギリギリだよ?」

なのはが軽く咎めた。六課の主戦力として換算されるようになってから一光と緋色はもはや民間協力者ではない、一般局員と変わらな

い扱いで、技術部に入り浸る事が多くなったと言つのは余談で今回も本部内を警備する隊長陣に近い位置で警備を行う事になる。

「カズ、何でギリギリなの？何時もなら誰よりも早く来ているのに」
フェイトが尋ねる。

「ああ、ちよいとな。モビルデバイスを弄つてた、ストライクがベターでよかったが反応速度がな……」

気不味そうに話す一光に緋色は表情を険しくさせた。

見送りに出た寮母のアイナとヴィヴィオ、ヴィヴィオに至っては泣きそうだ。

「それじゃあ、明日の夜には帰ってくるから」

「良い子にして、な？」

なのはと一光が言う。ヴィヴィオはフェイトの事もフェイトママと呼び、慕っている。一光はあの強制休暇以来、いや、その前から懷かれていた節はあったが明確になったのは休暇以後で、それこそなのはとヴィヴィオと一光が並んでいると親子に見えるとシャーリーのみならずアルト達まで言い出す始末だ。

「うう、いつてらっしやい」

「それにしても、ヴィヴィオ、本当に懐いちゃってますね」

「まったく」

スバルが切り出すとティアナが同意する。

「そうだね、結構厳しく接しているつもりなだけだなあ……」

「何だかんだで分かるんだろ？なのはの優しさって奴が」

「と言う一光さんにもべったりですよね」

キヤロが言つと一光は固まった。

「そつ、見えるのか？」

一斉に頷くフォワードに一光は苦笑するしかなく、リインがなのはの前に出てある提案をした。

「もういっそ、本当になのはさんの子にしちゃうとか！」

「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ。良い受け入れ先が見つかって、ヴィヴィオがそこに行くことを納得してくれば」

「納得してくれない気が……」

「うん」

「うんうん」

エリオに始まり、ティアナからキャロとスバルに続く。

「ええっ……それは、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど、ちゃんと説得するよ？良い子だもん……ちゃんと幸せになつて欲しいから」

「確かに悩み所ではあるな」

なのはの悩みに一光が答えるとリインは何か思いついたように尋ねた。

「一光さん、この際ですし、俺が二人とも幸せにしてやる！みたいなこと言わないんですか？」

「リイン、何を言い出す！？」

真っ赤になった一光がやや低い声音で言う。

六課に残った翌日合流組のフェイトと緋色、フェイトは寮の自室で

ヴィヴィオと休んでいるが、緋色は一光が直前までいたメンテナンスルームにいる。

ウイングゼロを入念に整備しているのだ、仮にBSライフルが破壊された事も踏まえてツインバスターライフルも改良しなければならぬ。そして、危惧した事実の確認も済ませる。

「あのバカ、反応速度が超過してやがる。これじゃあストライクがついていかねえ……。だから遅刻寸前まで組んでたのか」

作業台の上には、改良の為に工具を散乱させた状態で一光は駆けだして行った様だ。しかも、ストライクの即興強化まで行つて。

「はぁーい、フェイト久し振り」

フェイトはと言えば部屋でヴィヴィオの面倒を見ていた時、母であるリンディから通信を受けた。

「久し振りで、母さん。どうしたんですか？」

「たまには娘の顔も見なくなる物よ、ついでにヴィヴィオにも会いたし」

「母さん、明日私は仕事ですしヴィヴィオはアイナさんが」

「そう、残念」

などとリンディと雑談するフェイトだった。

（よもやこんなに早くストライクの限界が来ようとは……
急拵えて強化を済ませたは良いが）

一光は暗い夜空を見上げながら、予言の危機感を拭えずにいた。

嫌な胸騒ぎが収まらない、はつきり言って何か起こる気がする。だから万全の態勢で臨みたかった、警備中、夜間はなのは達隊長陣も地上本部には入らずに外で各部署ずつ行う形がとられている。その為、デバイスは常備できるが地上本部・内部警備となるとデバイスは持ち込めない。それも不安材料の一つだ、幾ら訓練を積んでいると言ってもガジェットと相対した時は意味などない、人は天地が引っくり返ろうと機械に勝てない。

「どうしたんですか？こんなところで」

振り返るとギンガがいた、先ほどまでスバルと共になのはと話していたのを覚えている。と言っても既に十分以上前だ。

「いや、眠いなと思ってな」

適当に笑って返す、しかしギンガはジトッと見るや溜息をついた。恋愛系ドラマであるヒロインが主役に苦笑いする感じに近い表情で。

「不安ですか？」

「・・・・・・・・バレてた？」

「ええ、それはもう顔に出てましたし。なのはさんも心配しますよ？ただでさえ無茶が多いって聞きますから」

「それは関係ないだろ。まあ、否定はしないが・・・・・・・・」

「大丈夫ですよ、齊藤さんはこう言う物々しい事は初めてで緊張しているだけ。この仕事が終わったら、その・・・・・・・・」

何故か口ごもるギンガ、心なしか顔も赤い気がする。一光はまた空を仰いだ、暗い夜空は今の心境のように思えて何とも言い難い。ストライクも強化したと言っても間接反応速度を50パーセント引き上げてみたがテストもしないで実戦になってしまった。

『大丈夫ですよ、マスターには私あるじゃないですか』

「ん、まあそうだけどさあ」

煮え切らない呟きにセイグリットは溜息を辞さない。一光はさつきからモジモジするギンガに首をかしげる、そう言えば熱暴走したなのはもこんな感じになった様な気がする。

「終わったら・・・・・・・・ショッピングに付き合ってください！」

ギンガが意を決したように言うと一光は後ずさった。勿論、驚いたのもあるが何より、何故か背筋に悪寒を感じたのだ。

「ん、ああ。」

スバルと談笑していたのはがピクツと眉を動かす。

「なのはさん、どうしたんですか？」

「ん？何でもないよ、スバル」

と答えながらなのはは辺りにギンガと一光が居ないことを確認するや黒い笑みを浮かべた。

「後で二人にお話しないとね」

（ひええっ！何言ったのギン姉！？）

ギンガが一光の元に向かったことを知るスバルは内心叫びながら苦笑していた。

六課でははやても空を見上げていた。

予言通り事が起きれば、地上本部は勿論無事で済まない。勿論六課も破壊されるかもしれない、そう考えると無性に不安で眠れなかった。

「お、はやてさん？明日は重要でしょ、速く寝ないと」

「緋色君、いきなり何やねん。説教でもしにきたんか？」

はやては少しムスツとして緋色に反論した。すると緋色は笑って違うと言う。

「思いつめなくても俺が引き抜きますって、仮に攻め落とされそうになっても最高の未来を」

「攻め落とされそうっちゅう所が何やアレやけどどうにかなるん？正直不安でしょうがないんよ」

「だから、皆いるじゃないですか。俺に齊藤、六課の方々と・・・
・大丈夫、外の警備は任せてしっかり議論してきてください」

「ホンマ、緋色君は何でそんな強気で居られるん？それと敬語禁止な、歳だけなら緋色君の方が上や」

「信じる事が大切、不安ばかりだと変な物しか寄ってこない。悪い物もね。だから、俺は信じているっすよ」

「そっか、なら大丈夫って信じて議論するわ！」

「そ、その調子で！」

破壊の宴 / a

暗い室内でスカリエッティは、戦闘機人・ナンバー1で自身のもう一つの頭脳であるウーノの操作するキーボードの明かりで不気味に照らしだされていた。

「楽しそうですね、ドクター」

ウーノがキー打ちながら、起動するモバイルガジェットが消えて開けていく広間で言う。調整に調整を重ね、単機で長距離転移を可能にした『レギナ』は当初投入されたストライクの数倍の性能を秘め、それをフルで生かすプログラムが組み込まれている。

「そう見えるかい？」

「はい」

淡泊にウーノが返すとスカリエッティは口端を持ち上げる。

「何せ、祭りだからね。楽しまなければ損だ、それにこれだけの物を生み出してくれた彼にも感謝しているよ」

彼、と言う先に居るネイキッドはスカリエッティと同じように笑った、まるで面白い物でも見る様に狂喜の笑みを浮かべている。

「我も祭りは好きだ。何せ加減の必要がないからな……我は行くぞ」

「ああ、楽しんできてくれたまえ」

黄金の鎧が消えた。同時にスカリエッティによって破壊の号令が發せられた。

「さあ、始めよう！」

「セイグリット、ギンガはストライクのセンサーで追え。多分、念話を始めに通信手段は奪いに掛るだろうしな！」

『はいはいマスター！後でレイジングハート・マイスターに絞られて下さい！』

「無駄口はここまでだ、エール・ツインライフルで行く！」

迫るガジェット群、最終防衛ラインに魔導師が終結し、攻め入る突破組と護り組に分かれた。一光は誰よりも早く先陣を切ってライフルを二丁を構えた。被弾は駄目だ、余裕がなくなるからな。

（ふっ、来るなら来て見る。地上本部の守りは完璧だ）

レジラスはそう思って高を括っていた。しかし、そんな思いとは裏腹に管制室は戦闘機人・No.6、セインに占拠された。ほぼ同時に動力機関部をNo.5、チンクが破壊してガジェットの入りを拒んでいたバリアフィールドは出力が低下。ガジェット達が力押しで突破しようとしている映像がモニターされた。

レジラスは愕然として、目を見開いて呆然としていた。

そんな会議室のモニターは予言にあった希望の閃光も映していた。

カリムとはやて、シグナムとシャツハが対応しきれない武装隊の魔導師達を支えるようにライフルを放つストライクとウイングゼロを食い入るように見ていた。

「頼みましたよ、二つの閃光……」

カリムの呟きは予言から、はやては名指しで呟いていた。

フォワードは隊長陣にデバイスを届けるため、事前に決めていた合

流地点に向かう。

一光が危惧していたようにギンガは別行動を取っていた、緋色と背を合わせ、ランチャーに換装してバスターライフルに合わせて薙払うようにアグニを放つ。

「チィッ！ いっぱしの数を揃えてきたなっ」

「だが、数だけだ！ 武装隊を守りに当てれば、それなりに持ちこたえられるはずだっ」

毒づいた緋色がBSライフルを振りながらガジェット？ 型を二機同時に斬り裂く。それだけに止まらず、BSライフルは振り抜いた先で放たれ、凶太い閃光が爆発を量産する。

ランチャーからエールに換装した一光がライフルを連射してガジェット？ 型改とガジェット？ 型を正確に貫く。

次いでソードに換装、大群を成してきたモビルガジェット・ウィンダムに斬り込んでいった。

武装隊の一人がさっきの口論を思い出す。「民間人は下がっている！ 」と言った武装隊、これは一光と緋色を何も出来ない素人と侮っていたから。

二人は真っ向から言い返した「アンタらは自分の仕事をしろっ！ 」と。モビルデバイスを展開し、立ち回る様は圧巻だった。

「おい、アッチの換装チェンジしまくってる奴……流れの傭兵らしいぞ」

ストライクの集音性も向上していたらしくそんな会話が聞こえしま
う一光、本気で仕事しろっ！と内心叫んだのは秘密である。

「『攻撃レベル、戦術最大効果確認！』」

緋色は愚答等に耳を貸さず、殲滅を優先してゼロシステムとシンク
ロして図太い光の筋を左から上に薙払う。それだけでバリアファイ
ルドに取り付いたガジェットが一気に破壊され、花火が量産されて
いく。

「『来たか。』」

サーベルを抜き、光刃を受け止める。ナイフを逆手に持ったような
光刃を手首から生やした女性に緋色は僅かに驚いた。

「貴様は消えろ、邪魔だっ」

「『そうはいかない、キミらは排除対象だ。』」

戦闘機人、ゼロとシンクロしていなければ対応すら困難な速度で迫
った彼女に緋色は毅然と告げる。

No.3・トーレはIS・ライドインパルスで翻弄しようと加速し
た。が、移動ルートを先読みされてBSライフルが容赦なく放たれ
た。

「何っ!？」

正確な一射を体を捻って無理矢理避ける、とトーレは距離を取って

それはいい、PS装甲を破るだけの威力を持たない物理攻撃だ。問題は三対一、セツテを護衛する二機のレギナだ。バインダーライフから放たれたビームが執拗に退路を削り、肩を掠めた。

「チイツ！」

サーベルを投擲し、レギナに肉迫する。同時に再装備したアーマールシュナイダーをセツテに投擲して射撃の隙を誘う。

「無駄です、貴方の武装では対応できません。」

思惑を読んでいたようにライフルをブレードで弾くセツテ。しかし、一光は内心ガッツポーズをする。

「そうだ、エールなら換装の隙があるからな！」

『フルドライブ・イグニション』

セイグリットの管制を外れ、ストライクのフルドライブを起動。

I・W・S・Pに換装した一光は対艦刀を振り抜き、ガトリングシールドでレギナを蜂の巣にし、115フォトンキャノンで二機目を撃ち抜く。

一光の狙いはレギナ二機からセツテを引き離す事だった。でなければ撃破した際の起爆で怪我を負う。

ま、実際は違うだろう。至近距離からブーメランブレードを装甲の間に突き立てた、力いっぱい突き立てたらしく肩に痛みが走る。

「残念でした、貴方は甘い。」

「何が、残念なのかよく解らんがね！」

一光が対艦刀に手を伸ばす、セツテは勿論良しとせず自身ストライクの二回
りほど大きな鎧を纏った一光を投げ飛ばした。

「んな華奢な体で良くやるっ！」

毒づきながら一光が離脱を図る、ストライクのセンサーが追っていたギンガの反応とフォワードの反応が動いていない。と言う事は戦闘機人と遭遇した可能性がある、否。しているだろう、一光と緋色は先発した武装隊の負傷者が回収されていることを確認してから本格的な攻撃に移っている。

単にレギナも込みでガジェット相手だったから、と言う事もあるだろうがストライクにそんな余力はない筈だ。

「貴方は詰めが甘い、もっと冷徹になるべきです」

「かもなっ！」

ブーメランプレードと魔力ブーメランが激突し、爆発する。四散したのは一光側、魔力ブーメランだった。煙を貫いてきたブーメランプレードが115フォトンキャノンの砲身を斬り落とす。

「クソッ！」

ストライクが悲鳴を上げた。改良し、反応速度を高めたとは言え左

肩から先が赤く点滅する全体像が映し出された。

（左肩が限界か……頼む、まだ壊れてくれるなよ！）

はつきり言つてストライクを引つ込めてセイグリットに変えないと生存すら無理っぽくないかと思えてくる、対艦刀の一振りを構えてセツテと対峙する。コンバインシールドは邪魔だ、切り離す。

「『おい、ストライクは持つのか？』」

緋色が背を合わせ、問いかけてきた。何分ストライクは緋色が製作していたから見抜かれて当然かもしれない。静かに首を横に振る。

「『それじゃ、武装破棄は限界だからか』」

「お前の方こそ、BSライフル持つのか？」

「『んなもんとうの昔にオシャカだ……。嫌な未来nextがあつた、こいつらは任されたから齊藤はフォワードの援護に行け』」

「一人で耐えきれるかバカ。でもま、そろそろデバイスも届く頃だ……。安心しろ、あのピンク髪の子は一時でも下がらせてやる。」

「バクンッ！」と緋色が言い返す前にセツテへバックパックが特攻をしていく。一光はソードに換装し、スラスターを吹かした。いっそう加速した。ソレを多としたセツテはバックパックをIS・スロツターアームズで切裂く、爆炎で一瞬だけ視界を遮り、緋色は事を理解しバスターライフルを思いっきり突き出してセツテを捉えた。

「『成程な、お前らしいよ』」

図太い閃光にセツテの視界は飲まれて、煙が舞う。倒したとまではいかなくともすぐには戦線復帰出来ない筈だ、直感的に緋色が身を翻し、剣閃を避けて胸部ガトリングで牽制すると黄金の鎧の纏うネイキッドがトーレの前にいた。

「『お前は……やはり来たか』」

緋色がツインバスターライフルの銃口を向ける、トーレは一度頷くとすぐに消えて、後方で武装隊の声が聞こえてきた。緋色は舌打ちする、これでは地上本部は攻め落とされる。その未来を歩^みんでいやる。

緋色の中に焦りが生まれた、早々に片づけて武装隊の援護にいかないと行けない。

「良くも我らの邪魔ばかりする。その翼？いでやろう！」

「『やってみろよ、お前も知っている筈だろう？それではお前も道連れくらいには出来る』」

ギンガはN o . 5・チンクと対峙していた。そうさっきまでは一対一で均衡を保っていた。

「そらそら、しっかり避けるツスよ？」

そう言いながら射撃を行うN o . 11・ウェンディは急所を狙わず、牽制に留まっている。目下ギンガを苦しめているのはN o . 9・ノーヴェが格闘戦をしかけ、それに応戦しているとチンクのIS・ランブルデトネイターの爆発に巻き込まれ、ダメージを受けてしまう。

「これで終わりだ！」

思いつきりノーヴェが顎を蹴り上げた。脳が揺さぶられ、立っている事も出来ない上にさっきの起爆で利き腕をやられてしまったギンガは諦めるより手はなかった。

（ごめん、お父さん、スバル・・・・・・・・）

来るであろう衝撃に備え、目を強く閉じたギンガ。しかし、チンクがステインガー・ナイフを投げたと同時に発した言葉を疑った。

「ノーヴェ、ウェンディ、下がれ。敵の増援だ！」

起爆に巻き込まれるからではない、増援と言った。スバルたちが間に合ったとは思えない、それに入り組んだこの地下通路を短時間で移動できるのか？

「ギリギリだな・・・・・・・・悪い、遅くなった。ギンガは下がれ、

「と言っても一人では無理か」

起爆したスティンガーが同時にソードパックを破壊した。一光はすぐにシールドアンカーをウェンディのライディングボード目掛けて放つ。

「ハッ！こんなもんでどうにかなると思ったのかよ！？」

タイミング良くノーヴェが蹴り落とした。

「おいおい、サッカー少女ですか？」

ストライクが機能を失い、消えて砕けた待機状態で転がる。セイグリットを構えながら一光は感謝した。最後の最後までストライクに守られたのだ。ありがとう、と内心で呟くと銃に切り替え、二丁拳銃でいがみ合う。

「大丈夫か、ギンガ。」

「見ないでください……………！」

振り向くと弱弱しいが拒絶の声が返ってきた、ギンガは左手を押さえている。かなり深い傷らしく出血は依然として続いているし、恐らく挟れていたりするんじゃないかと勝手な憶測を立てる一光は突っ込んできたノーヴェに連射し、牽制を図る。

「取り合えず、引くぞ！」

振り返らずに連射し、ショットガンアイスがスティンガーを撃ち落とす。弱弱しいギンガの声に思わず振り返ると傷口から機械が覗い

ていた。機械の部品が刺さったとか、そう言うんじゃない身体の中に機械が埋め込まれている？

「お・・・・・・・・ガッ!?」

呆けたのが仇になり、ウエンディの射撃がギンガ直撃コースをたどる。とつさに割り込み、我が身を盾に受けるとノーヴェの強力な回し蹴りが見事に肩を捉えた。壁に激突し、ごきんっ!とこ気味の良いい音が聞こえた。と言うか無駄に響く。

「ハッ、他愛ないな。所詮は鎧なんて纏ってから・・・・・・・・!？」

土煙から青い魔力光が突き出された、間一髪で避けるノーヴェを肩を手前に持ってきた姿勢のまま、一光が我龍双煉掌の派生バリエーション・シャイニングフィンガーを放った。単純にアイアンクローなのだが青く発光したソレはベル力騎士の一撃と同格の威力を誇る。

「また、肩が外れたか。ギンガを速く病院に連れていかないと不味いな・・・・・・・・」

と言いつつ、一光は右肩を殴るとごきんっ!と音がした。軽く肩を回すとゴキゴキ音がする、その光景にウエンディは啞然とし、ノーヴェは「人間か？」と疑問に思った。チンクはと言えば。

「貴様は民間協力者だろう、タイプゼロ・ファーストを渡せば逃がしてやる」

威圧感を感じてコイツは不味いと思った。ノーヴェの蹴りは直撃であれば確実に意識を殺げるだけの威力はある、一光はそれをまともに受けてすぐに立ちあがり、攻撃に転じた。他二人と比べ、稼働歴

の長いチンクは経験で分かる。コイツは化け物だ、一撃で仕留めないと当たり前の様に立つてくる人種だろう。

そんな人間でも命が惜しくない訳はない、それに民間協力者だ。言いくるめられると軽んじていた。訓練を積んだ局員でさえ、そう言った奴はいたのだから。

「は？それはギンガの事か」

「ソイツの傷口を見ただろう？その女は人じゃない。我々と同じ戦闘機人だ」

「で、それがどうした？」

予想外の反応に少し間が空いた。

「忌み嫌わないのか!？」

「悪いな、俺はそう言うタイプの人種じゃねえし。蹴りが鉄バット級だったりナイフ爆弾投げる眼帯少女が目の前にいたりしても何ら驚くことはない。」

「が、眼帯少女・・・・・・・・!？」

「別に、戦闘機人だからって変わる事はないだろ。ギンガはギンガ、キミらはキミだ。だから・・・・・・・・」

一光は大剣に換えたセイグリットを片手で操り、赤い装甲のモビルガジェット（ヴァイエッジ）の刃を防ぐ。

「誰かの言いなりは止めようや、なあ？ エピオン」

「姉や妹達をたぶらかすな、貴様は俺が殺る。」

飛び退いたエピオンに一光はクリスタルマインを放つ、リインの『凍てつく足枷』をベースに編み出した新技、その精度は高く、しっかりとエピオンを地面に繋ぎとめた。

「煩い、お前は許せん。何でギンガを狙った？」

「使える物は使う主義だ」

戦意を意外な形で削がれたチンクとノーヴェ、ウエンディと気絶したギンガを余所にエピオンと一光が衝突した。

破壊の宴／b

ばきんっ！とエピオンの足を固定する氷が砕けた。同時に一光が地面を蹴るとエピオンは脇にいたチンクの腕を掴んだ。

「姉さま、すみません」

「レオーネ、何をする！？」

チンクの叫びを無視してエピオン、否。レオーネが一光に向かってチンクを投げた。

レオーネはスカリエッティがネイキッドの遺伝子を利用し、培養した戦闘機人でナンバーもウーノより遅い起動にも拘らず、ナンバー00と位置づけられて生み出された。肉体強化を幾度も試験的行った結果、不具合が生じた経歴を持つ。先天性のスキルを持たない代わりにナンバーズ内では唯一、デバイスを使用するのがこの少年だ。

デバイスも六課から本局に渡った設計データを元にスカリエッティがゼロシステムを模して製作した予測システム・ファルスシステムを搭載し、ISの代わりに適合が図られた。ナンバーズで唯一の男性体で合理主義、今の様に例え姉妹でも平気で盾に利用し、勝利の為に手段を問わないのがNo.4・クアットロに好評だった。

ナンバーズの肉体強化が円滑に、より強力な強化が進められたのはレオーネというサンプルがあったからだ。

ファルスシステムの弾きだす一光の行動を読み取り、反撃する。レ

オーネはネイキッドの様にプライドの高い少年でナルシスト、戦いに絶対の美学を求め、剣士の潔さを美学と思ってる特異な戦闘機人でもあり、その刃はチンクごと貫こうとして突き出される。

「ッ！」

チンクを受け止めた一光はすぐに左へ身を躍らせた。左わき腹を掠めた光刃は裂いた傷は焼けている、相当の熱量を持った光学兵器であるのだろっ、モバイルデバイス・エピオンは魔力駆動でないのかもしれない。

「おい！何で助けた？今ので自爆でもされたらお前も死ぬのだぞ？」

「死ぬのが怖くて………怖いけど」

「ダメじゃないっすか！」

聞こえたウエンディがつっ込んだ。

「何すんだテメエ！今のでチンク姉が死んだら………」

「ドクターの計画に、感情移入してしまう駒は不要です。消去の許可は得てきました。」
ロスト

ノーヴェの抗議もザツクリと斬り捨てるレオーネ、ウエンディは比較的一光の方に近い位置にいた為か手を出せない、ノーヴェも逃げる様にこっちに来る。一光を支えるようにするチンクが見上げると顔色は青い、決して健康面は良い状態ではないのだろっ。

「ドクターは姉ら姉妹を最高の作品と言いました。我には理解でき

ません、その程度の雑魚の何処に感情を移入させてしまうのか」

「悪かったな雑魚で、任務をこなせなければ死か？笑わせんなよ」

片手剣に切り替えた一光が四人の前に出る、同時に活性化モードに突入して猛攻を仕掛けた。ビームソードだけで全てを捌き切るレオ
ーネは確かに強い。

「我は笑えない、貴様を殺してタイプゼロを回収するだけだ。」

「なら、俺がお前を破壊して終わりにするだけだ！」

地下通路に咆哮が木霊した。

地下と蒼空で激戦が続く、緋色はローリング・バスターライフルを放つ。ガジェット破壊しつつネイキッドを牽制すると直ぐにサーベルを抜いた。

「そんな鎧程度でよくぞ我に付いてくる、誉めて使わそう！」

ネイキッドが射撃を無視して肉迫していたのだ。ネイキッドの鎧も幾つも傷がある、鎧事態にバリア効果でもあるのか貫くなどダメージになる物はなかった。

空間から剣を抜くネイキッドに緋色はサーベルで対応しているというわけだ。

「『っ！』」

ネイキッドの手には黒い刀身が高速回転している剣が、サーベルを弾いた。剣と呼ぶにはあまりにも異形な武器で装甲は削り取られる。

「終わりだ！雑種っ」

ネイキッドは油断している、隙だらけで攻撃に移れるとは思っていないらしい。

「『言っただ、道連れくらいには出来るってな！』」

緋色が無理矢理バスターライフルを突き出して最大出力をゼロ距離で放った。

フォワードはノーヴェとウェンディ、二人と戦闘した物の無事なのはとフェイトヘデバイスを届けることに成功する。

届けた先で通信途絶状態のギンガを心配して、スターズが確認に向

かい、同様の六課ヘライトニングが向かう事になった。

「スバルツ！先行しすぎ！！」

ティアナが注意するが聞かないスバル、ティアナはなのはに抱えられて飛行している。入り組んだ地下通路では飛ぶよりマツハキヤリバーのようなローラーブーツの方が早い。

「仕方ないね、こんな場所だとスバルの方が早い。少し急ぐよ」

なのはが呟き、スピードを上げた。

光刃が壁に突き刺さり、レオーネはヒートロッドを振るった。

「ハア！」

それを火焰煉瓦刃で断つ、間髪入れずに振るった右の片手剣フェンサーを引き戻しつつ、左の刃をレオーネの光刃を握る左腕に向けて叩き込む。

「惜しいな、傷さえなければ危なかった。」

直撃したにも関わらず、装甲には傷しか付いていない。いつもなら火焰煉瓦刃で斬り裂けるのに、セツテの一撃が今になって響くなんて、と一光は思いながら片手剣フェンサーを構えなおす。

ストライクもあつて軽傷だと思つていた左肩の傷は以外にも深い物だった、バリアジャケットに染み出た血が腕を伝う。それはレオードとの対戦光景を見ているナンバーズにもしつかりと視界にとらえる事が出来る。

「あの男、死ぬぞ」

チンクがそう呟いた。光刃を引き抜いたレオードが猛攻に転じる、一光は退く気配を見せずに大剣に切り替え、殆んど互角の戦いを繰り広げた。

「それってどういう事ッスかチンク姉？アイツの後はアタシらつて事じゃ」

「分らん。しかし、レオードの口ぶりからして冗談ではないだろう・
・・・・・・」

「じゃあ仮にタイプゼロファーストを回収しても殺されんのかよ！
？」

「それはないだろう、再調整でカプセル行きだろう。そうでなくてもこのままでは管理局に捕らえられるだけだ」

チンクは、それと言いながら諦めたような視線を背後から爆走してくるスバルに向けた。

「あ、ああ！」

スバルは目の前の光景が信じられなかった。戦闘機人三名、そして血塗れで倒れるギンガとエピオンと聞かされていたモビルガジェットに圧され始めた一光の姿。

茫然とした、三人がこちらを見ている。スバルの中で怒りが爆発し、瞳は金色に変化。足元にも戦闘機人特有のテンプレートが展開される。

「ギン姉を返せええええ！！」

思いつきり拳を引いて、スバルは自分のIS・振動破碎を使う。三人が動かないのに何かが吹っ飛んできて、その何かをスバルは埃でも払うように撥ね退けるとビシャツ！と鮮血がバリアジャケット、スバルの顔にかかった。

「ナイスだ………スバル。」

顔面の左反面は出血で真っ赤、目も開けていない状態の一光が^{ヘヴィ}大剣を杖代わりに立ち上がる。ソレを見て、戦闘機人三人が、動いた。

「ッ！！」

スバルがすぐに構えを取る、しかし、三人がすっ飛んできた。倒れているギンガを残し、赤い剣士がゆっくりギンガに歩み寄る。

「タイプゼロ・ファーストにセカンドが揃いましたか。しかし、美

しくない！剣を扱う物ならもつと潔く散るべきではないか！？」

「煩い……………一太刀くらいで良い気になんな！未だ、これからだ……………うっ！」

「動くな！左腕の骨は砕けている！」

チンクが叫んだ、それを聞いてスバルは一気に冷静になった。左腕の粉碎骨折、それは間違いなくさっきの一撃だ。

「大丈夫……………ではないが、まだ片方ある」

「無茶っすよ！」

「何時もの事だ……………」

「バカ！死ぬつつつてんだよ！」

「さあな、俺は悪運強いんだ……………」

左手と右手を合わせる様な仕草で、一光は今持てる最大威力の魔法・我龍双煉掌を発動させた。しかし、両手で打ち出す青い熱球は右掌に収まると一光は倒れる様に跳んだ。

「醜いな、そこまで追い込まれて尚も向かってくるか！」

合わせるように地面を滑ったような移動を始めたレオードと一光の間合いは一気にゼロになる。勢い任せの我流双煉掌がレオードの左手の甲を捉えた、大したダメージにもならない。が、スバルの一撃がエピオンの顔面装甲を砕いた。

「お、おお！」

二歩、三歩と後ずさるレオードにスバルに続いたノーヴェが蹴り、ウェンディがエリアルショットの雨を見舞った。

「おお、おのれ！姉らは裏切るといつのか！？」

「ドクターに伝える、私たちは自首すると！」

極めつけはチンクがランブルデトネイター仕込み・スティンガーを投げつけた事。

それがレオードに高い精神ダメージを負わせたようだ。

よろめいた隙に立ち上がろうとすると左腕の感覚がない。かなり不味い。今まで以上の無茶をしてしまったらしい、腕切断とかマジ笑えないからな。

『ほんつとマスターは頑丈ですね』

「嫌い・・・」

セイグリットに言い返せる内は大丈夫だ。

そう思える一光だった。

「か、一光さん！」

顔だけ動かしてみるとギンガが脇にいた。

押さえていた傷口すら忘れてギンガは一光を起こす。

同じ左腕が機能しない同士だな、なんて一光は思った。

「どうしてこんな無茶を!？」

「だから、いつもの事……」

「そうじゃありません!」

ギンガの叫びに眉をひそめる、一光としては今にも倒れそうなくらい疲労している。加え、ちらりと見えたレオードの素顔は何故かアイツだった。

確認する術がないから今は保留しよう。

「彼女らの言うとおり、私……は戦闘機人です!人じゃありません!？」

叫び続けるギンガにデコピンした一光は痛みで絶句した。

よくよく考えると左手って二、三回は明後日方面に曲がつてんだ。そらぁ激痛だよ。

「イ、イ、ッ!同じ事、言わせんな。ギンガはギンガだ、戦闘機人だろうが何だろうが変わらん」

「でも!」

「それよか、化け物は目の前にいるだろ」

食って下がるギンガに一光は自嘲気味に呟いた。

「違うない」

「だな、お前はバカだよっ」

「そうツスね、敵も助けるなんて」

その呟きに笑みを漏らしたのはチンクとノーヴェとウェンディだった。戦う事しか知らなかった少女たちは変わった、どこか雰囲気之和らいでいる。

「ギン姉！一光さんも大丈夫！？」

「アガアアツ！！」

スバルが駆け寄るなり一光の左腕に膝をぶつけた。わざとではないだろうが、一光は当然激痛で呻いた。

「少し辛いかな。ところで、スバル？」

「何？ギン姉」

「一光さん、何で骨折なんてしているの？」

「うっ、それは……………」

「タイプゼロ・セカンド、ソイツがIS発動状態で埃みたいに払ったんだよ」

ノーヴェが言葉を詰まらせたスバルに変わり、あっさりと暴露した。

「ごめんなさい！」

スバルが深く頭を下げた、一光は怒るでもなく溜息を吐く。

「いや、構わない・・・生きていれば癒えるしな。仮にアミタがギンガみたいな目にあつてたら俺も分からないから、後例えキミらやナカジマ姉妹が戦闘機人でも俺にとっちゃ可愛い子ちゃんだよ、卑下することはないんだ。しっかり胸張って歩け・・・」

ずるっと寄りかかっていた壁からずり落ちるように座り込む一光。

「やっと追いついた！・・・って、え？」

「どうなつて、カズ君!？」

追いついたのはとティアナはイマイチ状況が把握出来ず、なのはは満身創痍の一光に仰天。

緋色は大した損傷もなく、ガジェットを殲滅しながら合流を果たしたフェイト達と共に機動六課を目指していた。

通信は相変わらずノイズしか返ってこない、緋色も嫌な二択しかぜ口は導き出さない。

皆殺しか、全損。後者はよく分らないが前者はダメだ。そう思うと自然とスピードが出てしまう。

「先に行け！」

そう叫びながらバスターライフルを放つと何かを撃ち落とした。

「大丈夫なの？」

フェイトの問いかけには答えられない、次に破損したら全快は無理だし最悪撃墜される。

「ああ」

「二人は六課に向かって、ここは私達で抑える」

フェイトが肩を並べた、緋色はライフルを構えてじっとしている。

キャロは渋ったがエリオの一声にフリードが従う。

「貴方もそちらなんですか……」

トーレの口調は酷く残念そう、セツテは掌を緋色に翳して動かない。

「黙れっ！」

フェイトが叫び、緋色は再度シンクロを行う。

「『任務………開始！』」

「いえ、終了です。貴方の撃墜によって」

セツテが呟いた。同時に緋色を後ろから強襲する刃が鈍い光を放って迫る。セツテのブーメランブレード、緋色はセツテのIS特性を知らない。先に撃ちとしたのも二振りあったブーメランブレードの一振りだ、一光の様にツネイ相手を観察して戦うなんて疲れる事はない一撃必殺主義の緋色にとって先の一射で二振りとも仕留められなかったのは致命的だった。

「『フェイトさん、だから行けって言ったんだ！』」

フェイトの背後にはネイキッドが同時に禍々しい魔力の渦を収束砲に変えて放とうとしている、タイムラグは0.5秒差。ゼロの予測通り最後の最後で緋色も捨て身の一撃に移る。

図太い閃光が、フェイトの眼前を掠めるような近さを迸る。緋色の叫びを聞いてフェイトは僅かに身を強張らせた。地上本部付近でトールとセツテが避けた閃光が爆発を量産する、ネイキッドは収束砲・エヌマ・エリツシュを放って相殺を試みようとしているが無駄な足掻きと悟ったトールに救助された。

フェイトはこの間に脱出し、エリオとキャロを追う。

緋色は落ちながら僅かに口の端を持ち上げた。

本当に最悪の未来を回避出来た、これで良い。

そう思いながら水面に叩きつけられた衝撃で意識は耄り取られ、ブラックアウトした。

フェイトがエリオとキャロに追いついた時には、二人は撃墜されてエリオの意識はなく、キャロが抱くように機動六課隊舎裏にいた。

暴走するヴォルテール、そして機動六課からはヴィヴィオが拉致され、隊舎も全損。とても機能できる状態ではなかった。

予言は覆らず、地上本部は崩壊した。機動六課も言うに及ばず壊滅状態、管理局の敗北である。

再起と自覚

焼け野原が広がっていた。

見覚えのあるオブジェ、それはミッドチルダに来る前に見た夢の光景だ。

一光はただ頭を振る。

そこに倒れる人々が何気なく見てきた管理局の武装隊メンバーと一致したからだ、何度か顔を合わせて訓練した。現場で口論になって、突き放すように言った事も覚えている。

「予知夢だつて言うのか？」

そうだ、カリムの預言を聞いて、はやてがキーパーソンと言ってからこの光景を忘れようとしたのではないか。どうしようもなく不安で、不安に押し潰されそうな自分を保つ為に忘れようとした光景が現実になった。

そこに転がる死体、その先にいる若い研究員……ジェイル・スカリエツィだ。忘れるはずもない犯人の顔と戦闘機人たちだ。

引き換えに、目の間に落ちてきたモビルガジェット……否。モビルデバイス・ストライクは無残に大破し、左腕が肩から切り落とされ、胸部には装甲を切断した切り傷が、背には爆発の痕がある。続いて落ちてきたのは緋色、ウイングゼロだった。

白亜の天使を思わせる翼は左翼がなく、右肩の装甲は弾け飛んだの

かない。顔面装甲も亀裂が走り、中身を露わにしている。そして、背後には満身創痍の機動六課の面々……拒否したくなるような現実が広がっていた。否、このままでもっと酷くなるのではないか？

「……さ……」

僅かに暗雲から光が差した、何か聞こえる。

「……に……さ……ん」

そうだ、このまま死ぬなんて出来ない。

「カズ……兄……さ……ん」

ミッドに飛ばされた、それには多分、意味がある。まだやるべき事がある。

「一光兄さん!!」

目の前には何故かアミタがいた。

天井は白い……どうやら、気を失った後すぐに病院に搬送されたらしい。薬品の臭いが鼻を突く、アミタの他にもはやてと緋

色がいる。緋色も腕に包帯を巻いている辺り、ただでは済んでいない。

「どうやら、死に損ねたな。齊藤」

緋色がそう言った。機動六課の殆んど全員が負傷し、病院送りになったらしく病室のベッドは視た顔で溢れている、ギンガも確認出来たから、レオードは撃退できたのだろう。

「あれ？おま……そうだ！あの後は！？」

起き上がりそうな勢いで聞くとはやては真剣な面持ちで答える。

「カズ君と緋色君のおかげで人員に出た被害は多分最悪は免れたと思う。戦闘機人の襲撃は続いとる、それに関してやけど投降してきた子もおるんよ。」

緋色が廊下に誰かを呼びに行く、アミタは入ってきた四人を睨んでいたが一光からすれば驚くメンツだった。

「目を覚ましたか」

「無茶をするからツスよ」

「その、悪かった」

チンクとウェンディ、ノーヴェの三人だ。しかもウェンディにいたっては悪気がないのだろうが開き直った感すら感じられる。遅れてもう一人入ってきた。

「お、アンタがチンク姉達を説得したって言う人!？」

最後の一人は、何と云うか野次馬?と言うのが一光の感想を抱く。

緋色は苦笑し、アミタは、親の仇でも見る様な眼だ。

「この子たち、四人は齊藤に説得されてと言ったんだ。因みに血だらけのお前を運んできたのは、その赤髪の子だと」

「せやから、ウチからすれば敵を説得って交渉人の才能あるんとかやう?って思ったくらいや」

「私からすれば、いくら正しい教育を受けてないからって一生!許せないと思う!」

アミタがはやてに続く、一光が上半身を起こすとまるで充電ケーブルの様に点滴の管が伸びている。左腕はしっかりギブスで固定している、レオードに貰った一太刀の傷も当たり前だが治療されている。

「それについては弁解しない。事実だ」

チンクが他三人を代表するように答え、頭を下げた。それでもアミタはムスツとしている。

「てか、アンタ誰だよ?」

イラついたのかノーヴェが少し口調を強めた。いくら何でも不快に感じるだろう、今のアミタの態度は。

「妹や、カズ君の。」

「そりゃあ・・・・・・・・悪い」

はやてが答え、ノーヴェが縮こまる。

「状況は、最悪か・・・・・・・・」

「それがそうでもない、俺もウイングゼロもまだ健在だ・・・・・・・・お前も。」

一光の呟きに緋色が答えた、緋色はただ落ちただけだと言いたいのだろう。

潰えていない、予言の閃光はまだと。

「そうだな、はやて。現状で仕事は押してないのか？」

「ハアツ・・・・・・・・カズ君、なのはちゃんに負けないくらいの仕事中毒やで？」

「そうかもな」

そのやり取りに緋色は溜息をついた、多分死んでもコイツはこのままだ。

チンク達は哑然とした、特にノリで投降したNo.6・セインは「普通、身体の手配しない？」とかチンクに聞いている。アミタは呆れた、隆正達から聞いていた以上に一光は仕事中毒だ。

「それと私も六課に参加する、こんな状況じゃ戦力は多い方が良く

から！」

そう言うとはやとアミタは病室を後にした。投降組は緋色が先導して退室し、再び静かになる。

アミタは色々と手続きが必要なのだろっ、棚にある書類に気が付いた。

メモ用紙に「襲撃後の被害状況の詳細、置いておくね。」と書いてある。

一光は暫く、落ち込んだ。報道機関から見れば、敵陣に真っ先に飛び込み、局の重要人物達の避難する時間を稼ぎ、瀕死に追い込まれながらも仲間を救った功労者とミッドの新聞は騎士・カリムの予言をも紙面に上げて緋色と一光を持ち上げている。

（何が功労者だ……）

家族を失う現実に向直した、『こちら』の家族の存在を知るまで心の隅で感じていた孤独感アミタやなのは達のおかげで今は感じない。

（結局、誰も救えない……）

ヴィヴィオが拉致された、自分を慕う少女を救えなかった。家族がない、人の手で生み出されたヴィヴィオはどんな気持ちで今を過ごしているか？考えるだけで辛い。

（少し前は助けを求める側だったのに……こんな事を考えるなんて、変わるもんだな）

自嘲するように天井を見上げた。最悪じゃない、緋色の言うとおり、今度はこっちの番だ。

「セイグリットは、無事かな……」

『大丈夫ですよ、マスター』

セイグリットの音声が聞こえ、何処からかと辺りを見渡す。

セイグリットらしいデバイスは当然見当たらない。

『ここですよ、今度は目でも潰れましたか？』

セイグリットはスバルに運ばれてきた、ギンガと初老の男性も一緒だ。

「ギンガ、間にあっただな」

スバルとギンガは目の前にいる一光が弱々しく見えた。ギンガを助ける為に火中へ飛び込んでいった力強さはなく、今にも折れてしまいそうな虚勢の笑顔だ。

「貴方は？」

「俺はゲンヤ・ナカジマ、二人の親父だ……兄ちゃん。ありがとう！」

一光は自己紹介の後、いきなり頭を下げたゲンヤに驚いた。

「何ですか、いきなり」

「ギンガを、娘を助けてくれて、済まなかった」

「俺は当たり前のことをした、だけです。」

「それにこの子達を受け入れてくれて、だ。」

ゲンヤは、襲撃後になのは達にギンガとスバルの出生について語った。

なのは達も受け入れた事だが、ミッド全体の人間が一光やなのは達と同じとは限らない。

「俺は、思ったことを言っただけです。それに思いの外、大事な者を奪われた」

『なら、奪い返しましょう。』

言葉を選んでいたゲンヤよりも早く、セイグリットは言っ。

『マスターはガムシヤラに突き進んできました。私はマスターが立ち直る、一人でも助けに行くとします。』

皆が、言葉を失った。

しかし、スバルとギンガだけではない、なのは達もそういう一光に

救われて、惹かれてきた。

『どうせ、力があっても救えないとか悩んでたんでしょ？シグナムに殴られますよ、自惚れるなって。』

「……お前、本当にデバイスか？」

『何に見えます？』

スバルから受け取ると一光は決意した。

なのはようやく仕事を切り上げることが出来た、手には全損した隊舎で見つけたヴィヴィオがお気に入りだったウサギのぬいぐるみを持っている。

空を見上げたなのは不安げな表情だった、暗い空はまるで今の心情を現しているように思える。

「なのは……………」

今、機動六課は大半の人員が入院している。その為、なのははスバル達の見舞いに来たついでに屋上に来ている、暫く姿の見えないな

のはを心配してフェイトも屋上を訪れた。

「フェイトちゃん・・・・・・・・」

「なのは、少し休まないと持たないよ？」

「フェイトちゃん・・・・・・・・私、ヴィヴィオを助きたい！あの子、きつと泣いてる！今すぐにも助けに行きたいよ！！」

なのはの悲痛な叫びをフェイトは受け止め、そして言う。

「なら、助けよう！二人で！！」

肩を掴んで言ったフェイト。もう一人、助けると決意した人間がそれを訂正する。

「三人で、だよ」

フェイトは血相を変えた、数日間意識不明だった一光がいたのだ。まだ動きまわれるとも思えない、無理をしてる様にもみえる。

「カズ！未だ動いちゃ・・・・・・・・」

「こんな状況で寝ていらるか。傷の大半は癒えてる・・・・・・・・」

そうは言っても左腕は完治してない、嚴重に固定したギブスが骨折の具合を物語る。

「カズ君、無理しないで・・・・・・・・」

「なのはがそれを言いますか、助けるんだろ？三人で、ヴィヴィオを。なら、なのはが倒れちまっちゃあ意味がない」

一光の瞳には強い光が宿っていた、気丈に振る舞っても精神的に強いダメージを負ったなのはが心の内を叫んだように一光は今まで気付けなかった物に気づいた。

人が強くあれる物に。

陸士108隊の整備課の一室を借りて緋色はウイングゼロのメンテをしていた。

脇のカプセル型メンテナンスシリンダーには役目を終えたストライクがある、中身無い鎧のようにフェイズシフト装甲が抜け落ちたメタルグレーの装甲には胸部に中まで達した切り傷、左腕部切断と損傷も酷い。

『マイスター、休養を』

ウイングゼロは、緋色に休むよう促す。

「ああ、大丈夫……」

緋色は奇跡的に軽傷だった、それもこれもウイングゼロのおかげだ。その分、前線への復帰は一番早く、数回程防衛戦に参加し、戦果を上げた。

そして、ネイキッドの正体もつかんだのだ。

「明日の会議、話さないとな……」

緋色は突っ伏して意識を闇に落とした。

チンク達は病院の廊下を歩いていた。

先導するアミタは肩越しに振り返り、横にいるスバルに問う。

「兄さん、この人たちまで守ったの？」

「うん。赤い悪魔みたいな……レオードって相手から、それとごめん」

「何でスバルが謝るの？」

「一光さんの腕、私のISで……」

「その事は良いよ、兄さんならそう言うから」

スバルが目を見開いた。責められると思っていたから。

「信頼しているのだな、あの男を」

チンクが呟く。

「当然、兄妹だもの」

そう、言い切るアミタがチンク達には羨ましい。管理局に協力すると決めた以上、スカリエッティ陣の姉妹とぶつかるのは必然、それを考えると三人の心境は複雑なのだ。

英雄王の提案

翌日、次元航行艦・アースラのブリーフィングルームには本部壊滅後に初めて前線メンバーが全員揃った。それに加えてチンクを始めに投降したナンバーズがガジェット・モビルガジェットの所持数とスカリエッティが取るであろう策を予測し、話している。

目下の目的はスカリエッティの逮捕及び高町一等空尉の保護児童、ヴィヴィオの救助。

「恐らく、戦闘向きでない者はドクターの身近にいる。」

チンクが配置の予想を話す、ネイキッドは1人で一大隊と同等の火力を持つ。レオードもモビルデバイスと言う武器を使用する代わりに一騎当千の実力者だ、それは地上本部襲撃の際に割れている。

「逆を言えば、本丸は手薄……か」

「勿論、ドクターのことだ。何か秘策があるのだろう、私の記憶する限りではネイキッド、レオードは拠点に赴くことになっていた。」

一光の弦きを聞いたチンクが言う。

「そうなると防戦一方の他の部隊が心配や、AMF下の戦闘になれてへんから長くは持たんやろし」

はやてが唸る。はやての言うとおり、居住区を最終防衛ラインに設定して交代でガジェットの迎撃に当たる魔導師も多くない。

戦闘機人との戦闘は避けるべきだろう、ガジェットでも持つかどうか際どいのには戦闘機人……いや、ネイキッドやレオードなんて論外だ。

「ま、ダメ元でやるのも良いだろ。こうなりや打てる手は全部打つ。」

緋色が言う、今の管理局は痛手を負って十分に力は発揮できない。前線メンバーも怪我人だらけの六課はそれでも挑むのだ、打てる手はすべて打ち、出し惜しみする余裕はない。

「その通りや、その為の会議やし……………」

「なら、一つ言つて良いか？」

遮った一光がはやてに尋ねる。はやては頷いて続きを待った、一同も真剣に待つ。

「正攻法は捨てよう、チンク達の情報を生かさない手はない。管理局の理念がどうかは特にな」

不敵な笑みを浮かべた緋色と言い出した一光は、既に頭の中で組み上がったポジションを説明しようとする。しかし、勿論異を唱えようとしたはやて達に改めて一光は言う。

「正攻法を捨てるってどういう意味や？」

それについてはなのはもフェイトも同意見である。

「別に、精鋭による一点突破。考えているメンバーは物理破壊に長

けたヴィータ、六課一のスピード戦に長けたフェイト、あらゆる戦況を覆しかねない砲撃手のなのはだ。ヴィヴィオ救助はなのはとフェイトに担当してもらいたい」

一光は言いきる。当然と言えば当然だが一光は左腕を使えない、使えに事もないが長くは戦えないから戦力として数えるのは危ない賭けだ。本来ならヴィヴィオの救助に立ち会いたい一心なのだが。

「フォワードとアミタには対戦闘機人を担当してもらう、はっきり言ってチンク達の抜けた穴はレギナで補ってくるだろうから、敵の対策はしっかり教える。俺と緋色はネイキッド、レオードの鎮圧に当たる。シグナムにはゼストを頼みたい」

騎士・ゼスト、その存在は幾度か確認されている。一光も遭遇した事があるし、地上本部襲撃の際にヴィータが激突。グラーフアイゼンを破壊し、逃走した。

「齊藤、お前は大丈夫なのか？」

「何がだ？シグナム」

「その身体で戦えるのかと言う事だ」

シグナムがはっきりと言った。

左腕が使えない、これは痛手だ。力の半分も出せないだろうし、この対応もそうだが死角が大きすぎる。

「心配するな、問題ない。」

一光がそう言った瞬間、モニターが反転した。

誰もが驚く中、予想外の人物が映しだされる。

『やあ、機動六課諸君』

ジェイル・スカリエッティ、白衣をマントの様にたなびかせて脇の玉座にはヴィヴィオが座っている。

「何の様だ？スカリエッティ、挑発か？」

緋色は一光の対応に思う所があつた、キレている。それも激怒だ、冷静さを保つのに必死だと見て取れる。

（あのバカ！見事に挑発されている……怒鳴らないだけ成長したのか？）

学生時代はこの時点でどなり散らしていた記憶を思い出してそう思う。

『どう取ってもらっても構わないよ。実は僕じゃなく英雄王の方が話があるそうでね、ジャックさせてもらったよ』

脇から躍り出たネイキッドが見下すような感じで話し出す。

『貴様らは反旗の準備でもしているのだろうか？その為の会議か？』

「世間話なら切るぞ、倉岡。」

『ほう、やはり私の肉体を支配していた人格を知っていたか。良か

ろっ、雑種！今ゲームを思いついたぞ』

「そうか、さぞツンランゲームだろうな。」

『そう言っな。雑種よ、この小娘を助けたいのだろう？』

「……………ふざけんな！」

（駄目だ、これじゃ交渉も糞もねえ……………）

緋色がブリッジに逆探知を要請し、はやてもソレを容認して今は時間が必要だ。しかし、一光は今にもキレそうだった。握りしめた拳からは血が垂れ始めている。

『私の陣営と貴様らで決闘をしよう。二対二のツーマッチだ、それまで進軍は停滞する。貴様らが勝てば小娘は解放しよう』

「ふざけるな！ヴィヴィオをそんな事に掛ける事なんて出来ないだろう！！」

続けてフェイトも叫んだ。しかし、そこで一方的に通信は切られてしまった。

「カズ君？」

ヴィヴィオの映像が出た瞬間、なのはは目を見開いて硬直してしまった。一光は激しい怒りを覚え、それが見て取れた。

「ツーマンと言っていた……………はやて、俺が出させてもらう。」

「ええよ。どういう目的かは分らんけど、あのネイキッドちゅう奴はカズ君を叩きのめす事が目的やろうし、勝つ見込みあるん？」

はやては六課に一光を迎えてから今まで解ったことがある。

一度決めたら何が何でもやり通す、齊藤一光はそう言う男だと。

勿論、勝つ見込みがあるからこう言うのだろうか？ある意は始めっからネイキッドだけは譲らないつもりだったのか。

「よく知った手合いだから、あるにはある」

一光は厳しい面持ちで言う。よく知った手合いと言うことは裏を返せば、相手にもこちらの手の内はバレているという事。

「それじゃあ、こっちの手の内も・・・」

なのはか言い掛けた事は一理ある。

「大丈夫だ、倉岡なら苦戦するだろうがネイキッドにそれは有り得ない。」

「ねえ、さっきネイキッドは倉岡って呼ばれて元の人格って言っていたよね？それはいったい誰なの？」

フェイトが尋ねると一光と緋色は深い溜息を吐いた。その理由をチンクは知っている、あの時の出来事がこの三人を対立に向かわせた、その当事者だったから。

「私からも質問がある、齊藤と藤原はあの素体と知り合いだったのか？」

なのは達も思い当たる事件がある。地球での強化ガジェットの稼働実験と見られた結界発生、巻き込まれた民間人は二名……の筈だ。

「ああ」

一光が短く答え、緋色が続く。

「チンクの言う素体はフルネームで倉岡卓也、俺達の親友だ」

「キミは、随分とゲームが好きらしいね。」

スカリエッティはコンソールをイジりながら言う。

「そうだな、我も内に潜む奴の希望を潰したいだけかも知れん。」

ネイキッドはふっ、と鼻で笑うと何かを握りつぶすように拳を作る。

「彼の肉体は今やネイキッドの肉体になった訳だが。ふむ、消えて

いないのかい？」

「うむ、実にしぶとく抵抗する。余程、我が分身の動揺で味を占めたようだ。」

ネイキッドの、一つの体の中で二つ人格が主導権を得ようと常に争っている。倉岡卓也と後から上書きされたネイキッド、幻想をレリックというロストログアで現実に変えた倉岡卓也とは異なり、レリックの副作用とスカリエッティの調整で生まれたネイキッドが圧倒的な能力差で倉岡から主導権を奪い、最初の襲撃に出た経緯がある。

それまで不安定過ぎる精神状態で監禁されていた成果とも言えるのか倉岡は衰弱していたからかネイキッドが主導権を得るのに時間はさほどかからなかった。しかし、ネイキッドが好き放題している間も倉岡は消えていなくて、虎視眈々と反撃の機を窺っていた。

それが昨日のレオードが思いもしない姉妹たちからの攻撃で揺れた事とネイキッドの視界を通して親友たちが奮起する様を見て、ネイキッドにも強い精神ダメージがあればと思いついた。しかし、問題はどうやって強い精神だエージを与えるか？それをクリアするにはネイキッドが潰さねばならないと思ってる一光や緋色達に賭けるしかない。二心同体であるが故にそれはネイキッドにも知れる事、そして傲慢で自信家のネイキッドはゲームを仕掛けた、ここまでは倉岡卓也の作戦通り、後は親友たちが倒してくれる事を願うだけだ。

「何、雑種ごときに後れを取る我ではない。貴様の夢も実現させてやろう、実に面白そうだからな！」

その頃、ナンバーズの完璧すぎる連携にズレが生じ始めた。

トーレはセッテとよく行動を共にする、それだけでなくセッテの教

育係でもあった。その影響もあってセツテはトーレのように苛烈で一途だ、余分な要素をとことん省かれた最終稼働組でナンバーズ内で一番完成度の高い彼女は変わった。

「どうした？」

「いえ、何でもありません。トーレ」

「顔を見れば解る、敵のことを考えていたのか？」

トーレやクアットロ、稼働歴の長い者は離脱したセインやチンク達を敵と認識できている。しかし、稼働歴の短い者は割り切ることが出来ていない。今他の姉妹はどうか知らないがセツテは明らかに悩んでいる、機械的だった妹の進歩を喜ぶべきか、叱咤すべきか。

「それなら、確かめると良い」

スカリエッティが間を見計らったように現れた、確かめるとは？と疑問を抱いた。

敵は倒す、ただソレだけなのに。

「カズ君、いつから友達って解ってたの？」

なのはは一光に尋ねる。

「襲撃時にレオードの素顔見てまさかと思ってな、カマ掛けてみた。まさか確信に変わるとは思わなかったけどな」

セイグリットに追加するカートリッジシステムの調整をしながら答える一光はいつものように言う。

「そう、なんだ。強いんだね、カズ君は」

何処かいつもの元気ツコで仕事中毒と言うのはアレだが、なのはは落ち込み気味だった。

「いやいや、俺は弱いさ。それに一辺殺し合うくらいの真剣勝負もたまには悪くない。」

「そう言うものかな？」

「そうだって。なのはがフェイトにしてあげたように、あのバカの目を醒まさせるんは俺の役目だ……」

『それはヴィヴィオの元に貴女を送り届ける口実でしょ、マスター？』

「っせえな！セイグリットは黙ってる」

なのはが笑いを漏らす、いったいこのやり取りの何処が面白いのか解らない。

「そうだね、カズ君の弱点みつけたかも」

そう言っただのは去る、何だったのだろうか？

追って展望ブリッジに入るとなのはは微笑みながら振り返った、空は事態にそぐわない綺麗な星空。

「三人で見たいね」

「ん、ああ。そうだな」

肩を並べ、一光はそう答える。

少し離れた柱の影でフォワード一同はステルスミッションを開始した、衝動的に。

「何でちよつといい感じになってるのよ？」

「知らないよ、なのはさん……まさか!？」

「そらあ、ヴィヴィオちゃん家につれてきたしねえ」

ティアナ、スバル、アミタが茂みの影に隠れるやエリオキャラロもジツと隠れて見ている。組み体操の様な微妙なバランスで今の半扇陣形を維持する辺りが凄い。

「なのはさんはユーノさんの事を好きなんじゃ・・・」

エリオがフェイトから聞いた事を呟く。

「それじゃ、のりかえったって事？」

「かもしれへんなあ」

「八神部隊長!？」

キャラロの呟きに答えたのははやて、緋色が間に合わないだろうが専用モビルデバイスを作り始めた事を伝えようと来た所をこの覗き見一味を発見したのである。

「なんやかんやでカズ君、隅に置けんなあ。これはこれで脅し文句に使いそうや」

「脅しって何させる気ですか？」

「そらあきまつとるよティアナ、管理局に留まって・・・フェイトちゃん、黒いで？」

「うん、ちょっとね。なのはに差をつけられた気がしてね、気にしないで？」

「流石、最速!って何でフェイトさんまで？」

「そうだぞ、決戦前だったのにたるんでねえかアイツ？」

「あらあら」

「テストロッサ、殺気を消せ。うむ、少しカツでも入れてやろうか？」

何気に隊長陣及び医務官ことシャマルまで集まっている。緋色がいればまた壊れてしまっただろう、うん。

「何してんだ？お前ら」

そこへ来たのはナンバーズことノーヴェ達である、今はチンクがない為、ストッパーがない暴走すると大変そうなウエンディもいる。

「やや！あれは熱愛中ツて奴ツスカ！？」

「わあ！ウエンディ声大きい！！」

跳びかかるスバル、しかし時は遅し。

「何ってんだよ、メインメンバー総出で……」

恥ずかしいのか顔が赤い、そしてギブスをつっているカバーが外している一光とレイジングハートを片手に小悪魔モードなのは。

「みんな、少し御話しようか？」

その夜、決戦前夜と言っのになのはとフェイトは長らく語り合った

英雄王の提案（後書き）

さてさて、前半やつと終わるかな。次回から最終決戦です。

決戦の蒼空

通信を終え、ただ内面の闘争に戻ったネイキッドは轟音で現実引き戻された。

「無粋な奴だな」

視線の先には槍を構えたゼストがいる。そして、ここにきた理由もネイキッドはよく知っていた。

スカリエツティの命だと戦闘機人N o . 2へ指示を出し、独自の意志で駒を消したのだ。

利用価値の無くなったレジアスの死、それに激怒してかつての友であつたゼストが乗り込んできたと言うところだろう。

「もう一度、死ぬか？道化よ」

ネイキッドが剣・エアを抜く。

「ならば、貴様を道連れにしよう！」

静かに幕の開けた過去の局員とネイキッドの戦い、結果は明白だつた。

「スターズ05・準備完了。」

一光は小さく呟くと新セイグリットを強く握んだ。

新たに白い籠手が追加されたジャケット、全体的に籠手はリボルバーナックルに近いフォルムで、セイグリットに追加された大剣と大型拳銃を併せたヘルヴィフォームが追加された。

「スターズ01・02、準備完了！」

当初の予定通り、なのはとヴィータ、フェイトが突入する。

そこにヘルヴィフォーム搭載で火力の底上げを計った一光が加わると大気中のハッチ前でスバルがフツと呟いた。

「何だが、あのメンバーに勝てる人っているのか？」

本気なのはがどれ程かは撃たれ掛かったティアナも解る、ヴィータとフェイトだって引けは取らないだろう。

スバルが言っているのは一光のことだ、いつもなら負けてもヘラヘラして勝ちに拘ることはない。しかし、今は違う。

「さあ？ 私達も気を抜けないのよ、余計なことは考える事はやめなさい！」

「とは言いましても……あそこだけ別次元ですよ」

確かに、とティアナも頷いた。隊長陣を中心に戦争でも行くのか？と聞きたいくらい圧迫感が漂っている。

「決闘だからかな？」

キャロが首を傾げる。

「兄さんが本気で怒った時、無言になるんだって」

アミタが言う。

突入メンバーよりも周りが緊張する時間になった。

指定された聖王の間、そこまでの道程に戦闘機人は配置されていた。

最終ラインをトーレとセツテコンビ、

見晴らしがよい一直線の廊下にディエチ、そして管制に最深部で指示を出すクアットロ。

「この配置で良いのかい？」

スカリエツティがネイキッドに問う。

「ああ、雑種が本気であれば突破できないわけがないからな」

数人はスカリエツティのバック、No.1・ウーノは勿論フェイクにNo.2・ドゥーエ。それでも本格的な戦闘型は何体か動けない者を除いても数では分がある。

動けなくなった理由、それはスカリエツティが新たに用意したモビルデバイス・ハルファスの使用結果だ。

テストのつもりが姉妹を行動不能にしてしまったのだ。

「ドクター、ネイキッド。俺は攻めて良いのですね？」

「ああ、好きにしまえ。」

漆黒の不死鳥ハルファスが飛翔し、飛び去った。

突入に差し掛かり、本局の部隊が苦戦を強いられていた。

一光やなのは達はそんな戦場のど真ん中を中央突破している、緋色がバスターライフルで幾つも爆発を量産。ガジェット群に出来た穴

から突破しているのだが緋色は何か感じ取ったようにサーベルを抜くと白亜の翼を羽ばたかせて黒い閃光と衝突した。

「完全に飲まれやがって、齊藤！」

「任せるぞ!？」

「任されてっ！」

なのは達は一切口を挟まなかった。緋色がレオードを抑える、これは作戦でもあったし賭でもあった。

仮に艦内にレオードがいるなら緋色は不利になる、長身のバスターライフルが災いと呼んで全力戦闘は無理だ。緋色の読み勝ちとなつた心理戦、突入できそうな隔壁には局員数名が張り付き、破壊を試みている。

AMF影響下だけあつて思ふような威力が出せないらしい、一光はヘルヴィから大剣へ切り換えると減速せずに振りかぶる。なのはがそれに合わせて指示を出す。

「機動六課・突入班です、退避して下さい。破ります！」

振り向いた魔導師達が青ざめて退く、AMF影響下でも減衰すること無い馬鹿げた魔力刃が閉鎖ハッチを裂いた。

傷は貫通しているが、人が通れるサイズではない。

「大丈夫、今ので戦力を削る気はないって」

「新人達にそれは通じねえぞ。」

ヴィータがつつこむと一光は、マジで!?!と聞き返した。

つか、新人部隊を取り付かせてたのか。

酷いな、いきなり修羅場に投げ出すか?ま、投げ出す職場とくは知ってるけど。

「それじゃあ、破りますか。」

ぐつと手を引いて、箆手からカートリッジが吐き出された。

「カズ君?」

「なのは達は、温存しといた方が良い。」

「それはテメエも同じだろ!ここはアタシが」

尋ねたなのはに答えると何故かヴィータが食ってかかる。

ソレを無視して、閉鎖ハッチを吹き飛ばした。

三人は黙った、セイグリットを使った一光の『今』の本気を知らないから使える魔法バリエーションも知らない。

一光はカートリッジを使わないでなのはやフェイト、守護騎士と同等まで力を付けていた。モバイルデバイスをメインに使い始めたせいで誤解されがちになっているが手加減をしない分、能力制限の着いた隊長陣より咄嗟の火力は飛び抜けてたかい。

「行くか。」

ディエチは、固有武装のカノンを構え、聖王の間を目指しているのはを狙う。

並ぶ一光となのは、二人の映像がモニターに映っている。

「あの子のお母さん・・・と、お父さんなんだよね」

泣き叫ぶヴィヴィオを監視していたせいか、若干の動揺が彼女を襲う。

「成る程、前座か」

ハッ！とディエチが俯けた顔を上げると蒼白い魔力光が眼前に迫っていた。

何が起きたか今一理解できないままディエチは吹っ飛ばされた、意識を何とか繋いで視線を向ける。

「そん、な・・・・・・・・」

ヘルヴィのセイグリットを肩に担いだ一光がいた、高濃度AMF下にも関わらずエクシースモードで蒼白い電気を迸らせている。

「カズ！無理しないで。病み上がりでしょ？」

追い付いたフェイトが口を尖らせるが、一光は苦笑して流す、なのは武器とディエッジにバインドを掛けて拘束。

「カズ君もヴィヴィオを助けるんでしょ、三人で」

「そう、だな。さてあとちょい！」

青空で幾度も閃光がぶつかり合う。

進行を再開したガジェットをはやてが現場指揮をして、地上本部から、本局から集結した魔導師が迎撃を行っている。

「ウイングゼロ、全体の消耗率は？」

『0・25%、作戦行動継続』

緋色はレオード、いやハルファスを相手にしながらノーマルガジェットも相手にしていた。

レオードは完全にシステムに飲まれている、自我が支配された状態だ。

「障害は、ハ、ハハハッ！」

両翼を広げ、クロスビーム砲を放つ。狙いは手当たり次第、局員とガジェットを交互に撃ち抜く。

「殺るか！？」

『ダメや！』

はやてから通信で却下され、デバイス破壊に移るしかない。しかし、コアが何処にあるか解らないのだ。

魔導師と共通した殺害、すれば鎮圧とデバイス奪取が出来る。しかし、その選択肢はない、局員でなくとも協力する以上不殺で行かなければ。

「『なら！』」

ゼロと同調し、ハルファスの砲撃を縫う様にして避けながら前進する。レオードにはISが搭載されていないと言うチンクの情報を信じてデバイスを破壊するだけだ。

「今度はキミか？」

一光達の前にいるトーレとセツテは臨戦態勢だった。

当然ではあるが、一光は先手を打たなかった。正確には打たないつもりでいた。

「どうしても、ドクターの敵になるのですか」

トーレの問いかけにフェイトは無言で睨み、答えを返した。

「そうですか、ならば排除します！」

トーレが四肢に小さな翼の様な光刃を生み出し、襲いかからんとする刃を受け止めたのは一光だった。

フェイトも目を見張る、なのはを狙ったセツテのブレードは撃ち抜かれ、凍り付いて落ちた。

「一つ聞きたい、スカリエッティは・・・この先か？」

雰囲気の変わった、威圧するような低い声音にトーレは間合いを取り、セツテは衝撃弾を放つを躊躇った。

本能が逃げると訴える、まるでネイキッドと対峙したように。

「だとしたらどうする？」

「押し通る」

一瞬、一光を警戒していたトーレとセツテ、後ろにいたなのはとフ
エイトも気圧された。

トーレと一光の位置が入れ替わる。瞬間、トーレは崩れ落ちた。

「トーレ！」

以前のような機械的ではなくなったセツテはトーレに駆け寄り、膝
を着いた。外傷がないことを確認するとほっとする。

「止めとけ、キミじゃ俺らを止められねえ」

身構えたセツテを見て一光は溜息を吐いた、長く盛大な溜息だ。

「そうだな、良い前座であつた。十分楽しめたぞ！」

声が出た、刹那に幾千を越えよう剣閃が扉から溢れ出る。

「防御陣形！崩したらアカン！！」

はやてが、魔導師達の出来る緋色への手助けが終えた。

はやてと緋色、二人が“ゆりかご”内に突入するには外の制圧は必須だ。ましてレオードの撃墜は最低限の課題、砲撃ばかりするハルファス・レオードに緋色はサーベルで応戦し、肉薄する。

戦闘エリアを限定することで戦場を狭めたのだ、そのかいあって緋色が押し始めている。

「らあっ！」

サーベルがハルファスの片翼を捉え、砲口を潰す。離脱しようとするハルファスに緋色は追い縋り、二撃目を打ち込む。

ハルファスもサーベルで応戦する、僅かな唾競り合いの後に翼から何かユニットをパージする。

『フェザーファンネル！』

360度から絶え間なくビームが放たれ、緋色は目まぐるしく動いて避ける。

『被害レベル増大』

ウイングゼロの警告に緋色はバスターライフルを両手に持ち、回避を棄ててファンネル排除に乗り出した。そうしなければ戦線は維持できない、自身の被弾は自身の保有魔力で修理が出来る。司令塔を落とすわけにはいかない、まして魔導師をこれ以上へらすわけにもいかない。

「『ローリング・バスターライフル！』」

トリガーを引くとともに叫び、閃光が迸る。

スターズは侵攻を開始したガジェットを押し始めていた。モビルガジェット・レギナも一光と緋色が用意した分析データが役に立ち、通常のカジェットと大差はない程楽になっている。

「アミタ、一光さんは何でこんな的確なデータ作れるの！？」

ダガーモードのクロスミラージュをレギナの頭部に突き立て、配置したクロスファイアを放って確実にバインダーライフルを潰す。

「そりゃあ、元祖モビルデバイス開発者だから！」

大剣を振り抜き、^{ヘヴィエッジ}ビームファンごとレギナを切裂くアミタは声を張り上げて答えた。

「何でも良いよ！それより今ので最後かな！？」

スバルがりボルバーナックルに纏わり付いたレギナを引きはがす、一番初めにレギナの猛襲を受けたスバルはティアナとアミタに比べて僅かに被弾は多い。それでも陸士部隊の支援と二人のサポートがあって乗り切った感じた。

「そう祈りたいかな、普通のガジェットなら他の人でも対処利くし」

アマタが荒い息を整えながら、ヴァリアントを銃^{ザッパ}へ換える。各所へ現れると予測されていた戦闘機人は現れない、単に遅いだけかゆりかご内部から出せないほど接戦なのか分からないが当初の予想よりもスカリエティはガジェット主体で攻め入っていた。

「そうね、エリオとキャロの方も心配だし」

「ティアさん！スバルさん！アマタさん！」

エリオとキャロがフリードにまたがって空に居た。キャロは紫髪の少女を抱くようにしているとところを見るとチビツ子対決になったらしい。勝利を収めて合流したのだが、少女・ルーテシアを落としたのは二人ではない。

究極召喚獣すらも一撃で陥落させた最大出力のバスターライフル、その余波がルーテシアの意識にダメージを与えて今に至る。

「エリオ！キャロ！無事だったのね！？」

「はい、多分隊長達の方に合流しましょう。地上本部に向かったシグナム副隊長からガジェットの侵攻情報がきましたし」

エリオ達の方は比較的戦力はなかった、ルーテシア単体、一人でいる方にぶつかった。更に言えばルーテシアにとって不幸だった事にクアットロの洗脳が負荷となり、バスターライフルの余波が決定打となった。

「それにしても恐いわね、これだけ離れているのに余波なんて」

ティアナが緋色の言った事を思い出す。

出来るだけ地上で戦ってくれ、バスターライフルは全力で撃てば作戦エリア内は射程だ。巻き込まない自信はない。

その意味が理解できたティアナだった。

『ダメージ確認、作戦続行』

銃身が拉げ、リペアされるバスターライフルから緋色はサーベルに切り替えてハルファスへ窮迫した。自身のダメージも本来ならリペア出来ない。と言うよりもフル回復は出来ない、文字通りシステム上では一度撃墜されている。

「『おおおおっ！』」

その場にいた魔導師の九割が一度補給に戻っている、緋色とはやて二人だけが始めっから出張って戦局を維持させてきた。

『ハカ、ハカハカハカハカハカ！！』

壊れた様に繰り返すハルファス、デバイスが構成するジャケットの鎧部は激しく損傷し、既に使い物にならない。かろうじて飛行するハルファスに緋色は止めを刺そうと剣を突き立てる。

『破壊、バーニングファイア………』

最後に、ハルファスが燃え上がる。はやてがまさかと危惧した時、緋色とハルファスがぶつかった。

悪夢の対峙

剣閃はなのは達を巻き込むことはなかった。

正確には扉越しに開かれたから剣閃は限定的で通路全体を飲み込んだわけではない。

「危なかった」

「そうだな、倉岡の独断……だろう。」

トーレとセツテを抱えた一光が降り、二人を降ろす。

「何で、助けたのですか？」

「悪いが仕事なんでね、ちゃんと償えよ嬢ちゃん」

セツテに返した一光は駆けていく、念のためとなのはが掛けたバインドは余り意味を為さなかった。戦意がまるでない、セツテには解っていた。ドクターが自分らナンバーズ以上にネイキッドへ力を入れている、いずれ切り捨てられると。

聖王の間、その玉座にヴィヴィオが、左にネイキッド、右にはスカ

リエッツィが居る。

「やはり、突破してきたか。相変わらず規格外な奴よ」

ネイキッドが数年来の友人に話すような口調で言う。

「ま、それが俺だからな。倉岡、自覚させてくれてありがとう、そして覚悟は出来たか？」

「何のだ？」

空間から剣を抜くネイキッドに、一光も大剣に切り換えて互いに一歩前に出る。

なのは達をみたヴィヴィオが再び泣き叫び、助けを求める。

黙っていたフェイトとなのはは声音の変化に身構える、何となくが一光が動くと解る。

「争乱先導罪の現行犯で、逮捕します。」

なのはが告げる、スカリエッツィが醜悪な笑みを浮かべた。

「愛娘を前にして仕事熱心なことだ、キミ達は私を捕らえられると思うかい？」

白衣の下に覗いた左腕は人の物ではない、デバイスを装備している。

「捕らえる、私達はそのために来たんだ。」

フェイトが語気を強くし、バルディシュを構えた。

「ふむ、このままでは数で向こうに分があるね。」

「だったらどうした？」

ネイキッドがスカリエッツィを鼻で笑う。

「聖王を使おう」

スカリエッツィの一言がキーとなったようにヴィヴィオが苦しみだし、虹色の閃光が溢れる。

「おい、スカリエッツィ！」

「キミ達の愛娘、その真の姿だよ。」

閃光はまるで暴風のように押し出す力を持っていた、その力に逆らって一光は突き進む。

ヴィータは満身創痍で進んでいた。

一人で数百を超えるガジェット？型を殲滅し、道を作る。気を抜けばいきなりざくつ！と刺されかねない。

「は、やく・・・ぶち壊さねえと」

ヴィータは任された仕事を果たそうと前に進む。

「騎士・ゼスト・・・・・・・・・・？」

閃光内を突き進んでいた一光は足を取られ、倒れた。すぐになにが足を取ったかと確認すると血塗れのゼストだった。

既に絶命した彼は融合機を抱くように庇う体制で死んでいる。

「そんな事より！」

まずはヴィヴィオの確保だ、一瞬だけ注意がゼストに向いた間に閃光は止み、代わりに誰かがいた。

いや、認めたくないだけでネイキッドと並び立つ少女にはなのを思わせるサイドポニー、ヴィヴィオの様なオッドアイ。

容易にヴィヴィオが成長したような姿と連想できる。

「パパとママを、返せ！」

少女の踏み込みに一瞬反応が遅れた一光が咄嗟に大剣を盾にする。^{へヴィエッジ}

少女が打ったとも思えない衝撃に耐えながら打開策を練る、思いつくはずもない。

「ぐっ！」

「カズ君、ヴィヴィオは任せて」

駆け寄ってきたのはが言う、なのはの瞳は決意に見えていて誰がどう言おうとその意志は揺らがないと思わせる。

「わかった・・・、助けるよ。ヴィヴィオを」

「カズ君も死なないでね」

ああ、とだけ返事をする。一光となのはは全力で互いの相手に向かっていく。

スカリエッティは閃光に紛れて場を離脱した。ソレを追ってフェイトも離脱する。

外周部の戦いに決着が近づいていた。

緋色はアーマーを犠牲にサーベルが貫くのを確認するやにたりと口元を持ち上げた。

すべてのリペアをするには僅かに隙を作る事になる為、必要最低限しかリペアしていない。

頭部左半面は消し飛んでしまった装甲をリペアしている最中、はやてが『ゆりかご』へ向かっていく。

「はやてさん!?!」

「ほな行くで、緋色君!」

はやての後を追って緋色は翼を羽ばたかせた。

完全^{フル}リペア出来ていない分、最大速度は落ちてしまっている。普段ならすぐに追いつくのだが追いつけずにいた。

「っ!予想通りAMFが強いな」

はやてが一人こちる。

「だから、俺の方が速いですよ」

緋色ははやてをお姫様だっこ状態で加速する、あたふたするはやてを無視して先にヴィータの元に向かう、ゼロはアイツの敗北を予見しなかった。

「先にヴィータの所に行きますよ!」

「お願いや！」

二つの火花が散った。聖王ヴィヴィオとブラスター？まで自己ブリストを掛けたなのはが交錯し、ネイキッドが剣殺しの剣・ソードブレイカーを振り抜き、真っ向からセイグリット・ヘルヴィの一太刀が迎え撃つ。

「ぎっ！」

身体が悲鳴を上げた。衝撃で骨は軋み、左腕には激痛が走る。

ソードブレイカーの刀身が砕け、ネイキッドが宙から第二の剣を抜こうとする。ヘルヴィ・銃^{ザッパー}を放って剣を弾く。

「限界か？雑種！」

不意に一光が数発の弾丸をヘルヴィ・ザッパーから放つ。全てがネイキッドの放った刃を撃ち抜き、からからと音を立てて落ちた武器をネイキッドはうち一本、巨大な大刀を拾うと思いつき振り抜いた。

「アホか倉岡、限界は！」

ヘルヴィ・ソードを真下から振り上げて大刀を打ち碎いた。

「超えるためにあるんだよ……」

『死にますがね、マスターがこのまま限界超え続けると』

「うっさいっ」

緊張感に欠けるやり取りではあるが、実に一光とセイグリットらしい。

なのははと言えば、気丈に振る舞いながらもヴィヴィオに直撃させる事が出来ずにいた。

単に聖王モードが強力という事もあるがそれ以上になのはの中ではヴィヴィオを撃つ、と言う事に抵抗があった。

（ヴィヴィオは操られてる、何とか操手を見つけないと！）

ぶつかり合い、手の抜ける相手ではないことを知りながらもサーチャーを放つのは。

「ああああっ！」

そんななのはの思いとは裏腹にヴィヴィオの苛烈な拳が迫った。防ぐにも間に合わない、避けるにも間に合わない。来るべき痛みに備えてなのはが目を強く瞑る。

『拳を向ける相手が違いますよ！』

セイグリットの叫びといつまで経っても来ない痛みと引っ張られる様な感覚になのはは目を開けると殴り飛ばされたネイキッドがヴィ

ヴィオもろともこちらを睨んでいた。そして、何故か自分は一光の腕の中にいる。

「いやはや流石はエースオブエース、こりゃ最凶の親子喧嘩だな・
・・・」

一光の口調は何処となくいつものような軽さがなく、かわりに無理にいつも通りを演じている様に思える。

不意にバリアジャケットを赤く染めた血に気付くのは、それはなのはが流した物ではない。

「カズ君！今のを・・・」

「待った、来るぞ！」

「アゝアゝアゝッ！」

奇声を上げながらハルファス・レオードは“ゆりかご”の通路を滑空し、はやてと緋色に迫った。

撃墜した事を確認しなかった事実を悔やむ間もなく、間合いは狭まるばかりで緋色は舌打ちしてはやてを離れた。

「緋色君！」

刹那、緋色ははやての前でハルファスに取り付かれて床に転がる。

正確には緋色が床に引きずられている。

「ガアアア！」

衝撃と痛みで緋色は絶叫した。ハルファスはサーベルの柄を持つやソレで殴打を始めた。

ブースターは吹かしたまま、片手で拘束して殴打を続ける。

「ハカイハカイハカイハカイハカイ！」

壊れたラジオの様に繰り返すハルファスは今や意志のない殺戮人形、自身の損傷の認識もせずになだ対象物の破壊を実行する。

意思のない殺戮人形がゆりかごの中にいるのは幸いだと緋色は思う、外ならば手当たり次第に局員を襲うだろう。ならば緋色は予定通り、今度こそこの暴走機関車を止めなければならない。

「ぐ……あああつ！」

気合いを進らせてサーベルを抜くと同時に抜き様にハルファスを切れ、アーマーの傷は肉体まで至っている癖に止まらないハルファスに緋色は少し苛立ちを感じると同時に少し恐くなった。

『マイスター、破壊対象確認』

「言われんでも、ゼロ……最後の戦闘だ！」

同時にハルファス以上に質の悪いネイキッドを相手にしている親友は恐怖よりも勝る物があるのかと思う。

白い翼と黒翼の不死鳥がぶつかり合う、サーベルを交えて押し合い、飛び退いては互いに高威力の武装を撃ち合う。

スカリエッティはその様をモニター越しに見ていた、追ってきたフエイトを言葉巧みに追い込み、黙らせた。

「いずれ、壁を破って此处まで来るだろう。さて、キミの判断はどうか？」

フエイトは黙って俯いたままだ、二つのモニターにはそれぞれ戦う仲間の姿がある。

なのはと一光はボロボロだ、ネイキッドも相応のダメージを受けているが二人ほどじゃない。

捕縛さえされていなければ一気に畳み掛ける所、AMFで維持が辛いが何とかなる。

「英雄王の器、彼には期待しているんだ。何せ私の最高傑作だからね」

ソレを聞いて衝撃を受けたのはフェイトだけではない、扉越し間できていたセツテも強い衝撃を受けた。

「なん、だと!？」

「キミはネイキッドがあの子の親友と言う事実を知っているね？」

言葉の続かないフェイトに語り出すスカリエッティ、スカリエッティに予想外だったのは倒されていたはずのセツテがスカリエッティからは死角になる陰に座り込んでいたことだ。

「彼が主導権を得ると私は彼の真の力に引かれてね。それまでナンバーズを主戦力に考えてきたが、彼一人でナンバーズを一蹴してしまったんだ。」

口が三日月のように歪み、笑うスカリエッティ。

「彼はね、私と同じだよ！飽くなき欲望はいずれ世界すら飲み込むっ！彼を完成させるにあたり、娘達には捨て駒になって貰ったよ」

がしゃっ、とブーメランプレードを落として、フラフラと立ち上がったセツテが覚束無い足取りで死角から出るとスカリエッティは僅かに驚いた様に目を開いた。本当に僅かな間だけ。

「ドクター……………」

セツテの目は虚ろだ、精神的にも強いショックを受けている。

「本当、なのですか？」

綻るような口調の問いかけにスカリエッティは言う。

「キミ達には期待していたけど、もう用済みだ。」

瞬間、セツテが倒れた。ダメージの残る身体に無理を強いてきたのに助けようとしていた人から決別された。

フェイトも過去に似た経験がある、だから怒りがこみ上げる。

「貴様ツー!!」

「君が怒ること無いだろう？それともかつての自分と重ねたかな？」

スカリエッティが言った瞬間、背後の壁が吹き飛び、ズタボロのハルファスがスカリエッティの足下に落ちる。

「まさか、数値上では明らかにキミが劣っていたのにね」

フェイトが肩越しに振り返ると緋色がいた。

「そんなもんだてにすっから負けるんだ、状況を見る腐れ科学者が！」

三つの閃光

緋色が何とかスカリエッティに辿りついた頃、一光はと言えば意思を取り戻したヴィヴィオと操手であったクアットロを幾層もの壁ごと撃ち抜いてカートリッジをほとんど使い果たしたなのはを背に一歩も引かないネイキッドととの戦いの真っ最中だった。

「このっ！」

ネイキッドの振るう刃は全て虚空を薙いだ。一光の活性化状態エクシースモードは最大限にまで高められている、平たく言えば全力で漕いだ自転車とフルスロットルで走るバイクくらいの差だ。

「行けよ、五発分の！」

『破断撃！』

片手で振り抜かれたヘルヴィ・ソードがバツサリとネイキッドを袈裟に切裂いた。それまで防戦一方だった一光に対してネイキッドは油断していたのだ。

徐々にネイキッドは焦る、何でコイツはここまで強い、何で倒れない！？と疑問がグルグル頭を回る。

焦っているな、我おれよ。

頭に響く声は押し込めていた倉岡の声、ネイキッドの焦りに反して倉岡の口調は余裕そのものだった。

所詮お前は齊藤には勝てねえ。幾らゲート・オブ・バビロンを使え
様がゲーム通りのモーションしかできんお前は、負けるのさ！ネイ
キッド！！

ネイキッドの焦りを余計に煽る頭へ響く声、ネイキッドが背後に最
大級の扉を開く。

「これで終わりだ！雑種ウウウ！！」

剣・エアを抜くとAMF下にも関わらず膨大な魔力が刀身を覆う。
その様はまるで竜巻だ、一光も退く事はなくむしろ前進した。

かめはめ砲よろしく構えを取ると青い炎が手の中に生まれ、燃え上
がる。虚空に舞うセイグリットはヘルヴィ・イクサフォームで大剣
と銃を合体させた状態で宙を舞う。

「そりゃこっちの台詞だ腐れ英雄王！！」

間合いはみるみる詰まる、まるで小さな爆発と竜巻がぶつかる。

「エヌマア！！」

「遅いつ！」

一歩早く、一光が一度剣を引いて打つと言うモーションの最中に懷
に飛び込むと両手を突き出した。

「『我龍双煉掌！！』」

ネイキッドも踏みとどまろうと踏ん張る、魔力の渦は途切れてかけ

ているが消えていない。

（このままじゃゼストを巻き込みまう！！）

消えてない魔力の渦は、竜巻の様に引力を伴って一光が攻撃した事によりゼストの遺体に迫っている。一光の悪癖がここ出る、仮に一光が倒す事に執着していればネイキッドを一撃で葬る事が出来たかもしれない。

かもしれないけど、ネイキッドを押し退ければ倉岡が出てきてくれるかもしれない。そんな甘い考えがあった。

それに一光にとってどうしてかゼストを無下にできなかった、特別因縁がある訳ではない。幾度も戦ったわけじゃない。しかし、少女と共に居た彼と一戦交えた事か何故かゼストが頭のどっかに引っかって忘れる事が出来ずにいた。

『マスターのアホーッ！！』

因みにセイグリットはこの悪癖を知っていた様で例えば大切な戦闘中でもしっかり一光を罵倒している。しかし当人は無視してネイキッドをダメージ覚悟で押し出す。

「バカだ……けどアイツらしい」

緋色はスカリエッツィの拡大したモニターでその様子を見て呆れたが、すぐに鼻で笑った。

既に修理の効かない状態である、歩く度に装甲に亀裂が走り、サーベルを抜いてフェイトを束縛する魔力の糸を断つ。

「聖王は解放されて家族の元に帰り、ダチと死闘を繰り広げるバカはバカなりに答えを見つけて動く。」

「確かに、藤原緋色君。キミの通りだよ、こればかりは予測できないさ。誰にもね」

スカリエッツィが相槌を打って、緋色もサーベルからツインバスターライフルに切り替えた。フェイトもライオットブレードへ切り替えたバルディッシュを構え、並ぶとスカリエッツィの変化に気付いた。

白衣の下から覗く外皮は人の物ではない、上に纏う鎧はモビルデバイス。それも見た事もない形式でクジャクのように広げたりアユニツトはその全てが砲となっている。

「でも、キミ達は健闘したよ。」

「そうかい？切り札を速攻で切らせない様じゃ健闘じゃないな」

「何だ、それは……!?!」

フエイトが思わず息をのんだ、人が本当にこんな凶悪な物を作れるのかと。

「アバター、回収したレリックの力を御する鎧さ。ヒントは緋色君、キミだ」

「成程ね、ウイングゼロを模したエピソードと次にレオードは捨てるつもりでデータを集め、最後は暴走させた結果か。あえて言わせて貰うわ……命は玩具じゃねえぞ!!」

緋色が初めて怒りを露わにした、誰よりも冷静に現状を見る観察眼をもった緋色がスカリエッティに怒鳴りつけた。

冷たくなったゼストの腕中でアギトは目を醒ました。

気を失う前の現実言葉が出ない、目の前にはゼストの遺体が、死に顔があつた。

「あ……あ、ああっ!!」

彼女の掠れた悲鳴はゴォッ!と渦巻く魔力の音と爆発音にかき消される。

「がっ……ああああっ!!」

気合いを迸らせて、倒れてきたのは一光だった。

左腕は肩までジャケットが弾け、ギブスは碎けている。それでも起きあがるうとする。

「何やってんだよっ！」

「喧嘩……」

叫んだアギトに一光は呟くように返した。

ネイキッドは天を仰ぐようにして動かない、気を失っているのかは解らないが動かない今がチャンスに他ならない。

「カズ君！」

駆け寄ってくるのはとヴィヴィオ、アギトが何やら罵倒しているがスルーする。

ネイキッドは肉体の支配権を奪われた、と言うのは変だが。

倉岡卓也、彼が漸く表層に出たとき、気絶しそうな痛みに襲われた。

「あああああっ!!」

絶叫した卓也、なのははネイキッドが息を吹き返したのかとレイジングハートを向ける。

「うつさい！」

しかし突然、怒声と濃いピンク色の髪が目についた。後れて誰かが卓也を殴り飛ばした。

ゴロゴロと揉んどり打って転がる卓也、満身創痍のなのは達にとつては頼もしい助っ人が駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか！なのはさん！？」

「兄さん！ちよつと生きてる！？」

スバルとアミタだ、さらに後れてティアナが姿を現す。

その光景に一光は疑問を抱いた。

仮に未だアイツがネイキッドならスバルの拳なんて貰わない筈だと。

フェイトと緋色の元にエリオとキャロが到着した。しかし、状況を打破できるのかと言われたら無理だ。

生きた要塞に人が挑むようなもので、リアパーツが展開するや一度に八発の収束砲が放たれる。

避けながら前進し、砲口を潰そうとする緋色と馬鹿げた威力の砲を防ぐフェイト、ブーストを掛けるキャロも限界に近い。

何もできないエリオはただ歯痒い思いに耐える。

「私の期待外れか、Fの残滓であるキミ達がこの程度とは」

対してスカリエッティは余裕だった。

圧倒的な力を手にして油断している、スカリエッティには未だに気付いていない。

「うるせえよ、他力本願で勝てると思ってるの？」

緋色は何故か余裕を漂わせていた。

「何を言うんだい？キミはもう限界だろう、Fの残滓や仲間^{アイマー}に期待するだけ無駄だよ」

スカリエッティは気付かない。

「そりゃそうだろう、みんな満身創痍だ。けどな」

緋色が閃光に包まれ、瞬く間に装甲が再生・再構築されていく。スカリエッティがいぶかしむ間もなく二つの閃光が左と右の砲台パーツを吹き飛ばした。

「受け売りは厳禁だ。緋色」

「そうだが、貴様らだけ美女達の中に……」

ライトニング同、と言ってもシグナムが不在だがビックリする変化だ。ネイキッドの外見で言動はまるで違うその人に。

「ほう、戻されたかい？ 倉岡卓也くん」

「俺の限界突破はスルーかい！！」

「おう、詐欺師のスカちゃんよ。ネイキッドが意思もったんのは俺も驚いたが誰が危険物取り込んで増強した言いつたか今畜生！！」

卓也はされた事にブチ切れ、緋色は魔力エンプティ一步手前だがエリオより装甲分の魔力を分けてもらったがスルーされてキレる。

「す、スカちゃん……！！？」

少し、どころではないkYぷつり。

一気に緊張の糸が切れたフェイト達、キャロは必死に吹き出すのを堪えている。

「詐欺とは酷いな、君が望んだ力を実現させたじゃないか」

「その力に意志が芽生えるなんて聞いてねえわ！ 大体、コイツ等と殺し合わせたよなっ！？ それに俺は我を失っていたとは言え……」

「

ブルブル震える卓也、後れてなのはに支えられて現れた一光は目の前の光景が酷く懐かしかった。

「可愛い子に手を挙げたっ！これは万死に値する所業だ！！」

「アホかつ！」

高らかに宣言、スカリエッティに言い放つ卓也に緋色がツツコンだ。

「痛いんだけどっ！？」

「うるっさいわっ！スカリエッティと何親しげにしてんだ！？」

「煩いっ！ロリからボインまでっ！コイツの娘とやらは実に可愛かった！！」

そんなやり取りを見て呆れるのはと首を傾げるヴィヴィオ、苦笑している一光。

そう、揃ったのだ。

「まさか、本当に死体まで気に掛け、彼を撃破して倉岡君を助けるとは…………よく体が保つ物だ」

卓也と緋色のコントのようなやり取りを無視し、スカリエッティは一光に言った。

「生憎、人並み以上に頑丈だね。面と向かって話すのは初めてだが、あえて問う。アンタにはそこまでして成し遂げる価値があるのか？この戦い」

一光が言うのは、あくまでもスカリエッティの生み出した少女達のことだ。

強いショックを受けた様に見えるセットの目には光が宿っていない。
起きたことは予測がついた、限界の越えた身体に無理言ってセイグリットを構える。

「ある、と言うのが私の答えだよ。キミは我が娘達に大きな影響を与えた、それは感謝しているよ。私では成し得られない事だからね」

「そうかい、それじゃあ俺らのデータを利用して生み出したソレを砕けば……終いか？」

「ああ。キミ達が愛娘の聖王を倒さない限り、私への魔力供給は止まらない。無理だとは思うが、やってみると良い」

一光が、なのはから離れて緋色と卓也と並ぶ。

三人がそれぞれの武器を構え、対するスカリエッティはクジャクのようなフォルムから騎士を思わせる鎧姿に変わり、巨大な魔力の剣を構えた。

「魔装騎士気取りですか……上等！」

ツインバスターライフルを構える緋色。

「『我を利用したこと、後悔するなよ？雑種！』」

右目が黒、左目が赤へ変化した卓也がゲート・オブ・バビロンを開き、柄を掴む。

「つたく、いつの間に卓也はネイキッドを使役してんだ？」

ヘルヴィフォームに変え、銃^{ザッパ}を向ける一光。

「『使役じゃない、協力だ。』」

「さっきまでどっちが主導権握るか争ってたのにな・・・」

「『存外、我と俺は似た者同士の様だ。利用されたことが気に食わんし・・・何より大暴れしたい気分だ！』」

「単純オツ」

「『何だと！！』」

「まあ、どうでも良いや。助かるし、ちゃっちゃんと蹴りつけて帰ろうか？マジしんどいから」

「ヴィータも重傷だしな」

緋色が引き金を引く。

放たれたバスターライフルは見事に脚部パーツを消し飛ばす。

不意を突かれたスカリエッティがパーツの再構築に掛かる。

「不意打ちとはやるじゃないか！」

巨大な刃が振り抜かれた、軌道上にはなのはを始めにフェイト、エリオとキャロ、ヴィヴィオとセツテがいる。

緋色達に避けると言う選択肢はない。

『マスター、予備マガジン後一本ですよ』

「そんなじゃ残弾全てスカリエッティに叩き込むか。と言うわけだ、卓也！」

刃が、刃によって止められた。

それも一本ではない、剣の壁がスカリエッティの振り抜いた刃を妨げている。

「なのはちゃん！フェイトちゃん！！」

そこにヴィータを抱いたはやてが合流した。

「はやて、動力炉は？」

「ヴィータが破壊してくれた。後はアタシ等の脱出と……」

はやてはそこで言葉につまる。

本当なら「スカリエッティを逮捕して終いや」となるのだが、三人が相手にしている敵は人の姿ではない、人型の何かだった。

言い表しがたいソレに向かっていく一光を緋色とネイキッドが表裏一体になった卓也が援護する。

その何かが腕を大降りに振り返す、間髪いれずに緋色がバスターラ

イフルを撃ち込むと鎧を形成していた魔力が碎ける。そしてスカリエッティが再構築を始める。

はやての前で、なのはの前で、フェイトの前で続くサイクル。

一光は重傷なのに戦っている。

緋色も決して軽い怪我程度ではない、装甲越しに何度も喰らった爆発やレオードの突撃で鎧の下は満身創痍だ。

卓也は言うまでもない、一光と殺し合って既に立っている事すら不思議なくらいの重傷のはずだ。

対して、スカリエッティは疲弊しないで立っている。あのモビルデバイスの再生コストも聖王モードのヴィヴィオの魔力だ。

レイジングハートを強く握りなして、なのはが一步踏みだした。続いてフェイトも真ソニックフォームから切り替え、バルデッシュを握る。

「行こう、皆」

なのはがそう言う。一度アースラに引き返していたスターズメンバーが追いついて返事を返した。

「私達も……」

フェイトに続いてエリオとキャロも並んだ。

はやては一人唇をかみしめながら背を向けた、上の中のヴィータは

虫の息だ。早くしないと死んでしまう。

「ごめんな、皆」

そう呟いたはやて、轟音が掻き消した。

決着、そして新しい道（前書き）

相当グダグダしたJ・S・事件編完結！

決着、そして新しい道

戦艦・クラウディアの艦橋ブリッジでクロノは少し焦っていた。

『大丈夫、なのは達には彼がいる』

通信モニターに映るユーノはそう言った。

「随分と信頼しているんだな、齊藤の事を」

クロノが真顔で、あるデータを見ながら返答した。

それは機動六課からのある魔導機関の開発依頼、本局のメカニックスタッフが悲鳴を上げた物だ。

搭載したら単騎で戦況を一変させるだけの性能を発揮する。

ロストロギアに指定されも可笑しくない代物だった。

『大丈夫ですよ、クロノ提督。』

柔らかな笑みを浮かべてモニターの騎士・カリムは言う。

「……………そうですね、彼らの処遇についても検討しないと」

何だかんだで民間人が踏み込んでいるのだ、過去にも似たようなことはあった。

その度にクロノは現場に居合わせていたりもした。

『彼らにその気があるなら私が拾うわ』

意外な人物からの通信だった。

「サイズをつ」

「『考えろお!!』」

氷塊を受け止めた二人の怒声が響く。

劣勢に変わらない、一光と緋色と卓也は奮戦していた。

なのはとフェイトの砲撃が装甲を撃ち抜き、氷塊に沈んだ剣を引くスカリエッティは装甲の再構築に意識を向ける。

「まったくシツコい、いい加減諦めないのか？」

「私達は諦めない！」

「絶対に！」

なのはとフェイトが言い切る。再び、スカリエッツィが鋭利な刃を振ろつと振り上げるとあいた懷に二つの影が飛びこんでいく。

「あああつ！」

ギーン！と言う金属音と共に大剣を叩き込んだアミタが表情を曇らせた。ガジェットを切裂くだけのキレ味ではスカリエッツィが用意したアバターなるモビルデバイスを切裂く事は出来ない。

そう、出来ない様に調整したのだ。

「堅いつ」

「キミ達のデータは既に解析済みだよ、特にキミ達兄妹と藤原君はね」

スカリエッツィが言いきるより早く、顔面をバスターライフルが捉えた。

「ほら、大して効いて無いじゃないか。」

僅かにダメージを受けてもスカリエッツィの余裕は崩れていない。

「『エヌマツ！』」

卓也の気合いが迸る。

バスターライフルは布石、直撃で僅かな間でもスカリエッツィから視野を奪うための攻撃だった。

「成る程、悪くない——」

「『エリツシュ!!』」

螺旋を描いた収束砲がスカリエッティを捉えた。

「ちったあ効いてると良いが……」

スカリエッティを覆う煙を睨みつつ、一光は呟く。

前に飛び出していけば渾身の一打を放てる。しかし、あの装甲に阻まれては意味がない。

確実に“本体”へ叩き込まないと。

一歩、また一歩力強く踏み出す。

聖王モードの魔力を転用する、と言っても限界はあるはずだ。と言っても先に限界を迎えて倒れるのは一光や緋色、現状を維持する六冠面々だ。

スカリエッティのダメージは殆んどない状態からの戦闘スタート、加えスカリエッティの切り札モビルデバイスは一撃がスターライトブレイカークラスの威力を誇っている。

一光たちが無事なのは重傷ながらも奮起する卓也のおかげに他ならない。

『さて、エクシアが完成していたら結構楽だったんじゃないですか？』

セイグリットが現状で一光専用に設計した切り札を呟いた。

「ない物に期待しても仕方ない……最大火力、最速で奴のド頭^{たま}をブツ飛ばす！」

一気に青い電光がバチィ！と立ち上る。セイグリットは幾度とない防御で半壊している、コアが銃^{ザッパ}の方になれば既に機能していないだろう。

煙が晴れ、スカリエッティがその拳を握る。大きさからして大体小型冷蔵庫くらいの拳が後ろに引かれ、再構築と共にスカリエッティは狂喜の笑みを浮かべる。

そう、なのは達正規の局員はこのモビルデバイス・ダークベルグを破る事は出来ない。しかし、それは一光たちとて同じだ。

それでもモビルデバイスの創設者が揃っている以上、共通の弱点も知っている事になる。

「さあ、終わりにしようじゃないか！予言の出した閃光の力を見せ

てくれ!!」

スカリエツティは知っていた様で、真っ向から迎え撃つつもりらしい。加減をしないで踏み出したために一光は軌道変更も、微細な回避も出来ない。そうでなくても限界の身体を引きずった戦闘だ、この男にとっても最後の一撃である。

「残念だが、こっちはお前より速いぞ」

既にスカリエツティを射程に捉えた一光が、その掌内に収まる光球を押し出す。

「最大火力ッ!!」

スカリエツティの顔面を捉えた光球から青い閃光が、青い炎がバツクドラフトのように爆発する。

「我龍双煉掌ッ!!」

悪役特有の絶叫も掻き消す爆音にヴィヴィオは座り込んだ。なのはやフェイト達もその有りように年齢相応に引け腰で、その爆心地を凝視する。

「流石はターミネーターだな」

白い翼が見え、いつもの間の抜けた声が聞こえる。そこでようやくなのは達は金縛りから解放され、スカリエッティを引きずってきた緋色を直視できた。

既に装甲はない、両腕の装甲は消えて行く。

モビルデバイスとて限界がある、ウイングゼロは主を守って一時の機能停止に落ちいてるのだ。

「『良くやったぞ、雑しゅぶっ!?!』」

「ちよつと邪魔!」

未だ完全に晴れぬ白い煙の中で、卓也が誰かに殴られた。最も咳をしながら現れたスバル、同様に煙を払うような仕草で並んだティアナと懷まで潜りこんでいたメンツが現れると足りない一人が犯人だ。

黄金の鎧が、その残骸を纏う卓也がのたれている。

なのはもそこで初めて、決着をつけた当人に駆けよる。

「ちよっ!カズ君!?!ねえってば!!!」

アミタに支えられた、と言うより完全に意識を失って支えようとしているアミタを押し潰している一光は血塗れだった。

さっきまで動いていた、激戦の中で戦い続けたとは思えない重

病人は虫の息だったのだ。

「救護班到着っスー!!」

通信を試みようとしたフェイト、必死に叫んでいるのは、一光を抱えて走り出し駆けていたスバル、アミタを励ますティアナ、その場にいた全ての意見が「ナイスタイミング!」であった。

現れたのはライディングボードに乗ったウエンディ、それに便乗する形でチンク。ブリッツキャリバーをフルスロットルで吹かしたギンガである。

「早く、そいつを乗せろ。殺すには惜しい!」

チンクの掛け声にスバルは素早く応じる。追う様になのはやヴィヴィオ、フェイト達は帰還の路についた。

以外にも場には残ったのはアミタとギンガ、チンクだ。未だに茫然とするセツテへ歩み寄っていく。

「あの、さ・・・キミも一緒に」

アミタが言葉を選んで声をかけるとこちらを向いたセツテの目には光が宿っていない。

どんよりとしたガラス玉の様だ。

「私は・・・」

「来い、セツテ」

チンクが言つとアミタよりも僅かだが明確にセツテは反応を見せ、アミタは帰路に着いた。説得はやはり姉妹が一番いいかもしれない。

結果、事件首謀者・スカリエツティは民間協力者及び機動六課の手により逮捕。ゆりかごの停止と多大な功績を六課は残す事になり、本局の艦隊が到着し、現場の後処理が始まった。

それからしばらく、ごたごたが続いて……。

六課の運用期限が後少しとなった二月、なのはとフェイト、はやての三人は聖王病院にいた。

ヴィヴィオのリンカーコアに無理やり融合させられていたレリックは分離させることに成功し、精密検査の結果、今や健康体。

そんなヴィヴィオもとてとてと病室へ向かう。

ネームプレートには彼の名がある。

「パパは起きてる？」

ヴィヴィオが駆けよってなのはに尋ねる。

「うん、先生の話だと目を覚ます筈だけど・・・」

フェイトとはやては黙ったまま、既に目を覚ますと医者から聞かされてから四か月は寝たっきりの意識不明だった。ヴィヴィオとアイナだけでなく、仕事の間を縫っては見舞いに来ていたフェイトはやてもまだ目を覚ました一光に会ってはいない。

「それじゃ行こう？」

六課解散まで後二カ月、それまでに目を覚ませば一光の居場所を用意できるとはやては踏んでいる。少なくとも保護観察とかそう言った事も含めて。

扉を開けるとまっ白い空間が広がっている、そこに立つ人影があった。はやてが先に、先頭切って入っただけに少しばかり目をこする。

「あ、おはよう。チビため部隊長。」

刹那、はやてはムツとした。が、一光が目を覚ましたと分かった途端に乾いた笑いが漏れる。

「あ・・・」

フェイトは信じられない様な物を見る表情で少しばかり硬直。

「何だよ？フェイト、お化けじゃないぞ？なのは、ヴィヴィオ、お

はよう。」

ヴィヴィオが駆け出す、なのははゆっくり歩みだす。自らの中で大きくなっていたその人に。

「パパー！」

「っと、どうした？急に」

ヴィヴィオが飛びつくと一光は壁に背を預けた。受け止めきれぬ程回復したわけでもないのだ。

「カズ・・・くん？」

「おう、なのは。終わったな？ようやく」

「カズ君！！」

まるで幻でも見た様に眩くなのはに、一光は笑って返した。するとなのはの目じりに涙が浮かび、駆けよって抱きついた。

「うごくっ！？」

ゴキッ！とヘンな音がした、少なからず生物的に不味かろう擬音が響いた。

「カズ君！カズ君！カズ君！」

「ちよっ、なのは！カズが！！！」

「なのはちゃん落ち着きいな！カズ君死んでしまつて！白目向いとるし！！」

焦つてはやてとフェイトがなのはを止めに入る。

一光は奇跡的に生還を果たした、結果的に左腕の麻痺と言う後遺症だけですんでいる。当初は回復は絶望的とみられた英雄の生還に各所メディアは遅れてインタビューに押し掛ける等、面倒が続いたが。

一光は管理局員への道を歩む事にした、緋色はウイングゼロの修理後、管理外世界、こちらの地球に帰ると言う。立場を囑託魔導師に置き換え、事あらば協力すると言う事だ。

倉岡卓也、彼についてはスカリエッティに利用されたとしてかなり減刑された。

無期懲役でもおかしくない所を懲役80年まで、まあぶっちゃけ無期懲役みたいなもんだがネイキッドと双方の意思は協力的であるとして仮釈放の余地も検討されているらしい。

チンクを始め、ノーヴェ・ディエツジ・ウェンディはゲンヤが引き取り、意識不明の間にセツテは齊藤家・・・正隆が引き取ったらし

い。

それぞれが未来に向け歩みだす、そのスタートと思えば良いのではないか？と言うのが今の一光の心境でも本音でもある。

J・S・事件、大切な物を気づかせてくれた一光にとって人生の分岐点になる事件であった。

後悔はしない、これから歩み続ける。

決着、そして新しい道（後書き）

オリモビルデバイス：ダークベルグ

モデル・元ネタはデストロイガンダム、背中のバックパックをSDガンダムに出たバルバトスに変えた感じがイメージ。

設定：スカリエツティが一光・緋色らの運用データを盗用して製作された切り札、砲撃戦用のフェラムフォーム、近接用のナイトフォームを持つ。

フェラムフォーム時は背のリアユニットをクジャクの羽根の様に広げ、羽一枚一枚が砲塔として機能する。これにはストライクのランチャー・ウイングゼロのバスターライフルのデータが生かされている。

ナイトフォーム時のメイン武装はナックル及びバスターソード、バスターソードはAMF発生装置を内蔵している為、魔法による防御は困難。物理防御も同様にそのサイズ・質量から不向き。

モビルデバイス共通して言える弱点として使用者の意識混濁、あるいは意識喪失により機能停止するという部分を突かれ、管理局が回収・破棄凍結している。

オリ主ステータス？（前書き）

姉妹、vivid、エクリプス時ステータスになります。

オリ主ステータス？

・ さいとうかずひろ
齊藤一光

・ 年齢：27歳 / vivid時：25歳 / 姉妹編：22歳

・ 技術試験部所属：一等空尉 / 特務六課所属：特別一等空佐

・ 身長：181cm

・ 体重：69？

・ 趣味：読書・昼寝・森林浴・散歩・モバイルデバイス開発原案製作

・ デバイス：セイグリット・ヘルヴィノダブルオー・クアンタノラ
イザーノエクシア

・ 魔法体系：魔力運用技術、フォーミュラ・エルトリア

・ 魔力変換資質：炎・氷・電気

・ 所有資格：戦技教導官 / 戦技教官 / 戦技試験官 / 小隊指揮官 / 特
S級デバイスマイスター

・ レアスキル：粒子化 / ショートジャンプ短距離瞬間移動 / 意識共有空間作成

・備考

英雄と謳われた青年、事件後に管理局員を目指し、なのはの紹介で訓練校へ出向いた。

訓練中にミゼット・クローベル提督により引き抜かれ、基本的な事以外教わらぬまま伝説の三提督共有戦力として入局。（機動六課で基礎は固まっていた為に訓練校は形式だけ）

J・S・事件での功績が評価され、入局後すぐに一等空尉に着任。
事件当時に設計したロストログニア並みの機能を有するMGドライヴ^{マジックギア}を製作・完成させ、デバイス開発に貢献している。

度重なる次元犯罪者逮捕等の功績を上げ、爆発的な昇格を果たした。

セイグリット修理中はダブルオー・クアンタを使用、武装はMGソードノライフルモード（？！）及びソードビット、フォトンカノン内蔵ビットラックシールドとシンプルだが、MGドライヴ二基使用による副産物・ショートジャンプ及び魔力粒子化、意識拡大空間作成が可能になった。

これは便宜上レアスキルとして処理されている。

六年の間にモバイルデバイスも復旧、同時に訓練校に出向き、訓練生の相手をする際には初MGドライヴ搭載型として開発・設計したエクスシアを使用する等多忙な様子。

フェイトとはやては親友として、なのはとは事件以後、恋仲に発展して現在交際中。

管理局の切り札の一枚として、プライベートも全力で過ごす。

特務六課の^{ラストカード}最後切札として出向いている。

単独行動権限があり、エクリプス事件発生直後から最前線で飛び回っている。

プロポーズするか否かは二年前からの悩み。

オリ主ステータス？（後書き）

第二部ステータス（仮）

始まりの兆し

J・S・事件から一年が過ぎ、事件後のゴタゴタも収まり始めた。

未だに地上本部の長は決定せず、リンディ提督が仮とはいえ代理を務めている。

局員となった一光は、地上本部に配備されるモバイルデバイス・ダガーシリーズの開発に追われていた。

現在の肩書は一等空尉、MGドライブの完成が高く評価されて、多くの事件解決の実績も踏まえ昇進した。その分、要求される結果はハードルが高くなっていく。

仕事面も充実する中、プライベート面もそれなりと。

「カズ君、今日は地上本部で会議？」

六課解散後、ミゼット提督によって訓練校から管理局員に飛び級する様な形となった一光は、クロノが指揮する次元航行部隊に所属することになり、悶々としていた思いをなのはに打ち明けた所、なのはは受けてくれた。

平たく言うとなのはに告白して、OKを貰ったのだ。

「ああ、正式採用が決まったダガーの機能説明」

一光となのはは現在同居中、ヴィヴィオも居ることで傍から見るとおしどり夫婦に見えるらしいと言うのはアミタ談。六課からの延長

見たな感じで違和感なく、と言うと嘘になるが次元航行中で留守のフェイトも込みでヘンな生活が続いている。

フェイトとはやて、ヴォルケNZとは親友として変わらぬ付き合いが続いている。時折、目を輝かせてシグナムが模擬戦を迫る時があるのは耐えがたい。

『と言っても、ダガーは説明する所がないですよね』

セイグリットは事件後に大きく破損していたから修理、その間はダブルオー・ライザーを使用していた。最も、MGソードのデータを早くとらないと本当のフレームに変えられない。

セイグリットは修理も終えて今ではダブルオーと共に支えてくれている。

「そうだな、扱いやすさを理解して貰えればそれでいいさ」

「パパも大変だねえ」

ヴィヴィオは、今一年生として学校に通い始めている。友達もできたみたいで正直安心。そんなヴィヴィオは最後の聖王化でなのはとぶつかり、何だかんだで二人とも似た所があると言うのが事件後のヴィヴィオ談。

「そうでもないさ、これが済めば暫くは休める。」

「ほんと!？」

「そっか、それじゃスケジュール調整しないかね」

パア！と明るくなるヴィヴィオと微笑むのは。その風景は家族の朝食くらいにしか映らないだろう。

次元拘置所、そこには一光と緋色の親友が一人収監されている。

「こい、倉岡卓也。」

警備員に引き連れられ、面会所に向かう彼は少し痩せていた。利用された等、知ればれば卓也が自らの意思で先の事件に加担したわけではないとフェイトやギンガ、捜査部一同の努力で証明されて大分刑期が減らされたがまだまだ、釈放までは長い。

そんな男を尋ねたのは緋色だった。

「何だ、お前かよ」

「んだよ、人かせっかく暇してそんな奴の顔見に来てやったのに」

そう言う緋色は囑託魔導師に落ち着いてはいるが各部隊からオフアーが絶えない。かつての事件で英雄とされた片割れだから、仕方ないのかもしれないが。

「そう言うからだ、どうせならセツテか……チンクの方がよ
かったわ」

「……女好きめ」

「悪いか？ヘブンに居た貴様と違ってな」

「うるせえ、六課は確かに女子比率が高かった。レベルもな、それ
以上に命の危機もあったんだ！」

ほう、と言う感じの卓也に緋色は云い募るのをやめた。

「希望の二人は保護施設だって、それにセツテは齊藤の義妹になっ
てる。」

「ぐう！毎度聞いてもショックを感じるのは何故だろうな！？」

「さあ？アイツが変えたんだからな。皆……それに今じゃリア
充だしな」

「頼む、いっぺんアイツを倒せ」

「出来ればな」

そんな会話を面会室でしていた緋色。

「ダガータイプの利点は、その汎用性にあります。」

会議モニターにダガーのカタログスペックが表示され、注目される。

「まず、ノーマルで運用した場合、最大十二時間稼働。標準装備のライフルは先のJ・S・事件で運用したストライクのライフルと比べ、扱いやすさの向上、威力も遜色ありません。使用者に応じカスタマイズできる点でも個人の要求に幅広く応じることできます。」

モニターにはダガーの改造例が幾つか表示され、上層部の連中から各部隊長が食い入るように見ている。はつきり言って一光としては一年前、ダガーの試作機・ストライクで実演してやったつもりだがリンディ提督は当時の戦闘を見ていないし、地上本部襲撃で記録されてた大半がオジャンという結果だ。

更にストライクは地上本部襲撃の際に大破と。

「戦闘面についてはどうなのかね？」

本局・戦闘統括管理官、所謂紛争の絶えない世界に赴き、事を鎮圧する部隊の指揮官のレグザ・オーヴェが役職がら当然の質問を投げる。

「ノーマルでも十分戦闘に対応できますが、トリアルストライカーパックの・・・試作型と同様にフォームチェンジで遠近の対応が利きます。各フォームの性能は手元の資料にある通りです」

滞りなく、一光は説明を終えて席につく。

レグザは、何故か一光を睨んでいた。

「他に質問のある方は？」

その問いかけは会議終了が近い事意味していた。モバイルデバイスの機能説明に必要な以上の時間は必要ない、カタログスペックだけ上げれば、後は使用者の技量による部分が大きいからだ。

ダブルオーもウイングゼロも同様、いくら優れたシステムや動力機関を搭載していても使用者がカスでは宝の持ち腐れなのだ。

「ふう……」

廊下で一光は息を漏らした。

「おう、お疲れ」

「ナカジマ三佐、どうしたんですか？」

「いや、ようやく地上の悩みが一つ解決するなと思ってな」

地上本部は、海と比べて毎年新人魔導師の配備が悪い。どうしても

事件の規模が違う本局側に取られがちになってしまっ、前任者であるレジアスも平和を願うばかりに道を誤った。

ゲンヤから相談された一光は、リンディも同様に後手に回る人手不足に悩んでいた為、非魔力保有者でも第一線で動けるモビルデバイスの開発を依頼され、基本的にダガーは地上本部に配備される動きで開発を進めた機体でもある。

先の事件中、その問題をレジアスは戦闘機人で補おうとしていた。戦闘機人は道徳的にどうかで禁止されている、レジアスの親友で、事件中に矛も交えたゼストとゲンヤの妻・クイントも戦闘機人事件を調査している最中に殉職している。ある意味、この問題は裏で悲劇の連鎖も生んでいた。

「最終審査を終えても全部隊に配備出来るまで少なくとも数年は必要ですよ。先行量産だけじゃ武装隊が良いとこ限界です。それに人材育成も」

「そうかい？一筋縄じゃないか。高町の嬢ちゃんとは上手く行っているかい？」

「えー、まあ。どうでしょう？」

「争いなく行ってるってこたあ良いじゃねえか。」

「まあ、そうですね……」

齊籐家、先の事件で加わった・・・養子に迎えたセツテと定時連絡が行われていた。

保護施設には別世界に家族・親類がいる場合、数時間程度の次元通信が許可されている。

施設を利用するナカジマ姉妹とセツテは齊籐家の人間と仲が良い、取り分けアマタ・・・アミティエ・F・齊籐と。

「こんにちは、姉さん」

セツテは小さなモニターに映るアマタへ一礼した、と言っても会釈程度だ。

『あ、そっちは昼間なんだね。こんにちは、元気？』

アマタはパジャマだった、地球が夜である事を伺わせる。

「はい、一つ妙なことを聞きますけど良いですか？」

セツテは最近のキシカンと他人の記憶、その違いを気にしていた。

『何？』

「去年ですよ？兄さんが事件に巻き込まれたのは？」

当たり前、とアミタは言い掛けて言葉を飲んだ。

『何でそんな事を？』

「少し気になるデータがありまして、姉様方は違和感を覚えないようですが・・・」

『解った、少し調べてみる。』

アミタがそう言うとセツテは少しホッとした。

かつて、スカリエッティがアジトにしていた地下研究所にレグザはいた。

「それで、認識の誤差は？」

レグザが闇に問い掛ける。

「そうね、運命の守護者と放浪者、二人と関係の深い者を除いて大方完了ね」

闇から言葉が返ってきた。

レグザの口端がつり上がる。

「それで、私への影響は？」

「無いとは言えないけど、殆ど無いと思っていいわ。」

闇に浮かんだ人影はそう告げると消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9512r/>

NANOHA the origin

2011年12月5日20時53分発行